

た の う ら い せ き
田ノ浦遺跡

へいせい ねん どころ ちやう さ
—平成17・18年度調査—

2007

財団法人 山口県ひとづくり財団
山口県埋蔵文化財センター



縄文土器



製塩土器

序

本書は、中国電力株式会社の委託を受けて、財団法人山口県ひとつづくり財団が実施した上関原子力発電所建設に伴う詳細調査に係る埋蔵文化財発掘調査報告書です。

遺跡の所在する熊毛郡上関町は室津半島の南端に位置し、隣接する平生町や柳井市では岩田遺跡や与浦遺跡、黒島浜遺跡といった著名な縄文遺跡が発見されています。また、古代から海上交通の要所として知られ、国東半島と航路を結んでいた祝島の名は、万葉集にも詠まれています。

このような長い歴史を背景にもつ地域で行われた発掘調査では、縄文時代前期から中世にいたる長期にわたる人々の暮らしを示す数万点の遺物が出土しました。中でも、県内屈指の出土量をみた縄文土器や古代の製塩土器は、山口県のみならず西部瀬戸内海周辺地域の歴史を考える上でも重要な資料といえます。

調査記録を収集した本書が、学術研究の資料として、文化財への理解を深めふるさとの歴史を学ぶための教材として幅広く活用されることを願うものです。

おわりに、調査の実施にあたってご協力いただきました関係各位ならびに地域の皆様に対し、厚くお礼申し上げます。

平成19年 3 月

財団法人 山口県ひとつづくり財団
理事長 村 岡 正 義

例 言

- 1 本書は、平成17・18年度に実施した、山口県熊毛郡上関町大字長島地内に所在する田ノ浦遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、上関原子力発電所建設に伴う詳細調査に先立ち、財団法人山口県ひとづくり財団が、中国電力株式会社上関調査事務所の委託を受けて実施したものである。
- 3 調査組織は次の通りである。

調査主体 財団法人山口県ひとづくり財団 山口県埋蔵文化財センター
調査担当 文化財専門員 石 井 龍 彦
 文化財専門員 安 村 隆 博
 文化財専門員 児 玉 勉
- 4 調査に当たっては、山口県教育委員会、上関町教育委員会並びに地元関係各位から、協力・援助を得た。
- 5 本書の図1は、国土地理院発行の5万の1地形図「柳井」「室津」「光」を複製使用した。
- 6 本書に使用した方位は、国土座標（世界測地系）の北で示し、標高は海拔標高（m）である。
- 7 石材の鑑定は、次の方に依頼した。記して謝意を表す。

山口県立山口博物館 主査 亀谷 敦氏（鑑定方法は表面観察による）
- 8 調査や出土遺物の整理にあたっては、次の方々・機関にご指導を賜った。記して謝意を表す。

上田 秀夫 金関 恕 木下 尚子 澤下 孝信 菅波 正人 武末 純一 防府市教育委員会
- 9 本書に使用した土色の色調表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局（監修）『新版標準土色帖』Munsel方式による。
- 10 図版中の遺物番号は、実測図の遺物番号と対応する。
- 11 遺物の出土地点については、Ⅲ 調査の成果2. 遺物の項の末尾に一覧表を掲載した。
- 12 本書で使用した遺構略号は次の通りである。

SK：土坑 SP：柱穴 ST：墓 SX：用途不明遺構
- 13 本書の作成及び執筆は、調査担当者が共同で行い、編集は石井が行った。
- 14 挿図中、土器の網かけは赤色顔料塗布部分を示す。
- 15 各調査区の名称は調査年度により17-1区、18-6区の様を示し、両年度にわたり調査を実施した調査区は、17・18-4区のように表記した。

本文目次

I 遺跡の位置と環境	1
II 調査に至る経緯と概要	3
III 調査の成果	5
1 遺構	5
2 遺物	28
IV まとめ	109
V 付編	114

挿図目次

第1図 遺跡の位置と周辺の主な遺跡	2	第16図 17-1区北壁・東壁土層断面図	18
第2図 周辺地形図	6	第17図 17-2区北壁・東壁・南壁土層断面 図	19
第3図 調査対象地地形測量図	7	第18図 17-3区北壁・東壁・南壁土層断面 図	20
第4図 調査区設定図	8	第19図 17・18-4区北壁・東壁土層断面図	21
第5図 17-1～3区, 18-6区遺構配置図	9・10	第20図 17・18-4区南壁・トレンチ13西壁土 層断面図	22
第6図 17・18-4・5区, 18-7区遺構配置図	11	第21図 17・18-5区北壁・東壁・南壁土層断 面図	23
第7図 17-3区SK02・03実測図	12	第22図 17・18-5区西壁・トレンチ15東壁, 18-6区トレンチ1北壁・トレンチ3 北壁・トレンチ4南壁・トレンチ5 南壁土層断面図	24
第8図 17・18-4・5区, 18-7区グリッド設 定図	13	第23図 18-6区東壁土層断面図	25
第9図 17・18-4区遺物包含層縄文土器 出土状況実測図	13	第24図 18-7区北壁・東壁土層断面図	26
第10図 17・18-4区遺物包含層縄文土器出土 状況実測図	14	第25図 18-7区南壁・トレンチ10東壁土層断 面図	27
第11図 17・18-4区B-6グリッド遺物包含 層黒曜石塊出土状況実測図	15	第26図 縄文土器実測図①	28
第12図 17-2区箱式石棺墓実測図	16	第27図 縄文土器実測図②	29
第13図 17-1区SK01実測図	16	第28図 縄文土器実測図③	30
第14図 17-3区遺物包含層 弥生土器出土状況実測図	17		
第15図 17-1区遺物包含層 木製品出土状況実測図	17		

第29図	縄文土器実測図④	32	第64図	石製品実測図⑨	71
第30図	縄文土器実測図⑤	33	第65図	石製品実測図⑩	72
第31図	縄文土器実測図⑥	34	第66図	石製品実測図⑪	73
第32図	縄文土器実測図⑦	36	第67図	石製品実測図⑫	74
第33図	縄文土器実測図⑧	37	第68図	石製品実測図⑬	75
第34図	縄文土器実測図⑨	38	第69図	弥生土器実測図①	77
第35図	縄文土器実測図⑩	39	第70図	弥生土器実測図②	78
第36図	縄文土器実測図⑪	40	第71図	弥生土器実測図③	79
第37図	縄文土器実測図⑫	41	第72図	弥生土器実測図④	80
第38図	縄文土器実測図⑬	42	第73図	石製品実測図⑭	81
第39図	縄文土器実測図⑭	44	第74図	土師器実測図①	83
第40図	縄文土器実測図⑮	45	第75図	軟質土器実測図, 土師器実測図②	84
第41図	縄文土器実測図⑯	46	第76図	土師器実測図③	85
第42図	縄文土器実測図⑰	47	第77図	土師器実測図④	86
第43図	縄文土器実測図⑱	49	第78図	須恵器実測図①	87
第44図	縄文土器実測図⑲	50	第79図	土師器実測図⑤	88
第45図	縄文土器実測図⑳	51	第80図	土師器実測図⑥	89
第46図	縄文土器実測図㉑	52	第81図	土師器実測図⑦	90
第47図	縄文土器実測図㉒	54	第82図	移動式カマド実測図	91
第48図	縄文土器実測図㉓	55	第83図	須恵器実測図②	92
第49図	縄文土器実測図㉔	56	第84図	須恵器実測図③	93
第50図	縄文土器実測図㉕	57	第85図	緑釉・灰釉・瓦器・黒色土器・陶磁器実測図	94
第51図	縄文土器実測図㉖	58	第86図	製塩土器実測図①	95
第52図	縄文土器実測図㉗	59	第87図	製塩土器実測図②	96
第53図	縄文土器実測図㉘	60	第88図	製塩土器実測図③	97
第54図	縄文土器実測図㉙	61	第89図	土師器実測図⑧, 瓦質土器実測図	97
第55図	土製品実測図①	62	第90図	土製品実測図③, 石製品実測図⑮, 金属製品実測図	98
第56図	石製品実測図①	63	第91図	土製品実測図④	99
第57図	石製品実測図②	64	第92図	土製品実測図⑤	100
第58図	石製品実測図③	65	第93図	石製品実測図⑯	101
第59図	石製品実測図④	66	第94図	木製品実測図	102
第60図	石製品実測図⑤	67			
第61図	石製品実測図⑥	68			
第62図	石製品実測図⑦	69			
第63図	土製品実測図②, 石製品実測図⑧	70			

図版目次

- 図版 1 調査区遠景(東から) 17・18-5区北壁土層断面(東部), 17・18-5区東壁土層断面
- 図版 2 調査区遠景(西から), 調査区遠景(西から) 17・18-5区南壁土層断面, 17・18-5区西壁土層断面
- 図版 3 全調査区完掘全景(合成写真) 図版10 18-6区トレンチ1北壁土層断面, 18-6区トレンチ4南壁土層断面
- 図版 4 17-1区完掘状況, 17-1区完掘状況(北から) 18-6区トレンチ5南壁土層断面
- 17-2区完掘状況, 17-2区完掘状況(東から) 18-6区東壁土層断面(中央部)
- 17-3区完掘状況, 17-3区完掘状況(北から) 18-7区北壁土層断面, 18-7区東壁土層断面(中央部)
- 17・18-4区完掘状況 18-7区南壁土層断面
- 17・18-4区完掘状況(北から) 18-7区トレンチ10東壁土層断面(北部)
- 図版 5 17・18-4区トレンチ13完掘状況(北から) 図版11 17・18-4区遺物・礫出土状況(北から)
- 17・18-5区完掘状況 17・18-4区遺物・礫出土状況(東から)
- 17・18-5区完掘状況(東から) 図版12 17・18-4区A-2グリッド縄文土器出土状況
- 18-6区完掘状況, 18-6区完掘状況(北から) 17・18-4区B-5グリッド縄文土器出土状況
- 18-7区完掘状況, 18-7区完掘状況(北から) 17・18-4区B-4グリッド縄文土器出土状況
- 17-3区SK02・03検出状況 17・18-4区A-3グリッド縄文土器出土状況
- 図版 6 17-3区SK02完掘状況 17・18-4区B-6グリッド縄文土器出土状況
- 17-3区SK03縄文土器・礫出土状況 17・18-4区B-3グリッド縄文土器出土状況①
- 17・18-4区遺構完掘状況(北から) 17・18-4区B-3グリッド縄文土器出土状況②
- 17・18-4区遺構完掘状況(東から) 17・18-4区B-3グリッド縄文土器出土状況③
- 17・18-4区遺構完掘状況(北部) 図版13 17・18-4区B-3グリッド縄文土器出土状況④
- 17・18-4区遺構完掘状況(中央部) 17・18-4区遺物包含層縄文土器出土状況
- 17・18-4区遺構完掘状況(南部) 17・18-4区B-5グリッド縄文土器出土状況
- 17・18-4区SK11完掘状況 17・18-4区A-1グリッド石製品出土状況
- 図版 7 17-1区SK01弥生土器出土状況(北から) 18-7区Kグリッド石製品出土状況
- 17-1区SK01完掘状況(南から) 17・18-4区B-4グリッド石製品出土状況
- 17-2区箱式石棺墓(東から) 17-2区石製品出土状況①, 17-2区石製品出土状況②
- 17-2区箱式石棺墓(北から) 図版14 17・18-4区B-6グリッド黒曜石塊出土状況①
- 17・18-4区流路跡1, 17・18-5区流路跡3 17・18-4区B-6グリッド黒曜石塊出土状況②
- 17・18-5区流路跡3, 18-7区流路跡2 図版15 17-3区弥生土器出土状況①
- 図版 8 17-1区北壁土層断面, 17-1区東壁土層断面(中央部) 17-3区弥生土器出土状況②
- 17-1区南壁土層断面, 17-2区東壁土層断面 17-3区弥生土器出土状況③
- 17-2区南壁土層断面, 17-3区北壁土層断面 17・18-4区弥生土器出土状況
- 17-3区東壁土層断面(南半), 17-3区南壁土層断面 18-6区弥生土器出土状況
- 図版 9 17・18-4区北壁土層断面, 17・18-4区東壁土層断面(北部) 図版16 17-3区土師器出土状況
- 17・18-4区東壁土層断面(南部), 17・18-4区南壁土層断面 17-2区土師器出土状況①

- 図版16 17-2区土師器出土状況②
17-2区土師器出土状況③
17-2区ミニチュア土器出土状況
17-1区須恵器出土状況①
17-1区須恵器出土状況②
18-7区Gグリッド須恵器出土状況
- 図版17 17-1区SX01須恵器出土状況
17-1区製塩土器出土状況
17-2区製塩土器出土状況
18-7区Hグリッド製塩土器出土状況
17・18-5区A-8グリッド流路跡3トレンチ15土師器出土状況
18-7区Gグリッド緑釉陶器出土状況
18-6区土師器出土状況
17-1区木製品出土状況
- 図版18 18-6区木製品出土状況
18-6区サクラ樹皮出土状況
17-1区移動式カマド出土状況
17-1区鞆羽口出土状況
18-7区Gグリッド土錘出土状況①
18-7区Gグリッド土錘出土状況②
18-6区遺物出土状況
17・18-5区A-10グリッド角閃石安山岩(角柱状)出土状況
- 図版19 縄文土器①
図版20 縄文土器②
図版21 縄文土器③
図版22 縄文土器④
図版23 縄文土器⑤
図版24 縄文土器⑥
図版25 縄文土器⑦
図版26 縄文土器⑧
図版27 縄文土器⑨
図版28 縄文土器⑩
図版29 縄文土器⑪
図版30 縄文土器⑫
図版31 縄文土器⑬
- 図版32 縄文土器⑭
図版33 縄文土器⑮
図版34 縄文土器⑯
図版35 縄文土器⑰
図版36 縄文土器⑱
図版37 縄文土器⑲
図版38 縄文土器⑳
図版39 縄文土器㉑
図版40 縄文土器㉒
図版41 石製品①
図版42 石製品②, 土製品①
図版43 石製品③
図版44 石製品④, 土製品②
図版45 石製品⑤
図版46 弥生土器①
図版47 弥生土器②
図版48 弥生土器③
図版49 弥生土器④
図版50 弥生土器⑤
図版51 弥生土器⑥
図版52 弥生土器⑦, 石製品⑥
図版53 土師器①
図版54 土師器②, 軟質土器
図版55 土師器③
図版56 須恵器①
図版57 土師器④
図版58 土師器⑤
図版59 移動式カマド
図版60 土師器⑥, 須恵器②
図版61 須恵器③
図版62 須恵器④・緑釉・灰釉・瓦器・黒色土器・陶磁器
図版63 製塩土器①
図版64 製塩土器②
図版65 製塩土器③, 土師器⑦, 瓦質土器, 土製品③
図版66 土製品④, 石製品⑦, 金属製品, 木製品
出土種子類, サクラ樹皮

I 遺跡の位置と環境

田ノ浦遺跡は、山口県熊毛郡上関町長島に所在する。遺跡は、周防灘と伊予灘の交会地域に突き出た室津半島から、狭い上関海峡をはさんで南西に延びる長島の西端にある。島の脊梁を室津半島の大星山、皇座山から連なる火山脈が貫き、北東部の長島最高峰の上盛山を基点に全島が連山を形成している。なお、長島の地質は、主に上盛山は安山岩、上盛山を除く東部が花崗岩、西部が片麻岩に属している。一方で周防灘北岸の東部から安芸灘にかけて沈水傾向を示すこともあり平地はわずかで、上関・蒲井・四代・白井田・戸津の各集落はこの平地に形成されている。

田ノ浦は臨海部にあり、背後の山から土砂が運ばれて扇状地となり、前面に砂堆が形成された。入江を山が取り囲み、山道は急峻なため古くは船を使って行き来していたものと思われる。また、その正面約4km先には、古来海の神としてあがめられてきた祝島が浮かんでおり、800年の伝統をもつ宮戸八幡宮の神舞（かんまい）神事が著名である。

現在までに知られているこの地域の縄文時代の遺跡は、室津半島の東岸では、与浦遺跡・宮田遺跡・黒島浜遺跡があり、西岸では、平生町の岩田遺跡のほか、尾国遺跡・浜田遺跡がある。室津半島の縄文時代の遺跡は、東・西両岸の小さな入り江に面した浜堤もしくは小扇状地に立地しているが、一部が海面下に没する遺跡も確認されている。各遺跡の遺物を見ると、後期のものが圧倒的に多く、この時期に多数の遺跡が成立したことが分かる。室津半島で最も古い縄文土器は、与浦遺跡出土の爪形状の刺突をめぐらす一片で、前期のものと考えられる。中期の土器は、ごく少量ながら宮田・与浦・岩田の各遺跡から出土している。尾国遺跡からは後期の土器が出土している。石器としては石鏃、石錘が見られ、狩猟と漁猟を中心とした採集生活が営まれたものと推測される。西岸の岩田遺跡の後期の層からは多量のドングリが出土し、晩期になるとその貯蔵庫群とみられる遺構が検出されている。また、東岸の宮田遺跡からもシイ類が出土しており、木の実の採集も盛んであったことがわかる。上関町内においては、田ノ浦遺跡以外にはまだ縄文時代の遺跡は発見されていない。

次に、弥生時代の遺跡であるが、平生町の岩田遺跡では、弥生前期末頃の土器が出土している。また柳井市伊保庄の向田遺跡から前期末～中期初頭の土器が出土しており、室津半島においては少なくとも前期末頃には各地に集落が展開したものと考えられる。出土土器は、形態的にみて四国伊予地方との関わりを想定することができる。吹越遺跡は、終末期の遺跡で、室津半島の山嶺上、標高286mに立地する。農耕には不適當で、武器としての鉄鏃や鉄製品も出土することから、軍事的機能を持つ比較的短期間存在した高地性集落と考えられている。上関町内においては、祝島の標高220mの山腹にカタイ遺跡、山惣津遺跡があり、中期の包含層が検出されている。八島の三浦遺跡でも山麓に中期の遺物包含層があり、室津半島や周辺の島々も広域的な社会的緊張の影響を受けた可能性がある。

古墳時代に入ると、室津半島の付け根に白鳥古墳・神花山古墳・阿多田古墳などの歴代首長墓とみられる前方後円墳が点在する。上関町内の古墳としては、白井田大津場の標高70mの山腹に寺山古墳がある。横穴式石室の羨道が開口していて、円墳とみられる封土もかなり残っている。同じく白井田には跡辺古墳群があり、須恵器が採集されている。ほかに、八島の古浦遺跡には土師器の包含層があ

る。

古代には上関は竈戸（竈門）関と呼ばれるようになり、遣唐使や遣新羅使の風待ち・潮待ちの港となっていた。平安時代には付近の伊保庄・八島・柱島などとともに山城国賀茂別雷社の社領荘園にあてられた。中世からは周防灘西門の下関（赤間関）に対して上関と呼ばれるようになった。戦国時代には、村上水軍の拠点として上関城が築かれたことが複数の文献資料から確認できる。上関城は15世紀から16世紀にかけて築造整備され、当初は徴税権行使のための関の監視機能を果たしていたが、戦国の覇権争いの中で、瀬戸内海の要塞としての軍事的価値が高まっていった。

参考文献

小野忠熙『山口県の考古学』1985

平生町史編纂委員会『平生町史』1978

山口県教育委員会『柳井市与浦遺跡』1974

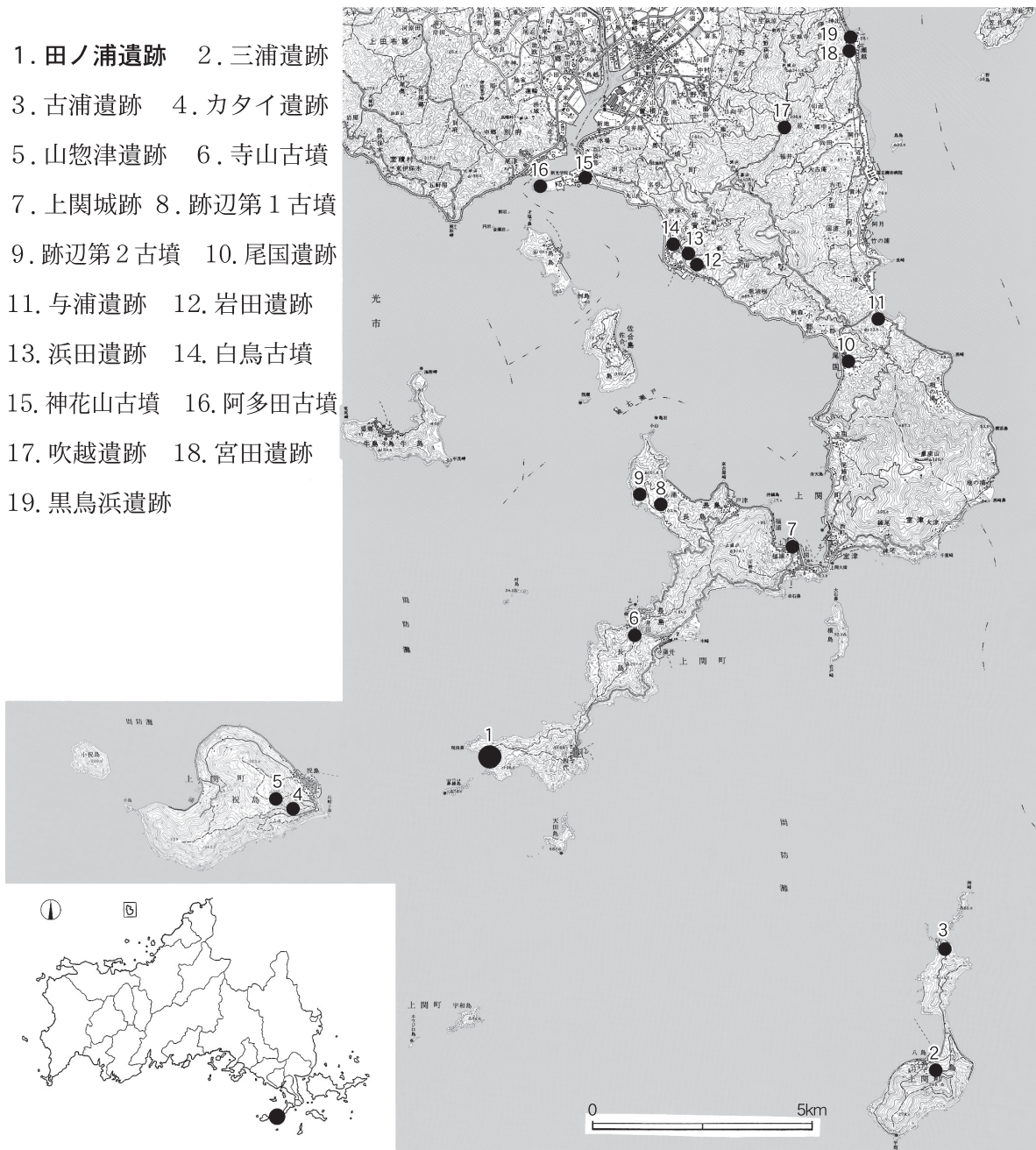
山口県教育財団『上関城跡』1999

上関町史編纂委員会『上関町史』1988

柳井市史編纂委員会『柳井市史（通史編）』1984

柳井市教育委員会『黒島浜遺跡』1977

- 1. 田ノ浦遺跡
- 2. 三浦遺跡
- 3. 古浦遺跡
- 4. カタイ遺跡
- 5. 山惣津遺跡
- 6. 寺山古墳
- 7. 上関城跡
- 8. 跡辺第1古墳
- 9. 跡辺第2古墳
- 10. 尾国遺跡
- 11. 与浦遺跡
- 12. 岩田遺跡
- 13. 浜田遺跡
- 14. 白鳥古墳
- 15. 神花山古墳
- 16. 阿多田古墳
- 17. 吹越遺跡
- 18. 宮田遺跡
- 19. 黒島浜遺跡



第1図 遺跡の位置と周辺の主な遺跡

Ⅱ 調査の経緯と概要

1 調査に至る経緯

中国電力株式会社は、熊毛郡上関町長島四代田ノ浦に原子力発電所の建設を計画している。これに先立ち、予定地内の詳細調査を実施することとなり、調査対象地内の埋蔵文化財の有無について、文書で上関町教育委員会に照会した。予定地内には周知の田ノ浦遺跡も所在するため、町教育委員会は山口県教育委員会に相談し、県教育委員会は平成16年度中に2度にわたり、予定地内の試掘調査を実施した。試掘調査により、部分的に遺物包含層の埋存が確認され、その旨が中国電力に回答された。その後、中国電力より、文化財保護法に基づく埋蔵文化財包蔵地内における土木工事のための発掘の届け出が県教育委員会に提出され、県教育委員会では、詳細調査対象地の内1,650㎡については、事前の発掘調査が必要な旨を文書で通知した。これをうけて、中国電力、町教育委員会、県教育委員会が協議を行った結果、平成17年度に発掘調査を実施する運びとなり、発掘調査は山口県ひとつくり財団・山口県埋蔵文化財センターが担当することとなった。

2 調査の経過と概要

平成18年4月より、発掘調査の実施に必要な文化財保護法に基づく発掘調査の届け出などの事前準備を進め、5月16日に現地調査に着手した。調査区内の草刈りを行った後、23日から調査前の地形測量を行い、その後人力による試掘溝調査を行った。試掘溝調査で、調査区のほぼ全域にわたり、当初の予想以上に多量の遺物を含む包含層があることが判明した。

17年度調査区は、第4図のように5区に分け、各調査区の間には土層観察と安全確保のための土手を残すこととした。地表付近には廃棄物を多量に含む表土層が堆積するため、小型重機を用いて除去することとした。表土除去は7月20日に開始し、8月31日に終了した。これと並行して、人力で17-1～3区の掘り込みを順次開始し、以下の層を各土層ごとに上から順次掘り下げていった。

9月上旬には、台風が襲来し、高潮が防波堤を越えて調査区に入り込み、その際調査区の西壁全体が削り取られ、崩落した。そのため、各調査区の西壁に土のうを積み上げ、法面の保護を行った。9月中旬には不測の事態により詳細調査が一時中断することになり、応急の現場保全措置をとった上で、発掘調査も中断した。中断期間中は、室内で出土遺物の整理を行った。

調査期間の延長に伴う諸手続きの延長を行い、12月上旬より現地調査を再開した。1月中旬までに17-1～3区の掘り込みを終了し、1月18日には1回目の空中写真撮影を行った。

17・18-4・5区については、縄文土器を中心とした密度の高い遺物包含層が存在するため、グリッドを設定して掘り込みを進めた。17・18-4区では、縄文時代の土坑や柱穴群が検出された。さらに、多量の縄文土器や石器を含む厚い堆積層の存在や縄文土器を含む酸化マンガンの影響とみられる硬化土層が広がっていたことから、掘り込み作業には予想以上の時間を要した。また、17-1～3区及び17・18-4・5区東端の壁面には相当量の遺物が含まれ、遺跡がさらに東側に広がることが判明した。そのため、県教育委員会は遺跡の広がりを確認するための試掘調査を実施した。その結果、17年度調査区の東側にも若干遺物包含層が広がることが確認され、約350㎡の追加発掘調査が必要なことが確認された。後の協議により、17年度終了時点で若干の未調査部分が残る17・18-4・5区と

合わせて18年度も発掘調査を実施することとなった。17・18-4・5区の遺物包含層をほぼ掘り終えた3月31日には、2回目の空中写真撮影を実施した。

18年度は4月5日より調査を開始し、まず17・18-4・5区の遺物包含層の残余部分の掘り込みを行い、記録を作成した。その後、17・18-4区の下層に遺構面や良好な遺物包含層が存在するか否かを確認するため、試掘溝を設定して、掘り込みを行った。対象土層は酸化マンガンによる硬化層であるため、重機を用いて掘削した後、人力で細かい部分の掘削や土層断面の清掃を行った。その結果、縄文時代後晩期の包含層より下の土層からも土器片を含む硬化した土層が確認されたが、遺物量は極めて少なく、一次的な堆積ではないことが判明した。

続いて、18-6・7区について、重機による表土除去後、順次掘り込みを行った。両区とも砂堆背後の湿地部分で、湧水で壁面が崩落するため、安全面に留意して慎重に掘り込みを行った。18-6区では自然木などを含む奈良・平安時代の堆積層下に古墳時代以前の堆積砂層が確認された。そのため、試掘坑を設定して掘り込みを行い、縄文土器を含む堆積層等を確認した。18-7区は、グリッド設定を行い、遺物包含層の掘り込みを行った。両区の掘り込み終了後、7月27日に3回目の空中写真撮影を行った。その後、平板測量や土層断面図の作成等を行い、7月31日に現地調査を終了した。

調査終了間際の7月23日には、上関町教育委員会とともに上関町中央公民館において、発掘調査成果の報告会を開催した。現地調査の様子、遺構や遺物の出土状況を映像で紹介するとともに、主要な出土遺物の展示・解説を行った。また、8月10日には遺跡のある四代地区の公民館において、町教育委員会とともに出土遺物の展示・解説会を行った。いずれも、地元の多くの方々の来場があった。

8月以降は、室内で遺物整理を進め、遺物実測や遺物写真撮影などを行い、本報告書を刊行した。



調査前の田ノ浦遺跡（南から）

Ⅲ 調査の成果

1. 遺構

遺跡のある田ノ浦海岸は、北・東・南の三方に山が迫り、西側は瀬戸内海に面して開けている。海岸は弓なりの砂浜を形成している。砂浜の北側および南側は岩礁となっており、砂浜には貝殻はほとんどみられない。砂堆の東側には山間の3本の小谷から流れ出た土砂が形成した小扇状地が形成されている。特に北側の谷は最も長く、濁水時でも湧水がとぎれることがなく、集落が形成された要因の一つと考えられる。

調査対象地は、海岸に設置された防波堤に沿うように砂堆が形成されていた。砂堆の表面には近・現代の廃棄物を多量に含む二次堆積が存在し、防波堤構築時の掘削土が盛られたものとみられる。17-1～3区あたりの砂堆の頂部は、標高4～4.5mで東側に段落ちがあり、17・18-4・5区は3.5～4mで東側との段差はほとんどない状況であった。17・18-4・5区付近は、水田区画の痕跡があり、開墾時に削平をうけたものとみられる。

遺跡の主体は遺物包含層であり、試掘溝を設定して掘り込みを行い土層を確認した後、上位の包含層から順に掘り込みを行った。縄文時代の遺物包含層の広がりや予測される17・18-4・5区および比較的堆積の安定した18-7区は、5m方眼のグリッドを設定し、掘り込みを実施した。しかし、結果的には、地区や層位による遺物の差異はあまりみられず、高潮などの自然災害の影響が大きいことが判明した。

遺物包含層掘り込みの際、高潮の影響やマンガンや鉄分の吸着等により、同一とみられる土層中でも土色や土質の変化が随所にみられた。遺物の取り上げ等は可能な限り含まれる土色・土質を表記したため、遺物出土地点一覧表に示した土層中には、土層断面図にあらわれないものもある。しかし、当遺跡の遺物包含層の多くは複数の時代の遺物が混在するため、全てを土層断面図中の土層に置きかえることは、あまり意味を持たないと判断し、そのまま表記した。また、17・18-4区の縄文時代包含層では、高い密度で遺物の出土する2つのレベルで遺物の出土地点や出土レベルを広範囲にわたり記録したが、時期の異なる遺物が混在することが判明したため、本報告中には掲載していない。

縄文時代

縄文時代の遺構は、柱穴群と土坑13基である。その中で、遺物を伴うものは数基であるが、いずれも土器の小片であるため良好な資料といえるものはない。17-3区の土坑2基は、灰黄褐色砂に掘り込まれていた。17・18-4区の柱穴群と土坑11基は、高潮により上部は削平されているとみられ、どの層から掘り込まれたかは不明である。検出された面は多量の遺物が出土した黒褐色砂の遺物包含層である。

S K02(第7図、図版5・6) 17-3区の南半部西端、標高およそ2mの比較的平坦な面に位置し、S K03と隣り合う。西半部分は調査区外であるため全体の規模は不明である。平面形は長円形を呈しており、検出された規模は長軸78cm、短軸27cm、深さ25cmである。灰黄褐色砂に掘り込まれている。埋土は暗褐色砂質土の単層である。断面形は逆台形をなし、床面はほぼ平坦である。遺物は検出されていない。

S K03(第7図、図版5・6) 17-3区の南半部西端、標高およそ2mのS K02のすぐ南隣に位置する。S K02と同様、西半部分は調査区外であるため遺構全体の規模は不明である。平面形は円形または長円形とみられ、検出された規模は長軸336cm、短軸100cm、深さ19cmである。灰黄褐色砂から掘り込まれている。埋土は暗褐色砂質土である。断面形は逆台形をなし、床面はほぼ平坦であるが、30cm大の礫が数点混入する。埋土中から縄文晩期の土器片や礫が出土している。

柱穴群(第6図、図版4・6) 17・18-4区の西半部、標高およそ2mの海浜砂堆東側に向かって下



第2図 周辺地形図

る緩やかな斜面上に約130個の柱穴が検出された。柱穴は、その多くが西半の中央部（A-3～5グリッド）に集中する。直径はおよそ10cm～20cm、深さが5～15cmほどであった。黒褐色砂から検出された。

柱穴の埋土は黒褐色弱粘質土の単一層である。遺構検出面の層位や出土遺物から、縄文時代の柱穴群と確認できる。多くは竪穴住居の柱穴とみられるが、住居の掘り方・床面は削り取られ、検出されていない。

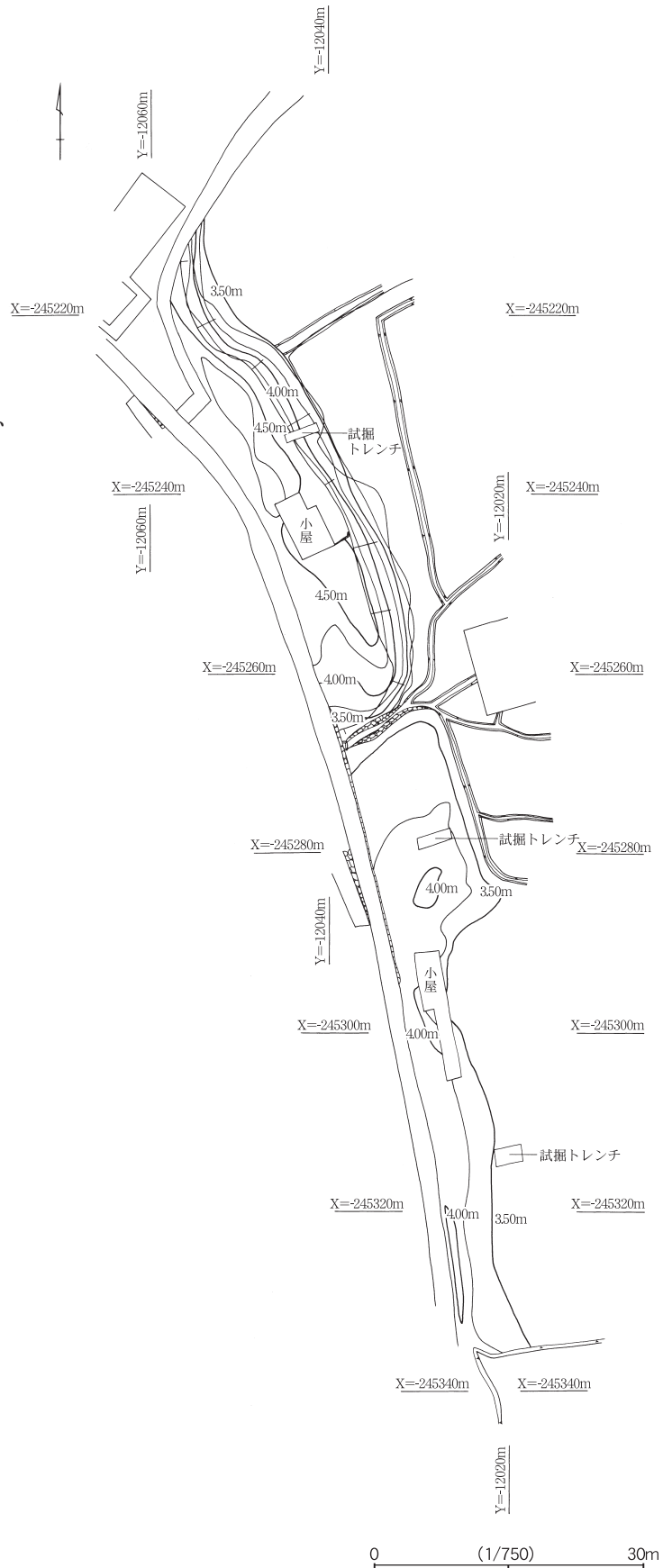
S K 04～S K 13（第6図、図版6）

17・18-4区の西半部、標高およそ2mの海浜砂堆東側に向かって緩やかに下ってゆく斜面上に位置する柱穴群とともに検出された。平面形はおおむね長円形で、規模は長軸がおよそ30cm～90cm、短軸がおよそ20～60cm、深さが5～15cmほどである。埋土は黒褐色弱粘質土の単一層である。断面形は逆台形をなし、床面はほぼ平坦である。また、これらの土坑は、竪穴住居に伴うものか単独に掘り込まれたものか否かを確認することはできない。遺物はほとんど検出されていない。

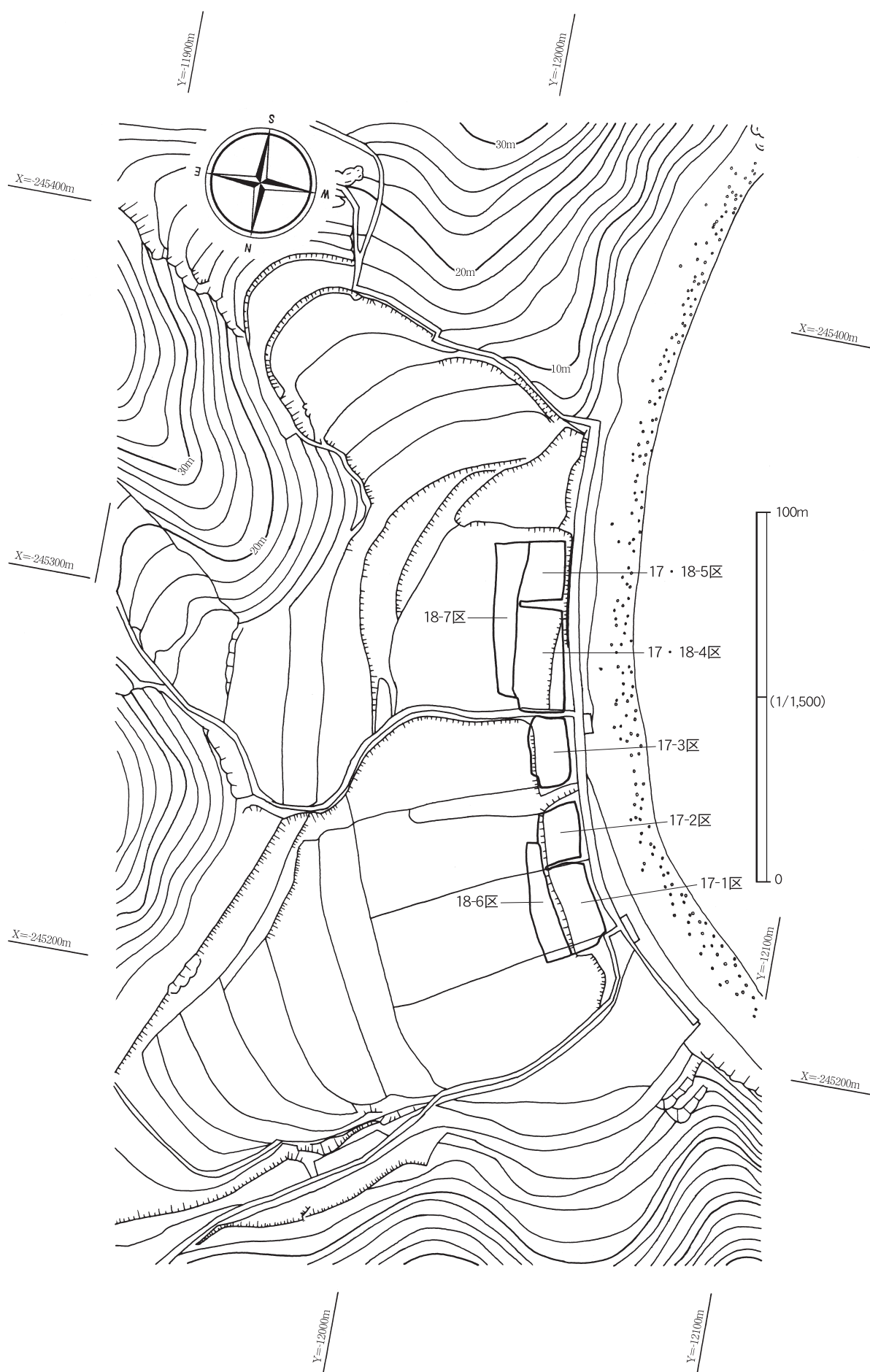
遺物包含層

縄文時代の遺物包含層は3つに大別できる。17-3区南端の灰褐色砂、17・18-4区全域に広がる暗褐色砂～黒褐色砂、17・18-5区南端の灰黄褐色砂利である。

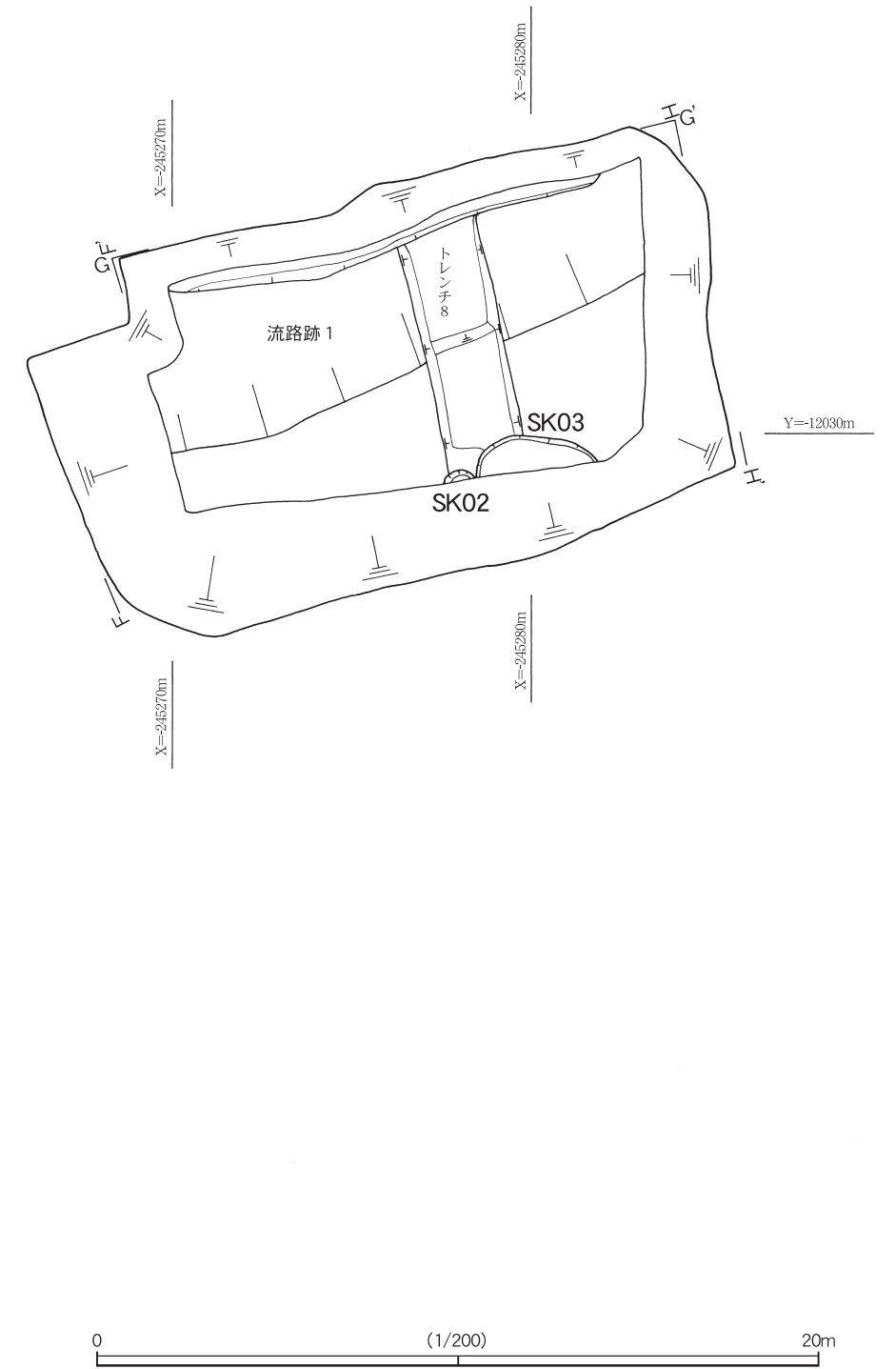
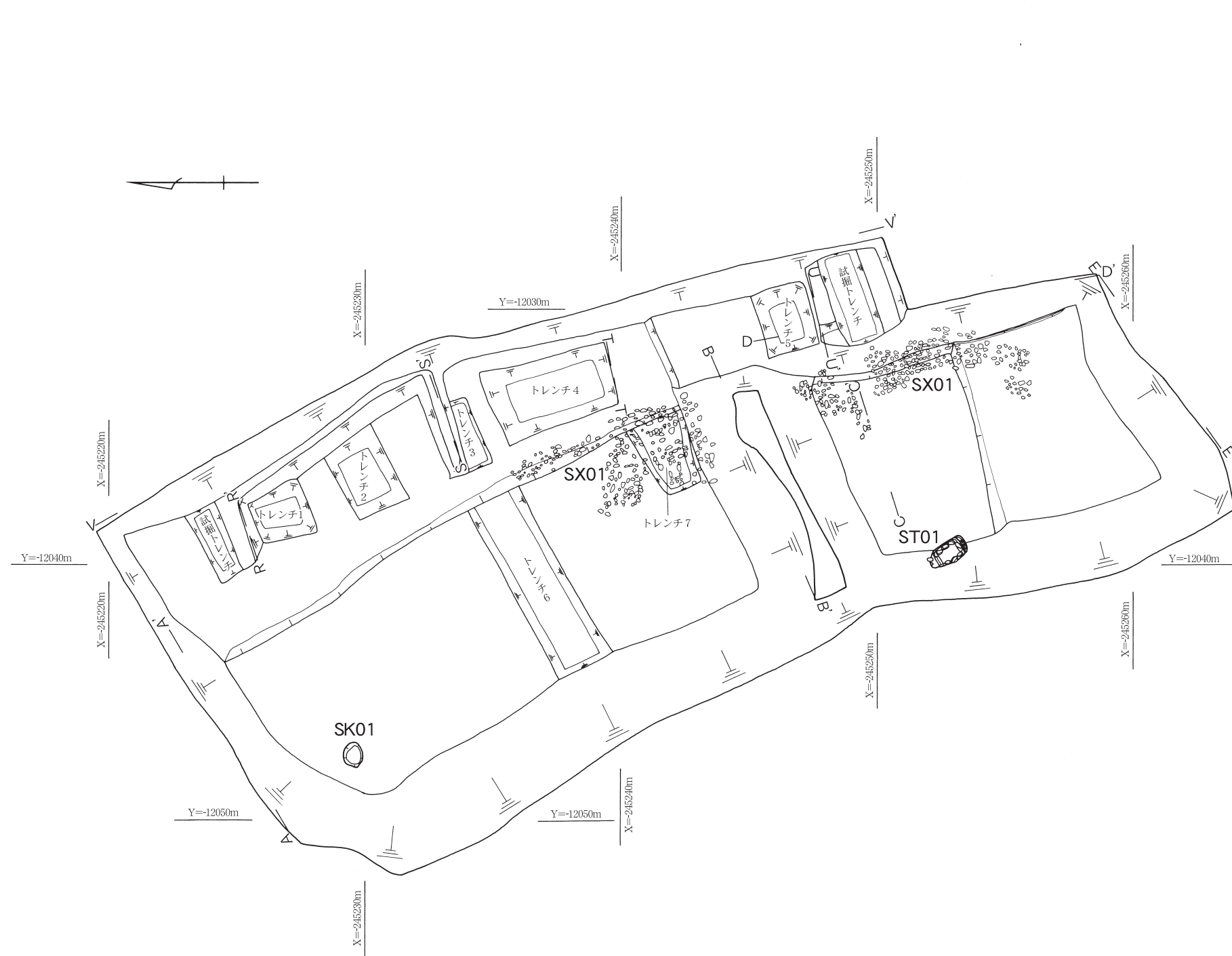
17-3区の灰褐色砂はS K 02、S K 03が掘り込まれた灰黄褐色砂の上位にある。土坑が検出された周辺では、縄文土器片や石鏃が出土した。



第3図 調査対象地地形測量図



第4図 調査区設定図



第5図 17- 1～3区, 18- 6区遺構配置図



第6図 17・18-4・5区, 18-7区遺構配置図

17・18-4区の暗褐色砂～黒褐色砂からは、標高約2.6m～2.9mの間で大量の縄文土器や石器が出土した。

縄文土器は、後期～晩期のほぼ全期間にわたる土器が出土した。大小様々な大きさの転礫群と土器群は調査区一面に広がり、かなり密集した状態であった。高潮による攪乱を受けたようであり、後期前葉の土器と晩期後半の土器が隣り合って出土したり後期の土器の下位で晩期の土器が出土したりした。土器の摩滅は少なく、調整や文様の残存状態は非常によい。

土器、石器ともに出土地点に大きな偏りはなく、ほぼすべてのグリッドから出土している。局所的に出土したものとしては姫島産の黒曜石塊が挙げられる。礫群の中に拳大の原石が20数個かたまって出土した。石塊を貯蔵したと思われる遺構に伴う掘り方は確認できなかった。

17・18-5区の灰黄褐色砂利は、狭い範囲であるが比較的攪乱の影響が少ない遺物包含層である。上層では晩期の土器が出土したが、掘り下げていくと後期の土器より下位で晩期の土器が出土し、17・18-4区の遺物包含層と同じ状況となった。

17・18-4区から17・18-5区にかけて遺物包含層が続いていたと考えられるが、弥生時代に形成された流路跡3によって挟られている。

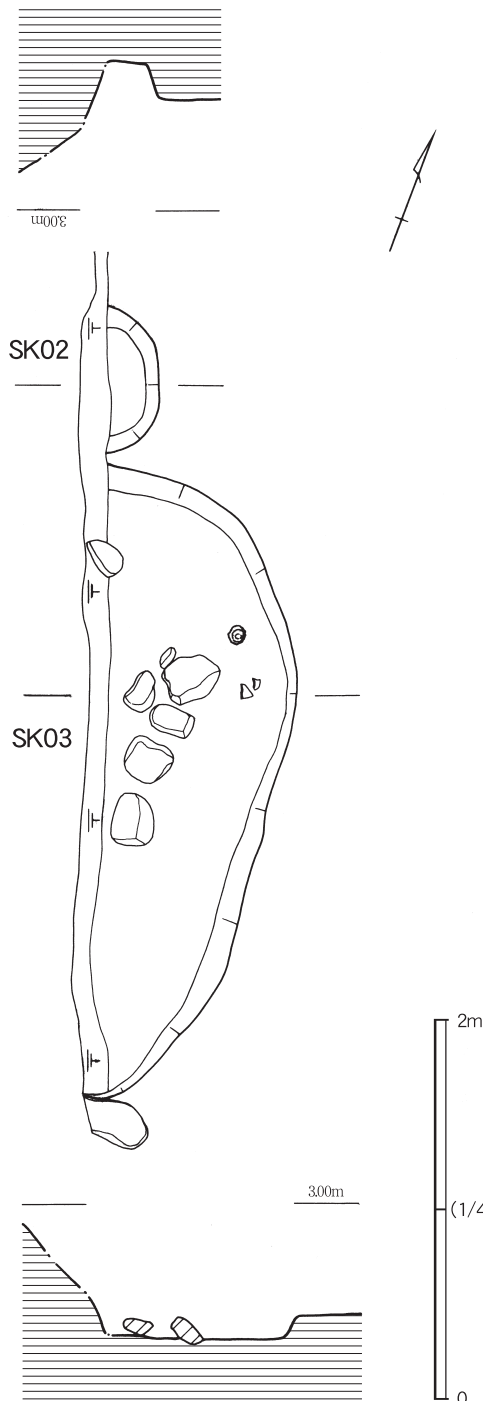
18-7区の南端の狭い範囲で縄文土器が出土し、17・18-5区の遺物包含層が東側に続いていることが確認された。しかし、17・18-4区にみられる遺物包含層の続きは確認することができなかった。

17・18-4区のトレンチ13で黒褐色砂より下位の遺物包含層の有無を確認した。マンガン沈着による厚い硬化層が大半を占め、安定した遺物包含層はみられなかった。出土層は明確ではないが前期の土器片を数点確認した。

弥生時代

(1/40) 弥生時代の遺構は、箱式石棺墓1基、土坑1基である。17-1区の土坑、17-2区の箱式石棺墓は、ともに灰白色砂に掘り込まれていた。

S K01 (第13図、図版7) 17-1区の北西部、標高およそ3mに位置する。平面形は長円形を呈しており、規模は長軸97cm、短軸72cm、深さ18cmである。灰白色



第7図 17-3区SK02・03実測図



第8図 17・18-4・5区, 18-7区グリッド設定図

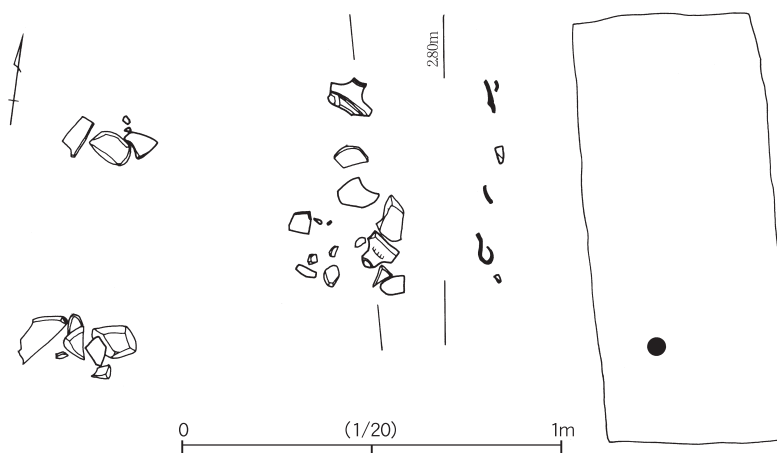
砂に掘り込まれていた。埋土は黒褐色砂質土の単層である。断面形は逆台形をなし、床面はほぼ平坦である。弥生後期の土器片が数点出土しているが、多くは遺構の西半部に集中している。特に西端からは複合口縁壺や高杯が出土している。

S T 01 (第12図、図版7) 17-2地区の北半部西側の平坦な面に位置する。石棺の平面プランは長方形であり、北側小口に1枚、南側小口に1枚、両側壁に各3枚の石が使用されているが、蓋石は検出されていない。石棺内法は長さ79cm、幅40cmで、残存する深さは14cmを測る。石棺の上端の標高は約2.9mである。灰白色砂から検出された。埋土は灰黄色砂の単層である。石材は多様で、扁平な円礫であり、周辺で採取可能なものを使用したと考えられる。主軸をほぼ南北方向にとり、南側の小口側の幅が広いことから南枕であった可能性が高い。また、南小口の棺外に並ぶ2枚の石は供物台の役割を果たしていた可能性もある。小型の石棺として位置づけられ、規模からみて小児用の墓であったと考えられる。棺内から遺物は出土していないが、出土した層位や形態からみて、弥生時代に帰属する可能性が高い。なお、今回行っ

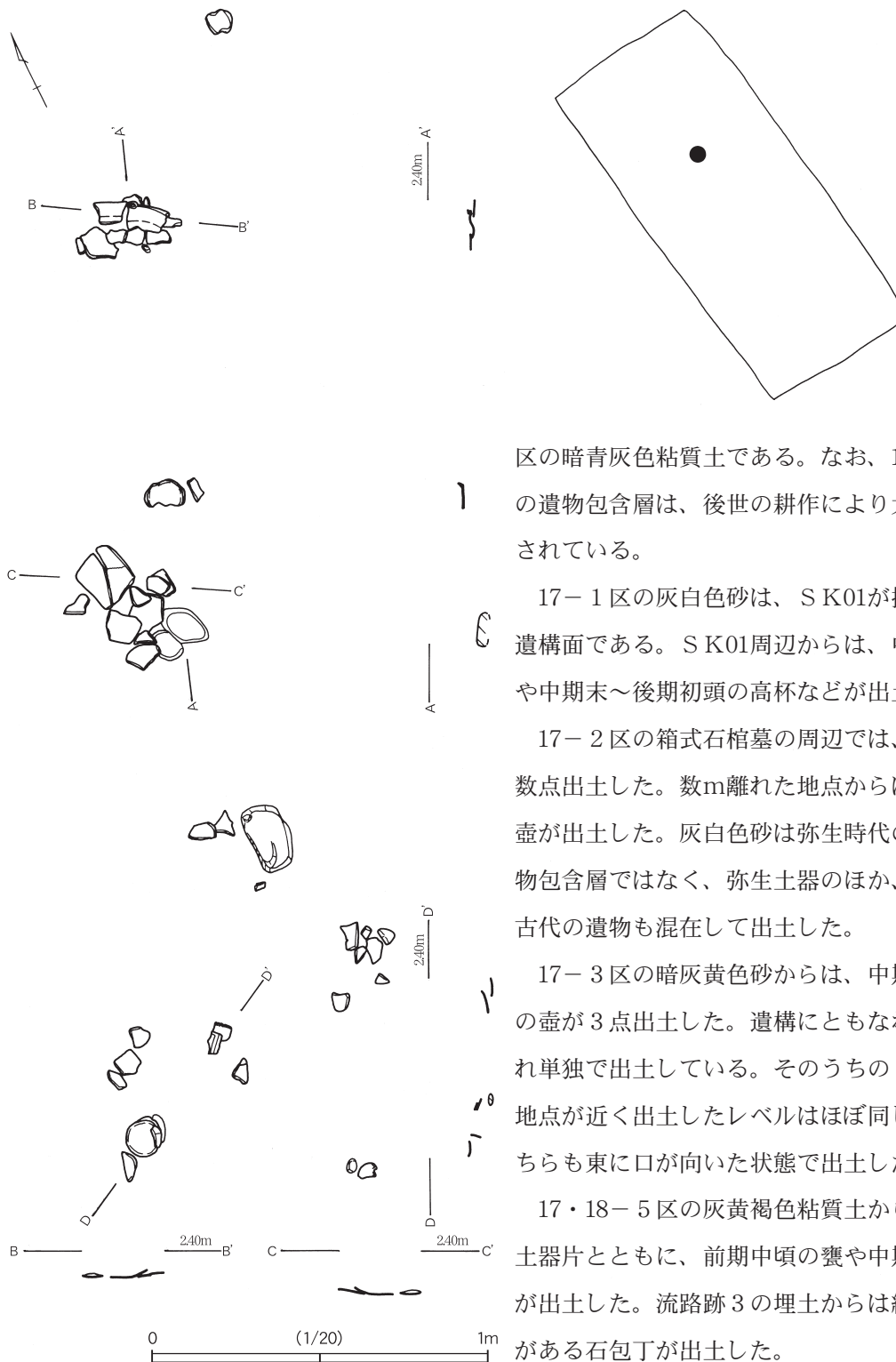
たリン酸・カルシウム土壌分析では、人骨の痕跡は確認されていない。

遺物包含層

弥生時代の遺物包含層は4つに大別できる。17-1区、2区に広がる灰白色砂、17-3区の暗灰黄色砂、17-18-5区の灰色砂、18-6



第9図 17・18-4区遺物包含層縄文土器出土状況実測図



第10図 17・18-4区遺物包含層縄文土器
出土状況実測図

区の暗青灰色粘質土である。なお、17・18-4区
の遺物包含層は、後世の耕作により大部分が削平
されている。

17-1区の灰白色砂は、SK01が掘り込まれた
遺構面である。SK01周辺からは、中期初頭の甕
や中期末～後期初頭の高杯などが出土した。

17-2区の箱式石棺墓の周辺では、甕の破片が
数点出土した。数m離れた地点からは中期後半の
壺が出土した。灰白色砂は弥生時代の安定した遺
物包含層ではなく、弥生土器のほか、古墳時代～
古代の遺物も混在して出土した。

17-3区の暗灰黄色砂からは、中期初頭の完形
の壺が3点出土した。遺構にともなわず、それぞ
れ単独で出土している。そのうちの2点は、出土
地点が近く出土したレベルはほぼ同じである。ど
ちらも東に口が向いた状態で出土した。

17・18-5区の灰黄褐色粘質土からは、多くの
土器片とともに、前期中頃の甕や中期初頭の壺蓋
が出土した。流路跡3の埋土からは紐かけの挟り
がある石包丁が出土した。

18-6区の暗青灰色粘質土からは、後期の中頃
の甕が出土した。縦方向に半分しか残存していな

いが、潰れた状態で出土した。この甕の表面には煤がかなり付着していた。

弥生時代の遺物包含層からは、前期～後期の弥生土器が出土した。時期に偏りがあり、中期初頭と後期前半の遺物が多い。

古墳時代



第11図 17・18-4区B-6グリッド遺物包含層黒曜石塊出土状況実測図

古墳時代の遺構は確認されていない。

遺物包含層

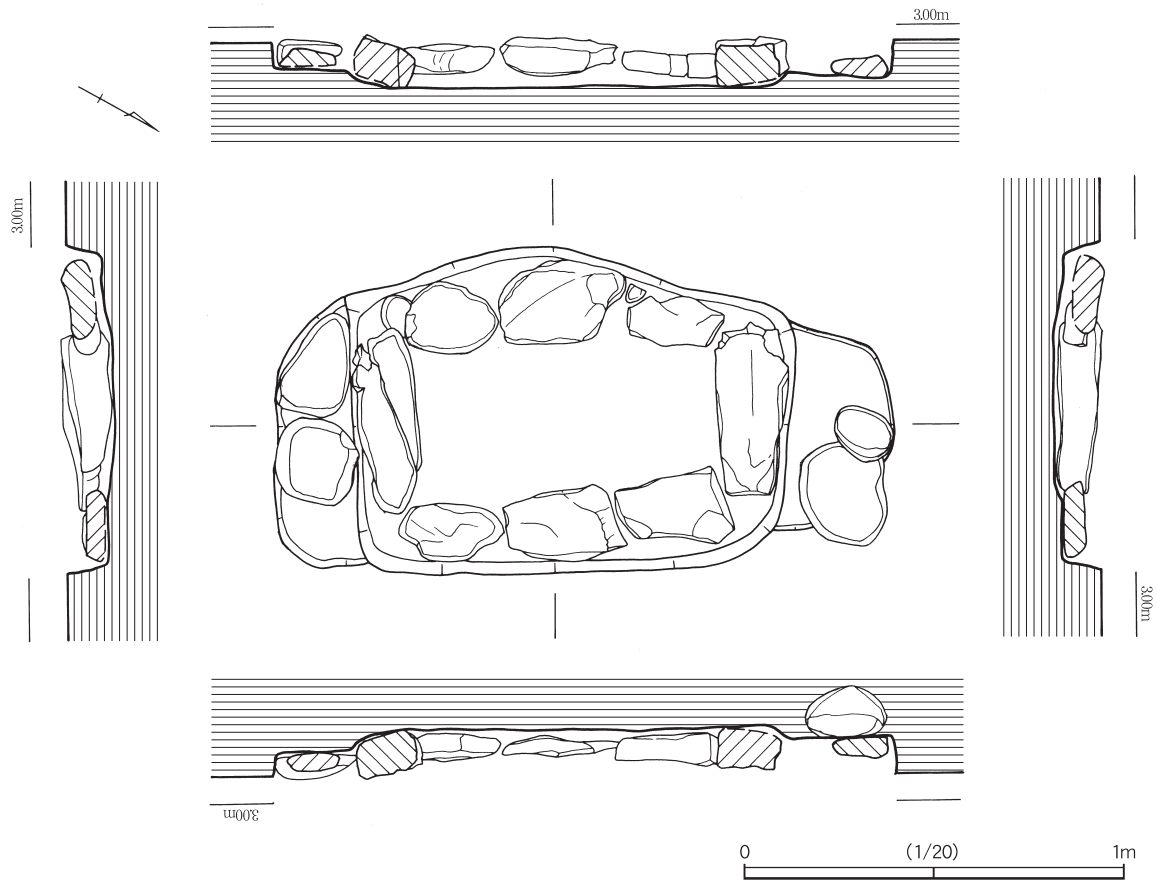
古墳時代の遺物包含層は、4つに大別できる。17-1区に広がるオリーブ黒色砂、17-2区の黄灰色砂、暗赤褐色砂、17-3区のにぶい黄褐色砂である。17・18-4区、5区は後世の耕作により大部分が削平されている。

17-1区のオリーブ黒色砂からは、5世紀後半～6世紀の須恵器の杯や、時期は不明であるが2点の管玉、ミニチュア土器、多数の双孔棒状土錘が出土した。17-1区北西端では、東西約3m、南北約2mの範囲に20cm～30cm大の礫の集石があり、この集石部からは、古墳時代の須恵器片、土師器片とともに、移動式カマドや都城系土師器など古代の遺物も出土した。

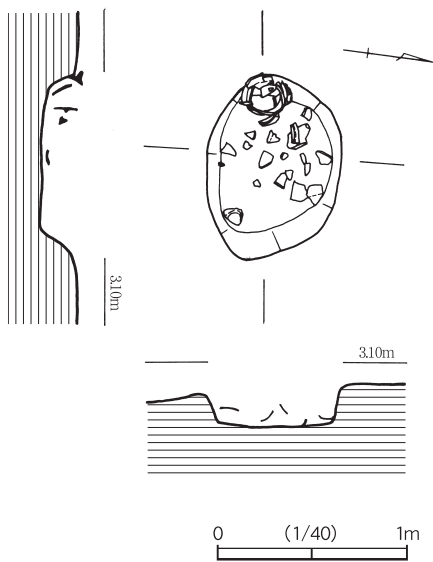
17-2区の黄灰色砂からは、5世紀前半の小型の丸底壺、ミニチュア土器、須恵器、土師器が多数出土した。東西約2m、南北約3mの範囲に10～20cm大の礫の集石があり、30cm大の板状の石4枚が立った状態で一箇所に集中して出土したのもあった。石の傍で若干の土師器片が出土したが、積極的に遺構と判断できる材料は認められなかった。集石部からは、古墳時代と奈良時代～平安時代の遺物が同じ面出土した。

17-2区の暗赤褐色砂は、6世紀の完形の土師器の椀、ミニチュア土器、高杯などが出土した。鉄分・マンガン分を多く含み遺物に付着した砂粒が硬化しているものもある。礫を多く含み、礫によって押し潰された状態で出土した土器がみられた。

17-3区のにぶい黄褐色砂からは、押し潰された状態で甕が出土した。また、5世紀後半～6世紀



第12図 17-2区箱式石棺墓実測図



第13図 17-1区SK01実測図

前半のほぼ完形の高杯が据わった状態で出土した。

古代

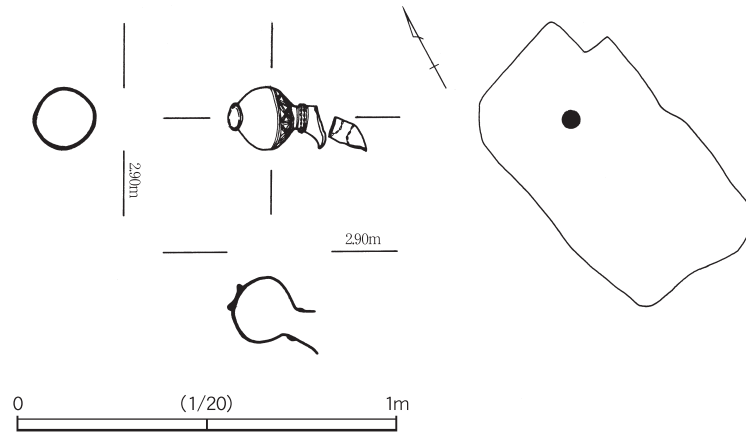
古代の遺構は、用途不明遺構1基である。大量の製塩土器、鞆羽口といった生産活動に由来する遺物が出土しているが、それにかかわる遺構は確認されていない。

S X01 (第5図)

S X01は、砂堆部と後背湿地の境界部分にあり、17-1区から17-2区にかけて南北に列状に続く礫の集石遺構である。標高約2.4m~2.9mに位置し、黄色及び黄褐色砂の上に長さ約20m、幅約3mの規模で築かれている。礫の大きさは10cm~40cm大と幅があり、礫と礫の間隔や配置に規則性はみられず、計画的に積み重ねたり並べたりしたもの

ではないことがわかる。用途は不明であるが、湿地と砂堆部のほぼ境界線上に位置することから、砂堆部の浸食を防ぐ護岸的な役割をもつ遺構と推測される。なお、礫群とともに出土した遺物からこの集石の構築時期は、8世紀~9世紀と思われる。

遺物包含層



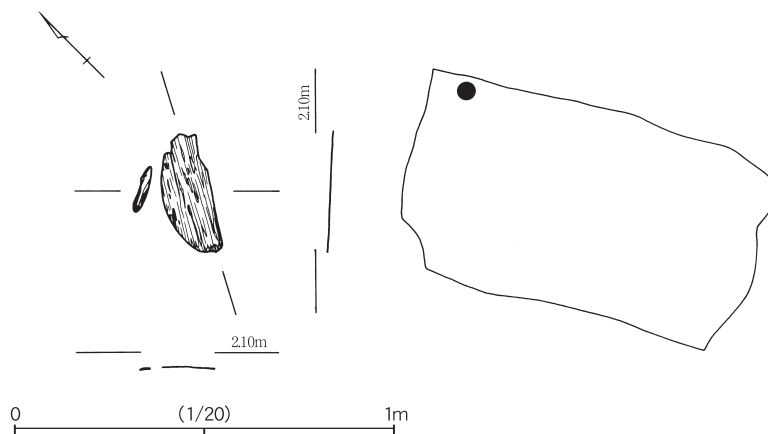
第14図 17-3区遺物包含層弥生土器出土状況実測図

古代の遺物包含層は、4つに大別できる。17-1区の灰褐色砂及びオリーブ黒色砂、17-1～3区に広がる黄灰色砂及び灰白色砂、17・18-5区、18-6区・7区の湿地を形成する粘質土、流路跡1～3の埋土である。

灰褐色砂及びオリーブ黒色砂からは、須恵器、土師器、製塩土器、双孔棒状土錘、鞆羽口、平瓦、都城系の高杯などが出土した。製塩土器が数個体まとまって出土した周囲に多数の礫も出土したが、炉や土坑は検出されなかった。双孔棒状土錘が多く出土したが、一箇所にまとまって出土した例はみられなかった。鞆羽口が出土した地点に吹床の痕跡は見出せなかった。また、出土した3点は、数m隔ててそれぞれ単独に出土し、風孔の方向は一様ではなかった。

黄灰色砂及び灰白色砂の上面には製塩土器片が多数みられた。製塩土器に伴う掘り方等は確認できず、遺構と確認できるものは全く検出されなかった。

18-6区、18-7区の湧水を伴う粘質土や弱粘質土では、古代の須恵器、土師器、輸入陶磁器、帯金具、有溝土錘などが出土した。18-6区の遺物包含層では、遺物とともに大量の流木が出土した。長さが2mを越えるものもあり、丸木の内面が焼け焦げているものもあった。18-7区では、有溝土錘4点が同じグリッドの近い位置で出土した。17-1区の東端は18-6区に続く湿地であるが、ここから曲物の蓋か底とみられる半円形の木製品が出土した。側板となる樹皮はともなっていないが、帯状に加工した桜の樹皮が東に隣接する18-6区で出土した。



第15図 17-1区遺物包含層木製品出土状況実測図

17・18-5区の流路跡3の埋土からは、土師器の皿や完形の椀、有溝土錘などが出土した。灰白色砂から出土した完形の土師器の椀は、伏せた状態で出土した。

中世以降

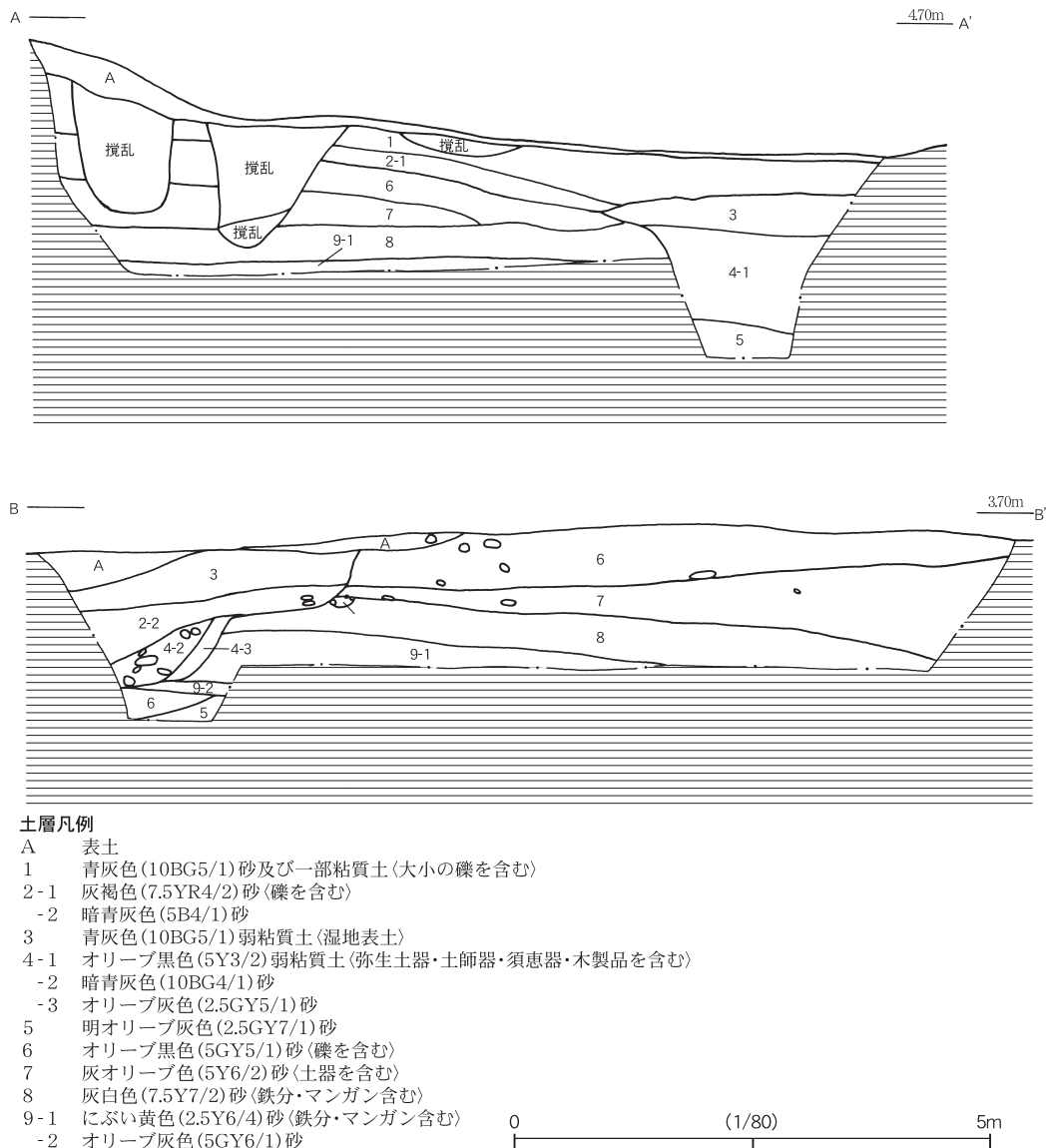
中世以降の遺構は確認されていない。

遺物包含層

中世以降の安定した遺物包含層はない。古代の遺物包含層の上面で部分的に中世の遺物が出土した。17-3区南端から17・18-4区の北端に続く砂礫層で足鍋の脚が出土した。18-7区の灰黄褐色粘質土からは柱状高台皿、瓦質土器の捏鉢が出土している。

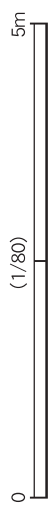
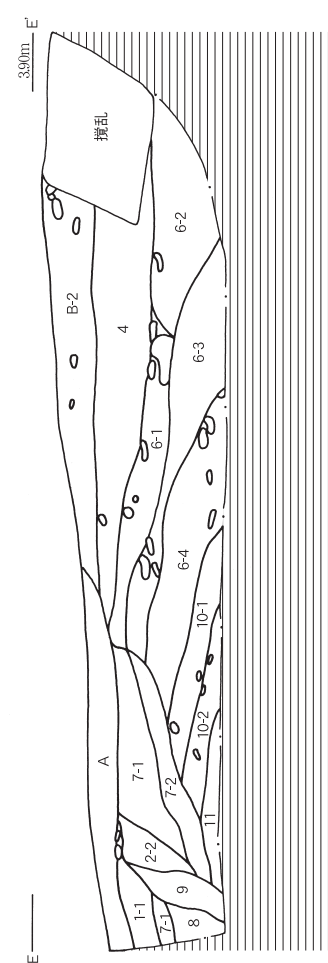
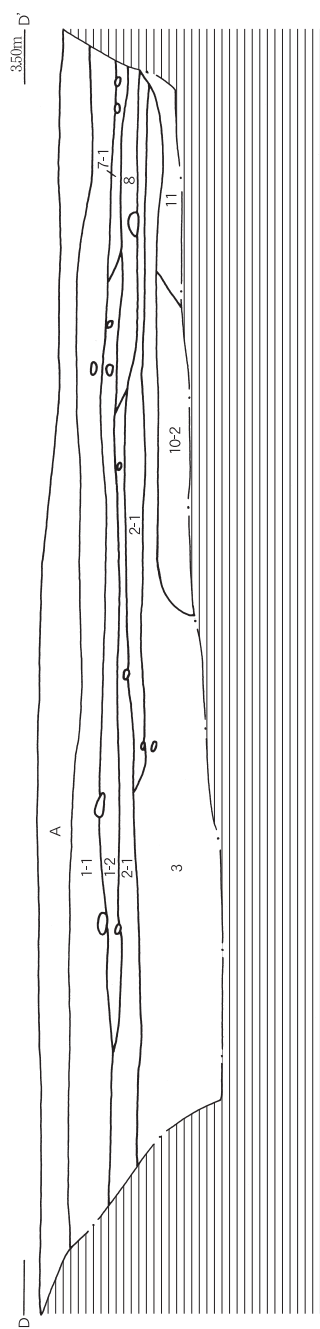
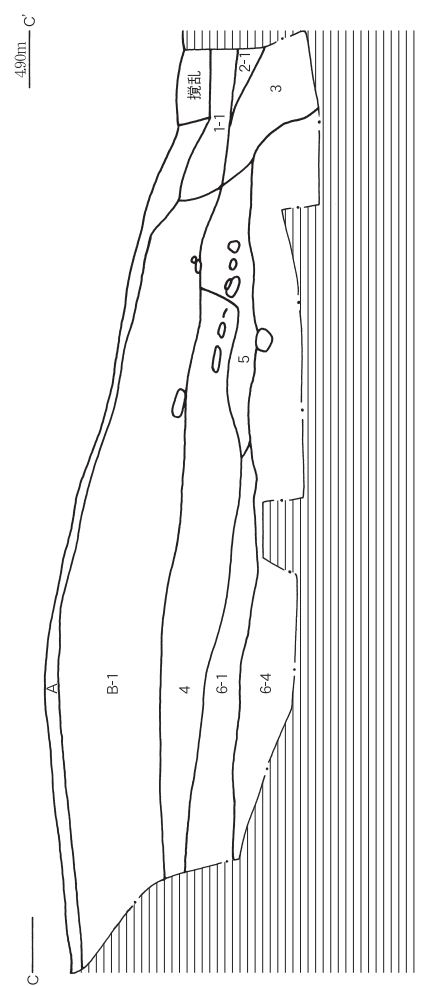
土壌の自然科学分析

土壌の植物珪酸体分析、花粉分析、珪藻分析を行うため18-7区東壁からサンプルA~Hを採取し、18-7区南壁からI~Kのサンプルを採取した。また、18-6区東壁の一層からサンプルを採取した。

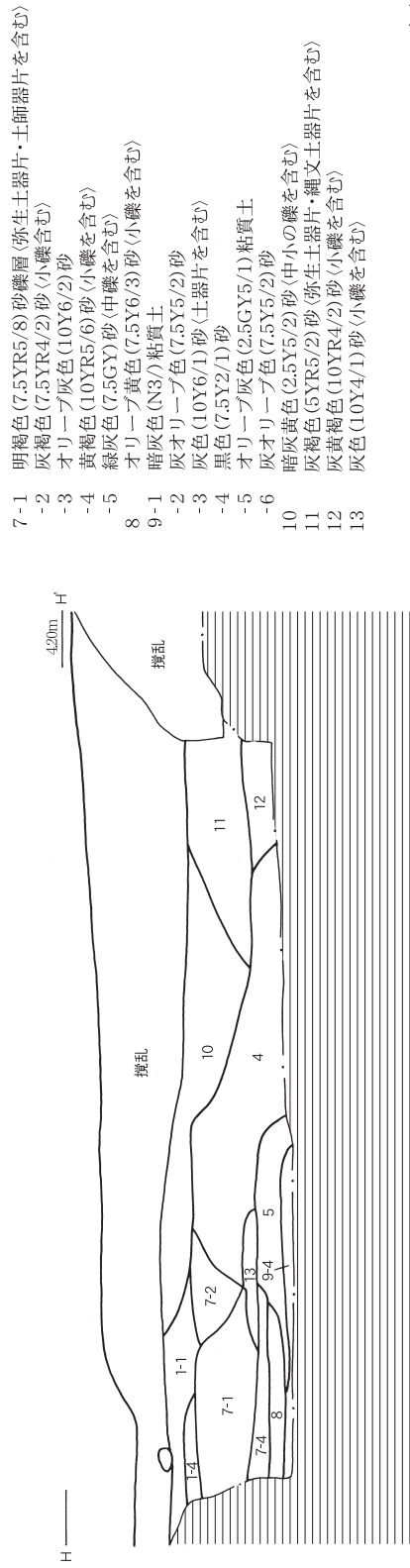
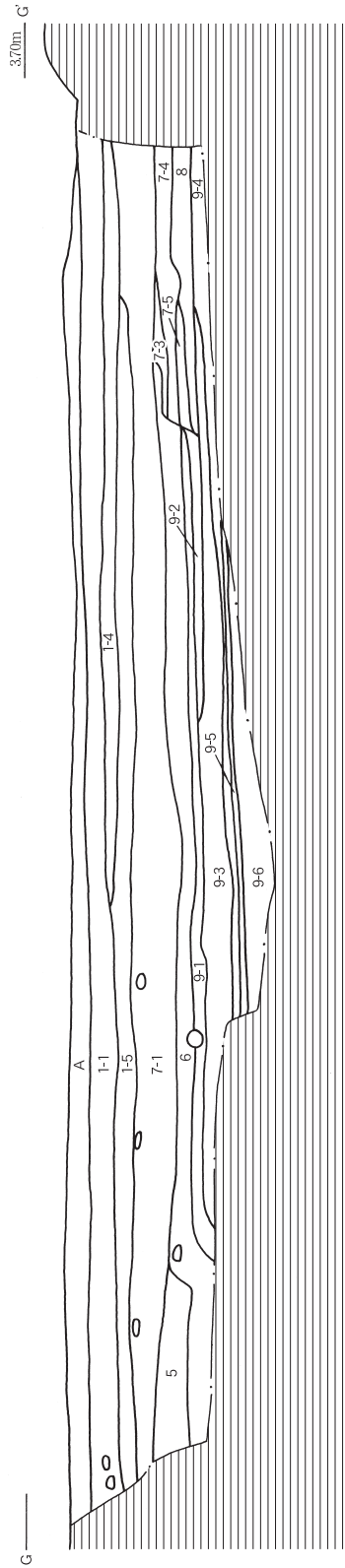
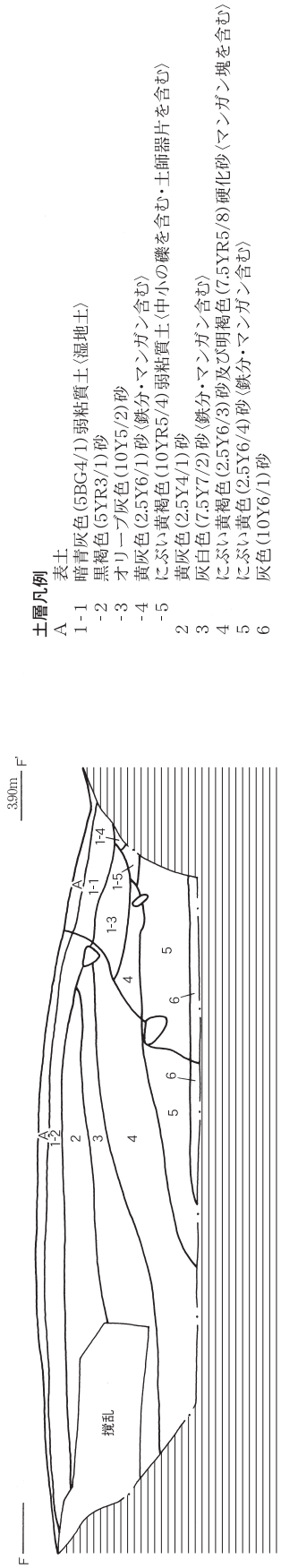


第16図 17-1区北壁・東壁土層断面図

- 土層凡例**
- A 表土
 - B-1 人工的盛砂
 - 2 風成砂
 - 1-1 暗青灰色(5B4/1)弱粘質土(濕地土)
 - 2 オリープ灰色(10Y5/2)砂
 - 2-1 オリープ灰色(5GY5/1)砂(円礫を多く含む)
 - 2 オリープ灰色(2.5GY5/1)砂
 - 3 灰オリープ色(7.5Y5/2)砂
 - 4 黄灰色(2.5Y4/1)砂
 - 5 暗赤褐色(5YR3/6)砂(鉄分・マンガン含む)
 - 6-1 灰白色(7.5Y7/2)砂(鉄分・マンガン含む)
 - 2 灰白色(7.5Y7/2)砂(マンガン塊を多量に含む)
 - 3 にぶい黄褐色(2.5Y6/3)砂(大小の礫を含む)
 - 4 にぶい黄褐色(2.5Y6/3)砂及び明褐色(7.5YR5/8)硬化砂(マンガン塊を含む)
 - 7-1 暗青灰色(5B4/1)砂
 - 2 暗青灰色(5B4/1)砂及び暗赤褐色(5YR3/6)硬化砂
 - 8 灰色(10Y6/1)砂
 - 9 青灰色(10BG5/1)砂
 - 10-1 にぶい黄色(2.5Y6/4)砂(鉄分・マンガン含む)
 - 2 オリープ灰色(10Y6/2)砂(大小の礫を含む)
 - 11 灰色(10Y5/1)砂

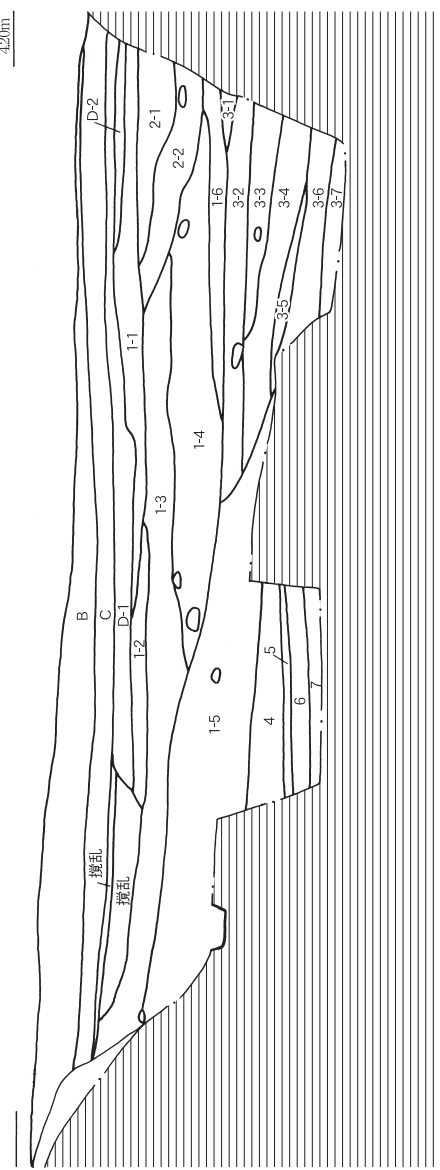


第17図 17-2区北壁・東壁・南壁土層断面図

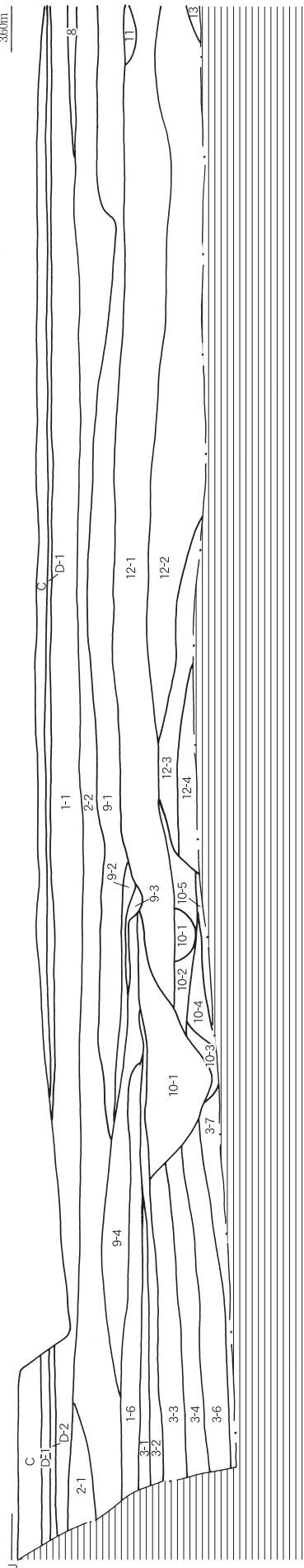


第18図 17-3区北壁・東壁・南壁土層断面図

420m 1'



360m

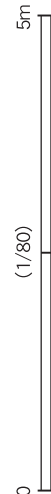


土層凡例

- B 風成砂
- C 耕土
- D-1 盤土
- D-2 盤土
- 1-1 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂
- 1-2 灰黄褐色(10YR4/2)砂
- 1-3 黄褐色(2.5Y5/3)砂
- 1-4 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂
- 1-5 黑褐色(2.5Y3/1)砂(縄文時代遺物を含む)
- 1-6 明黄褐色(2.5Y6/8)砂(玉砂利を含む)
- 1-7 黄褐色(10YR5/8)砂(礫を含む)
- 2-1 灰色(5Y4/1)砂(円礫を含む)
- 2-2 灰オリーブ色(7.5Y5/2)砂
- 2-3 灰色(10Y6/1)砂
- 2-4 暗青灰色(5B4/1)粘質土
- 2-5 灰色(N6/)砂(玉砂利を含む)
- 2-6 明緑灰色(10GY7/1)砂
- 2-7 暗灰色(N3/)粘質土(円礫を含む)
- 3 灰オリーブ黒色(5Y3/1)砂(玉砂利を含む)
- 4 灰白色(10Y7/1)砂及び砂利
- 5

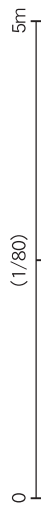
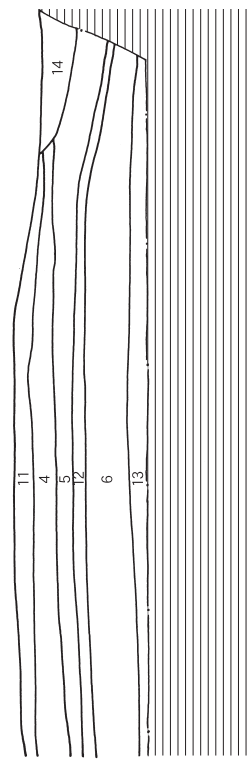
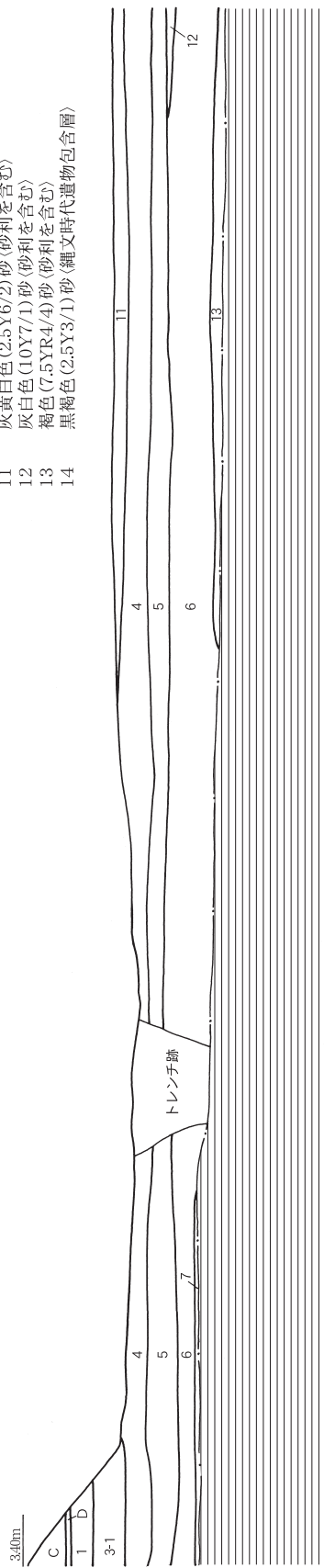
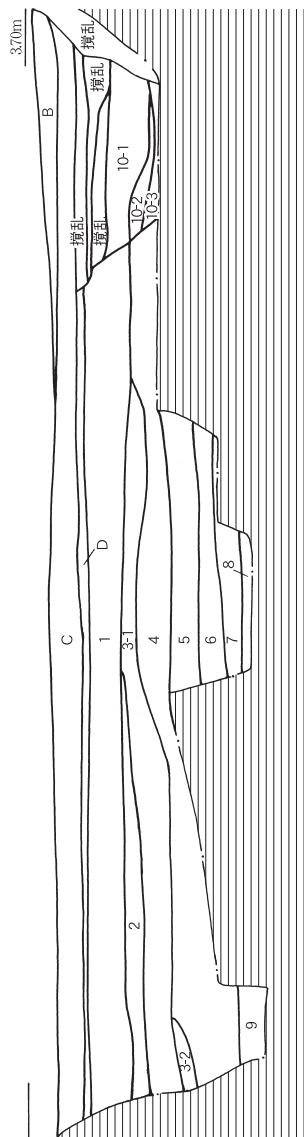
土層凡例

- 6 にぶい黄褐色(10YR5/3)砂
- 7 褐色(7.5YR4/4)砂
- 8 灰色(N6/)粘土
- 9-1 明褐色(7.5YR5/8)砂
- 9-2 黄褐色(2.5Y5/4)砂
- 9-3 オリーブ黒色(5Y3/1)砂(マンガン含む)
- 9-4 明褐色(7.5YR5/6)砂
- 10-1 褐色(7.5YR4/6)砂(玉砂利を含む)
- 10-2 灰色(10Y6/1)砂
- 10-3 明オリーブ灰色(2.5GY7/1)砂
- 10-4 オリーブ灰色(5GY6/1)粘土
- 10-5 赤褐色(2.5YR4/6)砂
- 11 灰オリーブ(5Y5/2)砂
- 12-1 明黄褐色(10YR6/8)砂利(縄文土器片を含む)
- 12-2 灰白色(5Y8/1)砂
- 13 明オリーブ黄色(5Y6/4)砂利(円礫、縄文土器片を含む)
- 14-1 明オリーブ灰色(2.5GY7/1)砂(玉砂利、縄文土器を含む)
- 14-2 緑灰色(7.5GY5/1)(土師器片を含む)
- 15 暗灰色(N3/)砂(弥生土器片を含む)
- 16 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 17 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 18 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 19 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 20 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 21 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 22 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 23 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 24 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 25 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 26 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 27 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 28 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 29 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 30 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 31 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 32 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 33 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 34 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 35 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 36 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 37 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 38 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 39 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 40 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 41 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 42 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 43 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 44 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 45 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 46 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 47 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 48 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 49 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 50 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 51 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 52 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 53 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 54 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 55 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 56 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 57 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 58 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 59 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 60 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 61 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 62 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 63 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 64 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 65 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 66 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 67 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 68 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 69 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 70 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 71 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 72 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 73 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 74 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 75 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 76 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 77 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 78 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 79 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 80 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 81 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 82 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 83 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 84 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 85 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 86 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 87 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 88 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 89 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 90 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 91 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 92 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 93 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 94 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 95 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 96 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 97 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 98 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 99 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)
- 100 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む)



第19図 17・18・4区北壁・東壁土層断面図

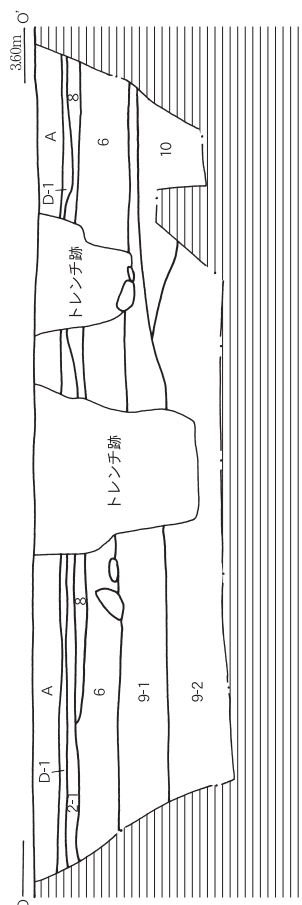
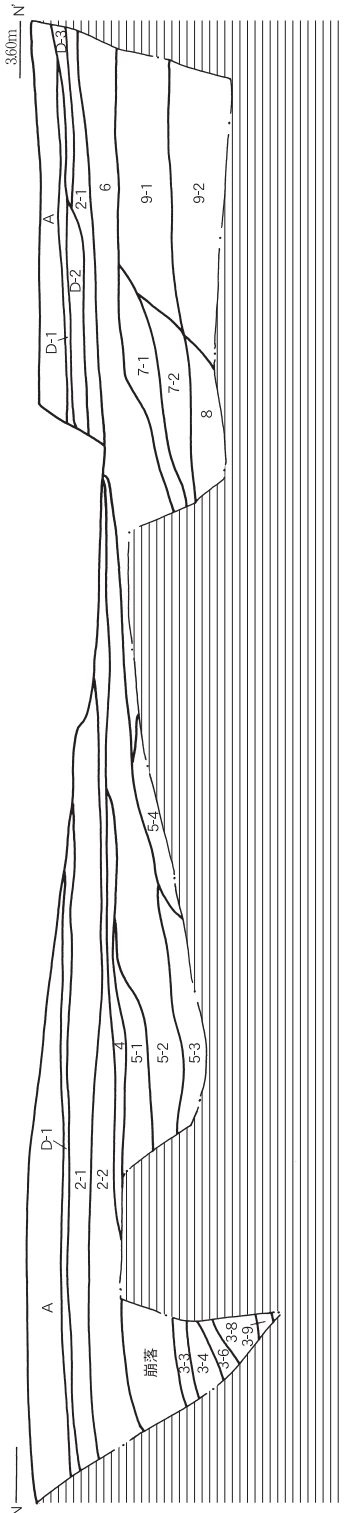
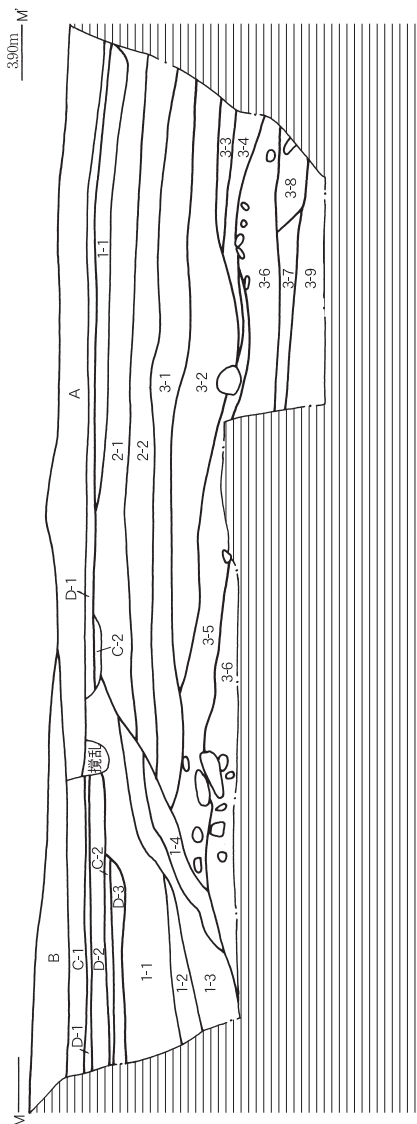
- 土層凡例**
- B 風成砂
 - C 耕土
 - D 盤土
 - 1 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂
 - 2 灰色(N6/)粘土
 - 3-1 緑灰色(7.5GY5/1)砂(土師器片を含む)
 - 2 暗灰色(N3/)砂(弥生土器片を含む)
 - 4 暗褐色(10YR3/3)砂(玉砂利を含む・縄文時代遺物包含層)
 - 5 オリーブ黒色(5Y3/1)砂(砂利を含む)
 - 6 にぶい黄褐色(10YR5/3)砂
 - 7 黒褐色(2.5Y3/1)砂利
 - 8 灰白色(7.5Y8/1)粗砂
 - 9 明オリーブ灰色(2.5GY7/1)砂及び砂利
 - 10-1 灰色(7.5Y4/1)粘質土(土師器片を含む)
 - 2 灰色(N6/)砂(玉砂利、円礫を含む)
 - 3 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂(円礫を含む)
 - 11 灰黄白色(2.5Y6/2)砂(砂利を含む)
 - 12 灰白色(10Y7/1)砂(砂利を含む)
 - 13 褐色(7.5YR4/4)砂(砂利を含む)
 - 14 黒褐色(2.5Y3/1)砂(縄文時代遺物包含層)



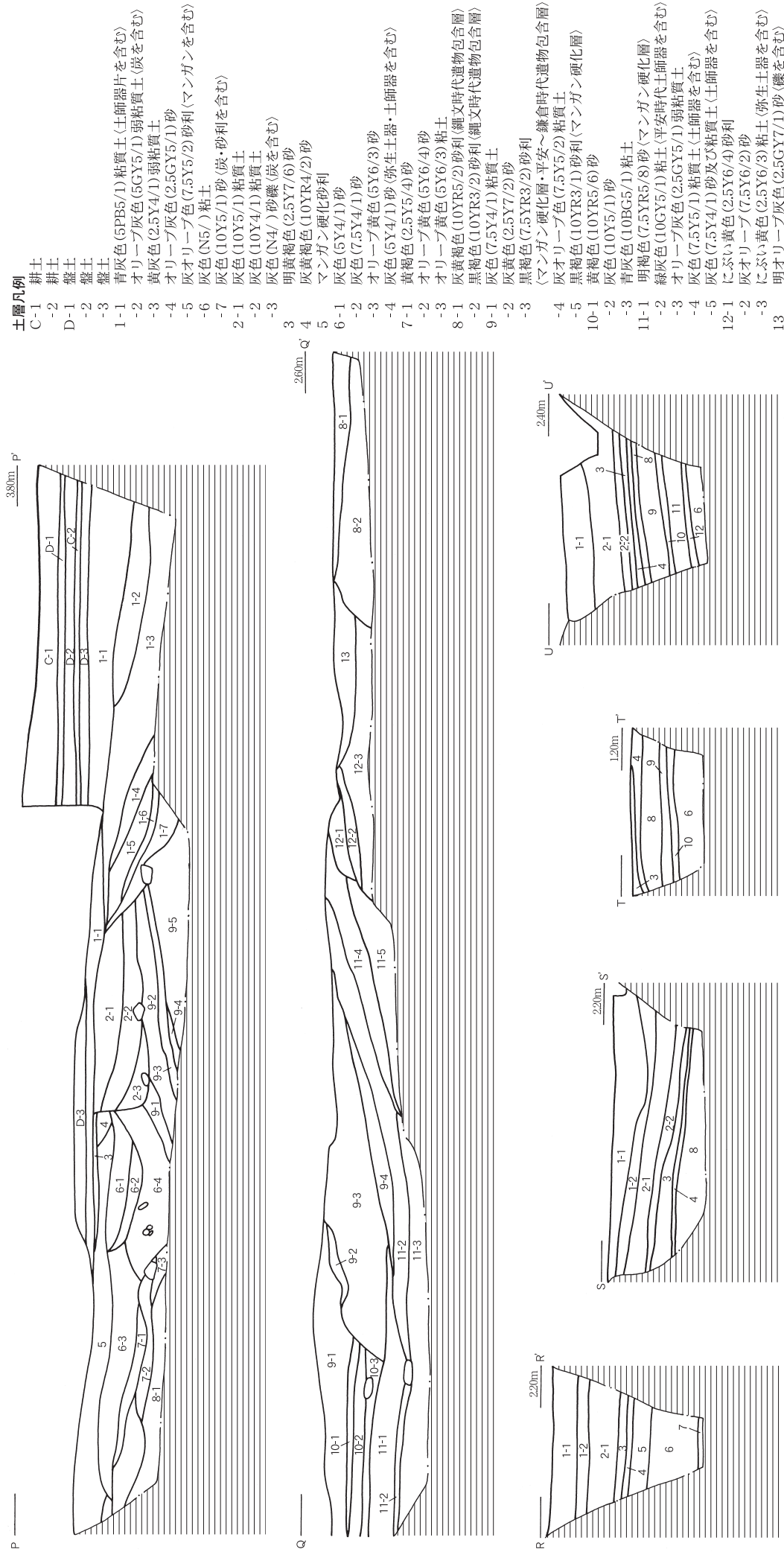
第20図 17・18-4区南壁・トレンチ13西壁土層断面図

- 土層凡例
- A 表土
 - B 風成砂
 - C-1 耕土
 - C-2 耕土
 - D-1 盤土
 - D-2 盤土
 - D-3 盤土
 - 1-1 青灰色(5PB5/1)粘質土
 - 1-2 青灰色(5PB5/1)粘質土
 - 1-3 青灰色(5PB5/1)粘質土
 - 1-4 青灰色(5PB5/1)粘質土
 - 2-1 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-2 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-3 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-4 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-5 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-6 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-7 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-8 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-9 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-10 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-11 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-12 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-13 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-14 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-15 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-16 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-17 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-18 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-19 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-20 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-21 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-22 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-23 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-24 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-25 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-26 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-27 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-28 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-29 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-30 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-31 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-32 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-33 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-34 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-35 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-36 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-37 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-38 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-39 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-40 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-41 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-42 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-43 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-44 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-45 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-46 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-47 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-48 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-49 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-50 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-51 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-52 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-53 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-54 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-55 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-56 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-57 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-58 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-59 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-60 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-61 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-62 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-63 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-64 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-65 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-66 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-67 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-68 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-69 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-70 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-71 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-72 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-73 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-74 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-75 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-76 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-77 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-78 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-79 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-80 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-81 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-82 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-83 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-84 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-85 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-86 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-87 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-88 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-89 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-90 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-91 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-92 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-93 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-94 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-95 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-96 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-97 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-98 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-99 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土
 - 2-100 オリーブ灰色(5GY5/1)弱粘質土

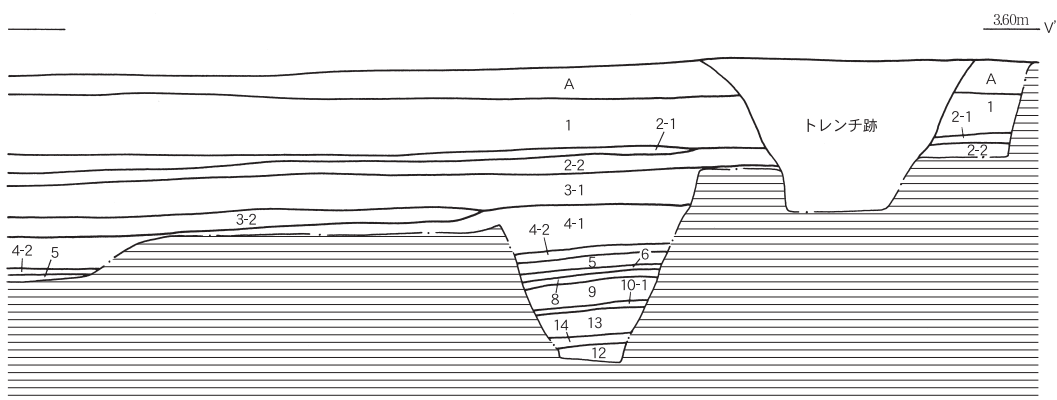
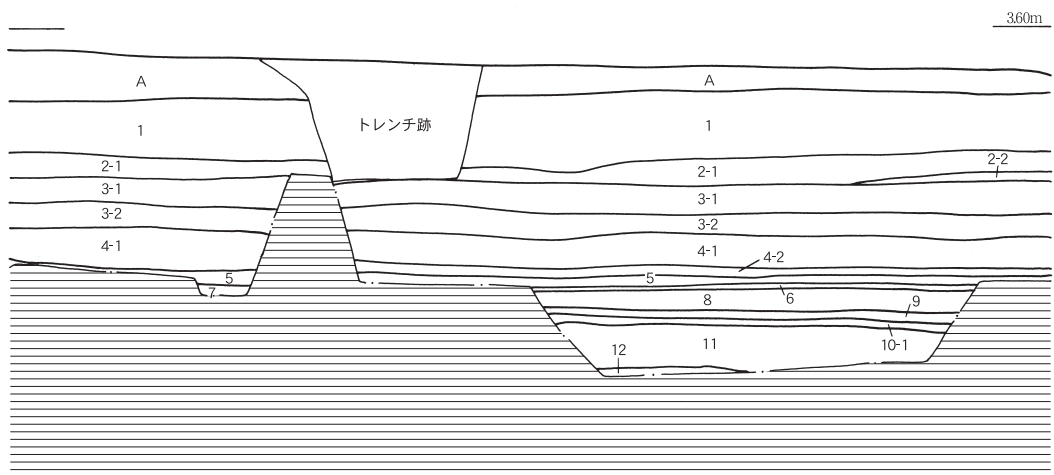
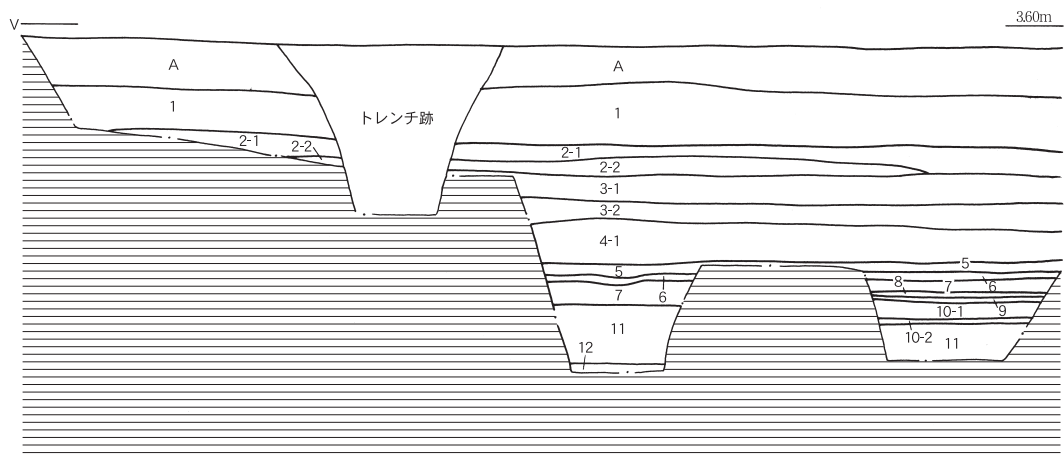
- 5 暗青灰色(5PB3/1)粘土
- 6 灰色(5Y6/1)砂
- 7 黄褐色(10YR5/6)砂
- 8 灰色(N4/)粘質土
- 9 オリーブ黄色(5Y6/4)砂利
- 4 明褐色(7.5YR5/8)砂
- (マンガン硬化層)
- 5-1 灰色(7.5Y4/1)粘質土
- 5-2 黒褐色(7.5YR3/2)砂利
- (マンガン硬化層-平安鎌倉時代の遺物を含む)
- 3 黒色(N1.5/)砂(マンガン硬化層)
- 4 灰オリーブ色(7.5Y5/2)粘質土
- 6 灰黄褐色(10YR4/2)粘質土
- 7-1 灰黄褐色(10YR5/2)粘質土
- 7-2 にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質土
- 8 灰オリーブ色(5Y5/2)粘質土
- 9-1 暗灰黄色(2.5Y5/2)粘質土
- 9-2 灰オリーブ色(5Y5/3)粘質土
- (マンガンを含む)
- 10 灰黄褐色(10YR5/2)砂利
- (縄文時代遺物包含層)



第21図 17・18-5区北壁・東壁・南壁土層断面図

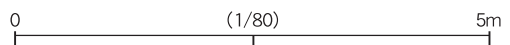


第22図 17・18-5区西壁・トレンチ15東壁、18-6区トレンチ1北壁・トレンチ3北壁・トレンチ4南壁・トレンチ5南壁土層断面図



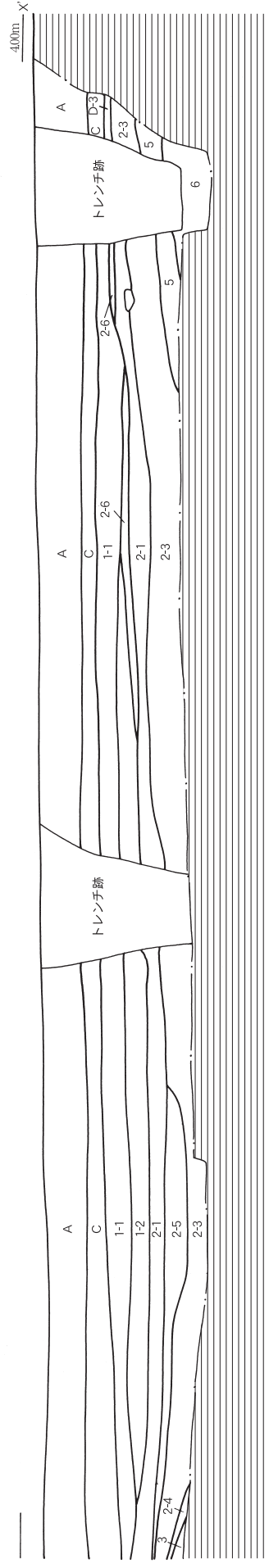
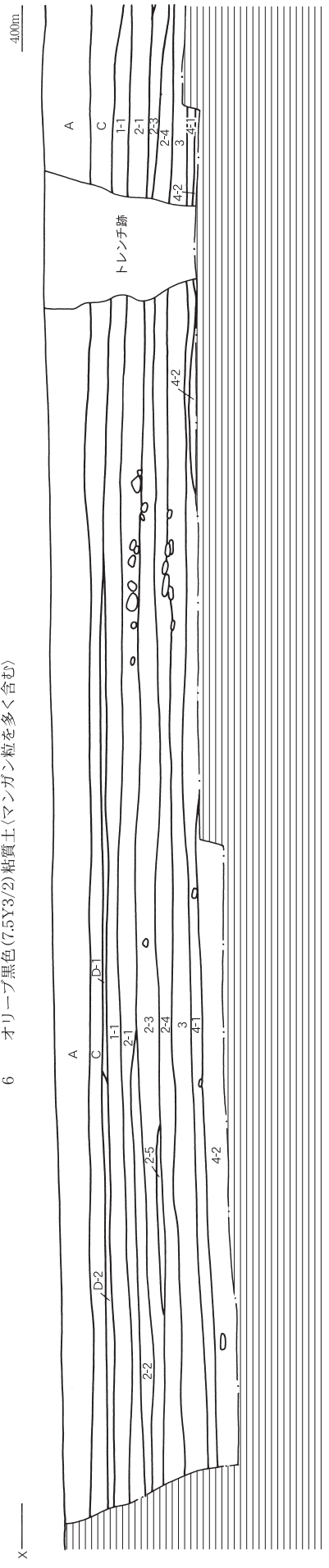
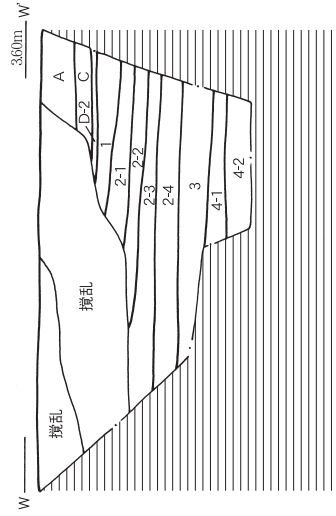
土層凡例

- A 表土
- 1 暗青灰色(5PB4/1)弱粘質土(礫・砂粒を多く含む)
- 2-1 灰色(10Y4/1)砂質土
- 2 灰色(5Y4/1)砂質土
- 3-1 暗灰色(N4/)粘質土(奈良~平安時代遺物包含層)
- 2 暗灰色(N3/)粘質土(奈良~平安時代遺物包含層)
- 4-1 暗青灰色(5PB3/1)粘質土
- 2 暗青灰色(5PB4/1)粘質土
- 5 暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)弱粘質土(弥生土器を含む)
- 6 灰オリーブ色(7.5Y6/2)砂(弥生土器を含む)
- 7 暗青灰色(5B4/1)粘質土(弥生土器を含む)
- 8 オリーブ灰色(2.5GY5/1)砂(弥生土器を含む)
- 9 灰色(N4/)粘質土(弥生土器を含む)
- 10-1 灰色(7.5Y6/1)砂(礫を含む)
- 2 灰色(7.5Y5/1)砂利
- 11 灰白色(7.5Y7/1)砂(弥生土器を含む)
- 12 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)粘質土
- 13 灰色(5Y4/1)粘質土
- 14 黒褐色(10YR2/3)粘質土



第23図 18-6区東壁土層断面図

- 土層凡例**
- 表土
 - A 耕土
 - C 盤土
 - D-1 盤土
 - 2 盤土
 - 3 盤土
 - 1-1 灰黄褐色(10YR4/2)粘質土(中世土師器を含む)
 - 2 暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質土
 - 2-1 灰色(5Y4/1)砂質土(古墳~古代土師器含む)
 - 2 暗灰黄色(2.5Y4/2)弱粘質土(古墳~古代土師器含む)
 - 3 オリーブ褐色(2.5Y4/6)弱粘質土(炭を多く含む、古墳~古代土師器含む)
 - 4 暗灰色(N3/)粘質土(小礫を多く含む)
 - 5 灰色(10Y4/)粘土
 - 6 灰オリーブ色(5Y5/2)粘土(土師器を含む)
 - 3 青灰色(5BG6/1)砂(弥生~古墳時代の遺物を含む)
 - 4-1 灰色(N4/)粘土
 - 2 灰色(5Y4/)粘土
 - 5 黄褐色(2.5Y5/3)粘質土(マンガン粒を多く含む)
 - 6 オリーブ黒色(7.5Y3/2)粘質土(マンガン粒を多く含む)

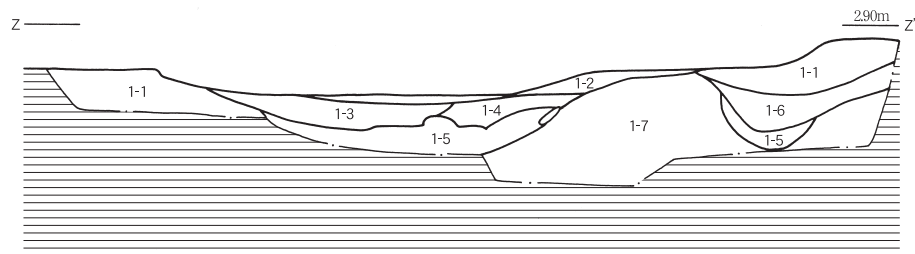
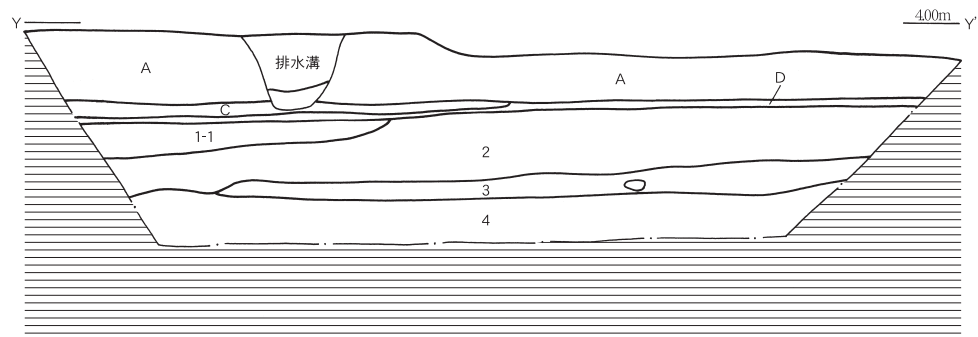


第24図 18-7区北壁・東壁土層断面図

- A：東壁1-1の灰黄褐色粘質土で古代～中世の遺物包含層である。
- B：東壁2-1の灰色砂質土で古墳時代～古代の遺物包含層である。
- C：東壁2-2の暗灰黄色弱粘質土で古墳時代～古代の遺物包含層である。
- D：東壁2-3のオリーブ褐色弱粘質土で古墳時代～古代の遺物包含層である。
- E：東壁2-4の暗灰色粘質土で古墳時代～古代の遺物包含層である。
- F：東壁3の青灰色砂で弥生時代～古墳時代の遺物包含層である。
- G：東壁4-1の灰色粘土であり弥生時代～古墳時代の遺物包含層である。
- H：東壁4-2の灰色粘土であり弥生時代～古墳時代の遺物包含層である。
- I：南壁2の黄褐色粘質土であり古墳時代の遺物包含層である。
- J：南壁3の暗灰黄色弱粘質土であり弥生時代の遺物包含層である。
- K：南壁4のオリーブ黒色粘質土であり、縄文時代の遺物包含層である。

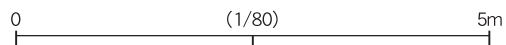
18-6区からサンプルを採取したのは、東壁1の暗青灰色弱粘質土であり、古代（平安時代）の遺物包含層である。

また、リン・カルシウム含量分析のため、17-2区の箱式石棺墓の埋土の灰白色砂及び17-3区の黄灰色砂を比較資料として採取した。



土層凡例

- A 表土
- C 耕土
- D 盤土
- 1-1 オリーブ褐色(2.5Y4/6)弱粘質土(古墳～古代土師器を含む)
- 2 灰色(10Y4/)粘土
- 3 黒色(N2/)粘土(古代～中世土師器を含む)
- 4 暗灰色(N3/)粘土(木片を多く含む)
- 5 にぶい黄色(2.5Y6/3)砂礫
- 6 灰オリーブ色(5Y5/2)粘土
- 7 灰色(10Y5/1)砂礫
- 2 黄褐色(2.5Y5/3)粘質土(マンガン粒を多く含む)
- 3 暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質土(マンガン粒を多く含む)
- 4 オリーブ黒色(7.5Y3/2)粘質土(マンガン粒を多く含む)



第25図 18-7区南壁・トレンチ10東壁土層断面図

2. 遺物

縄文時代

縄文土器（第26図～第54図、図版19～40）

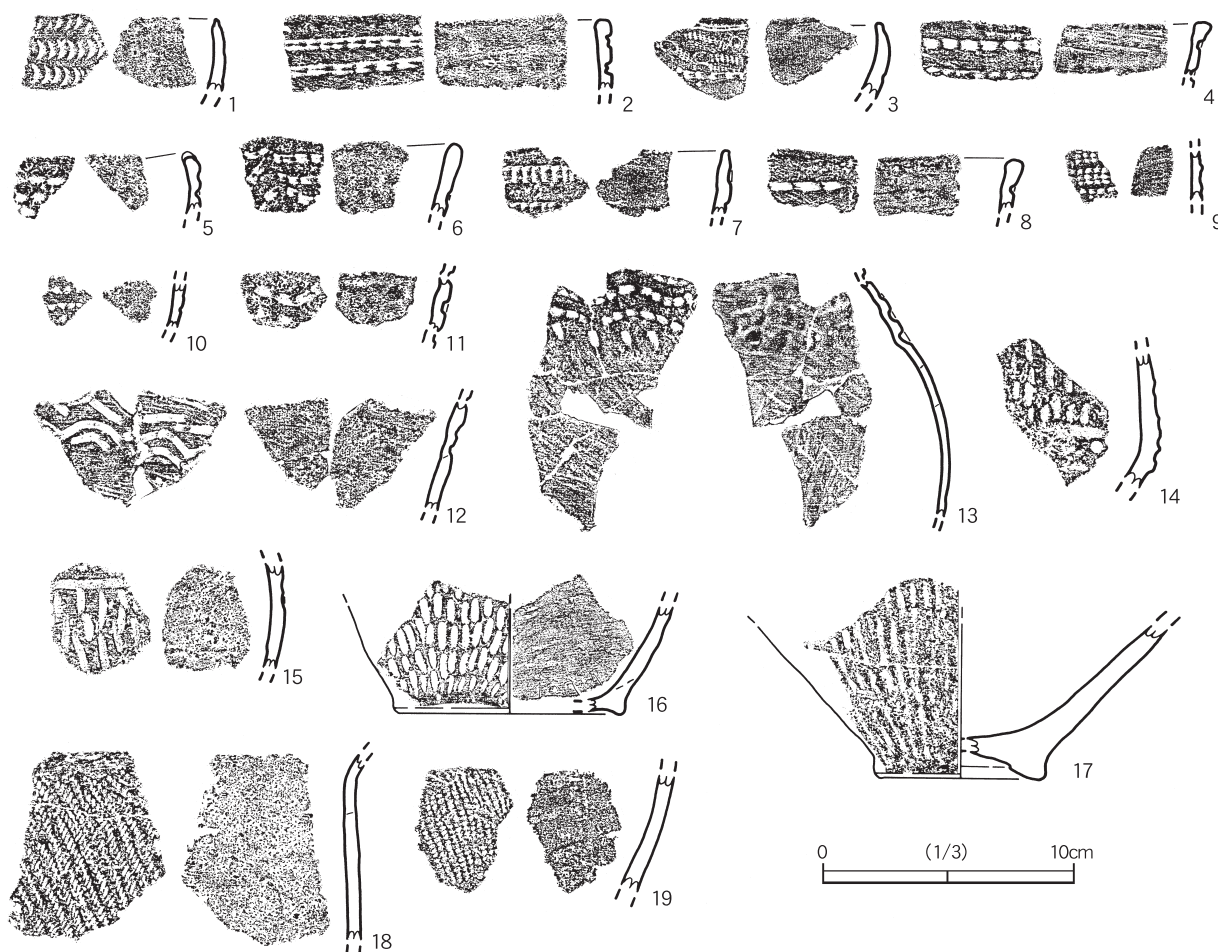
遺物の出土遺構や出土地点・層位などは、一括して項の終わりに一覧表として掲載した。

なお、縄文土器の挿図は、レイアウトを優先して配列を行い、時代順の配列とはしていない。

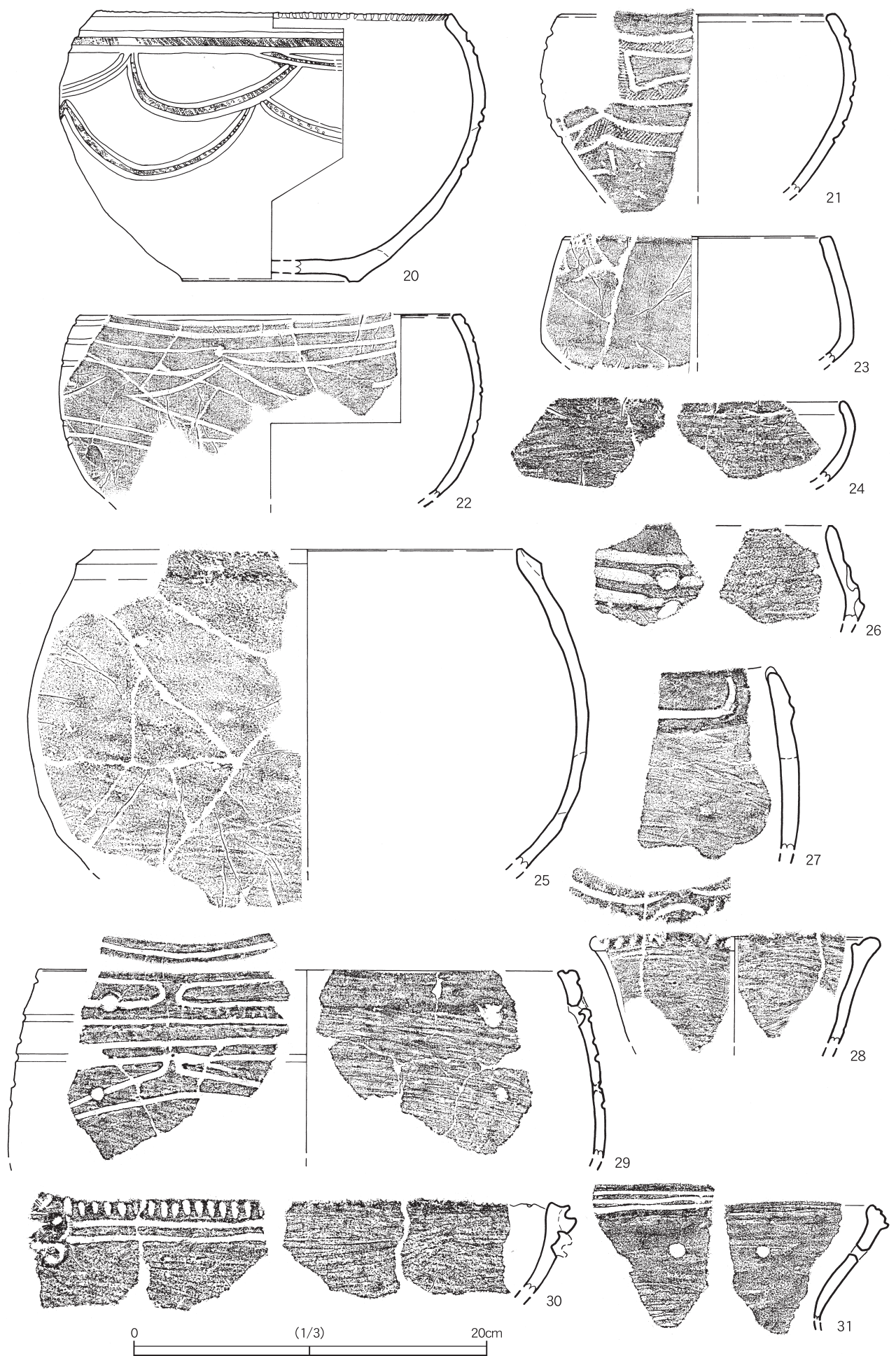
1～17は前期の土器である。1は爪形刺突文をもち、羽島下層Ⅲ式とみられる。2～6・11・13は押し引き刺突文により、内面に凹凸が生じている。彦崎Z1式とみられる。7は羽島下層式の範疇である。9は羽島下層Ⅲ式、14は突帯の上下に刺突文を施し、羽島下層Ⅰ式である。15は曾畑式の深鉢の胴部片。16・17は深鉢の底部で、やや上げ底を呈するものの、器面の短斜線文からみて、曾畑式の変容とみられる。8も胎土や焼成からみて曾畑系とみられる。

18・19は中期土器とみられる。18は器面に粗い縄文を施し、船元Ⅳ式とみられる。19は不明。

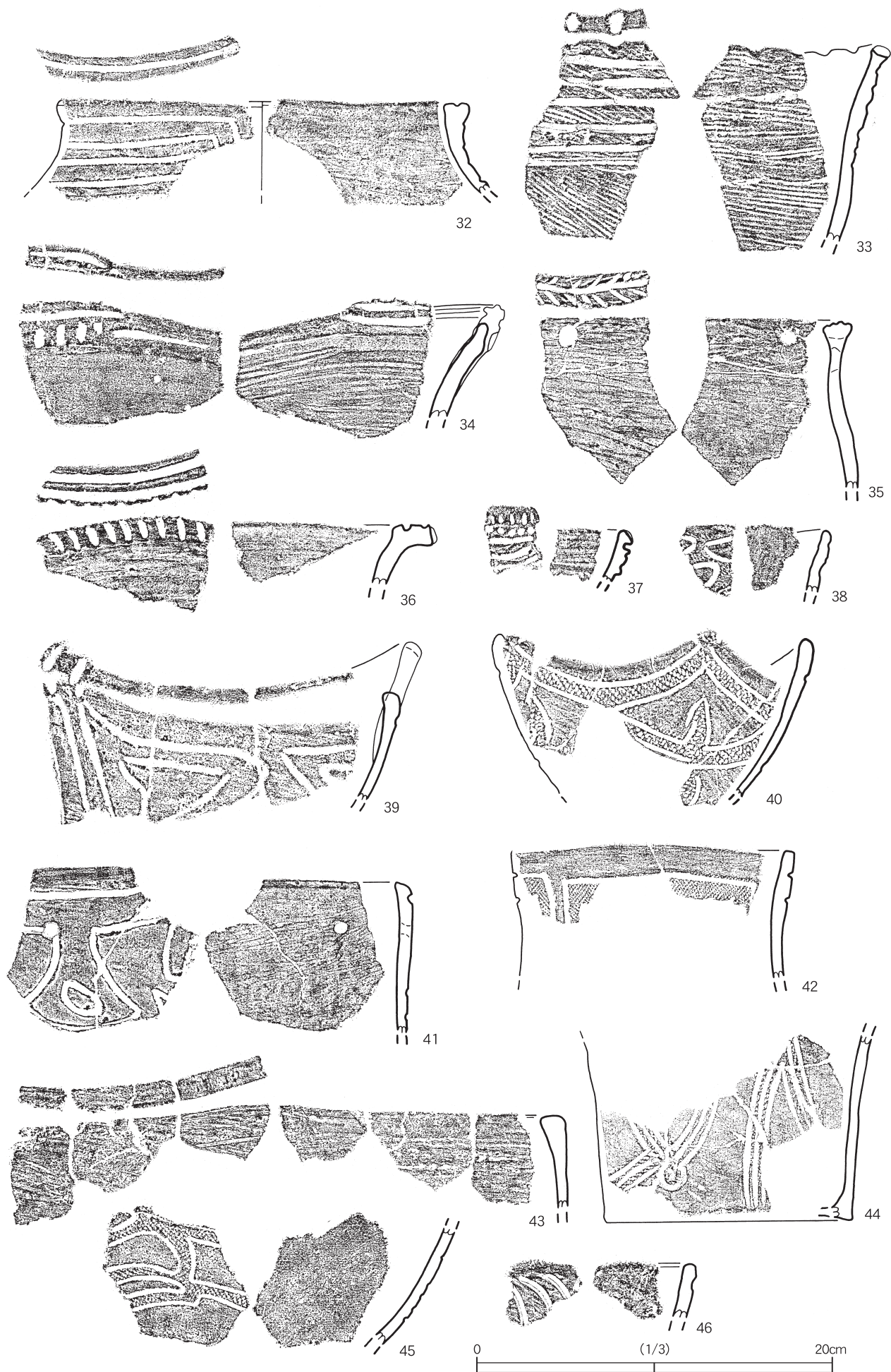
20～385は後期・晩期の土器である。20～22、25・27・29・30はボウル形浅鉢である。20は口唇部に刻みをもつ。体部には磨消縄文を施す。21は外面に磨消縄文を施す。22は口縁部は内湾し、外面は沈線文を施す。23は浅鉢で、器面調整はミガキ。25は口縁部は内湾し、外面に突帯を貼付する。26は口縁部が逆くの字形に屈折し、外面に凹線、刺突文を施す。27は口縁部で、外面に沈線文を施す。28は小型の浅鉢で、口縁端部を拡張し、沈線文や刻みを施す。29は沈線文を施す。沈線上に穿孔があり、



第26図 縄文土器実測図①



第27図 縄文土器実測図②



第28図 縄文土器実測図③

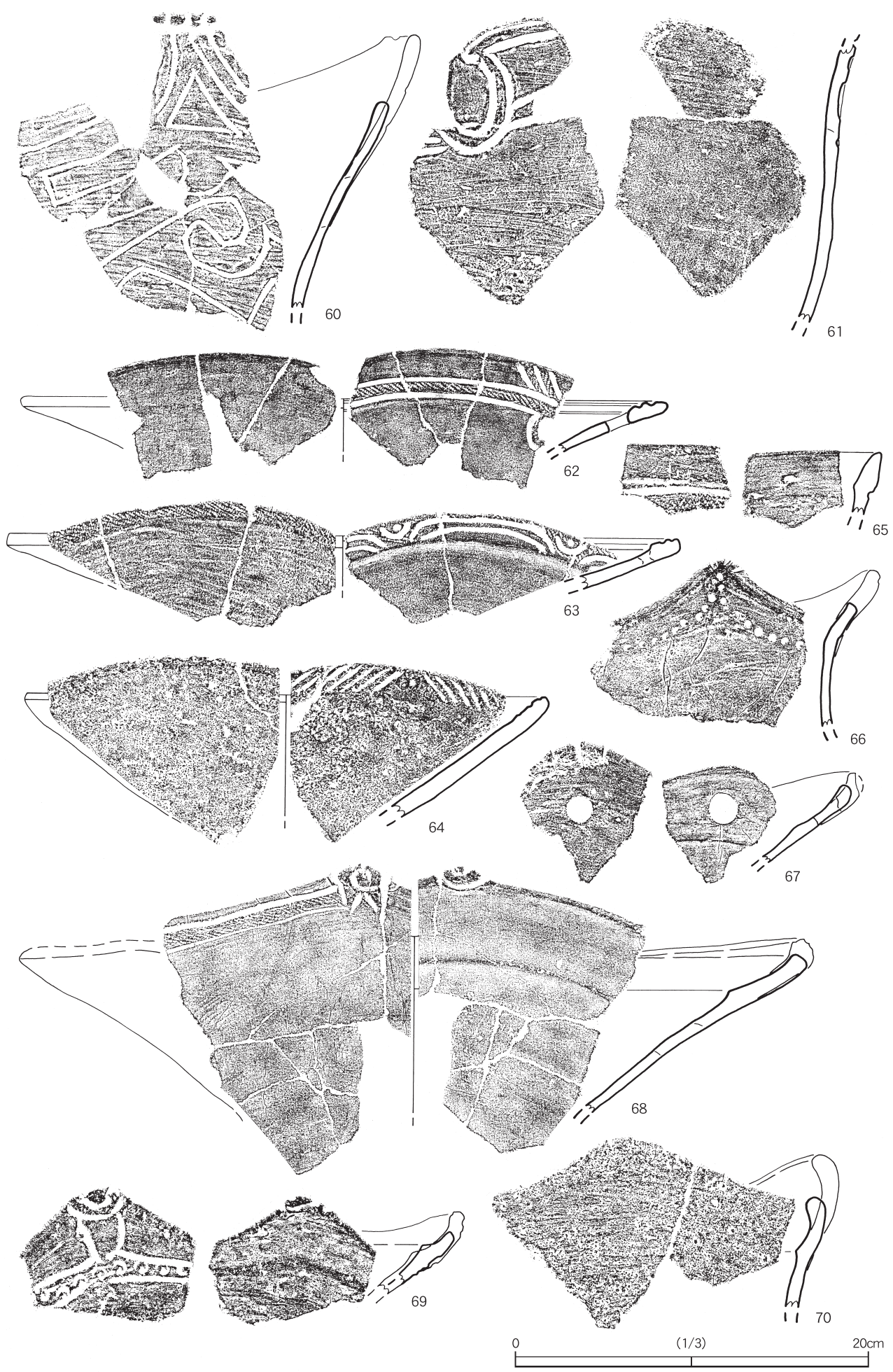
隣接して未貫通孔がある。30は口縁部外側に刻み、以下に2条の沈線をもつ。上下にドーナツ状の装飾を施すが、下側は脱落している。調整は巻貝条痕である。31は口縁部を内方へ拡張し、3条の沈線を施す。口縁部下に焼成前穿孔がある。32は内傾して外湾気味に立ち上がる口縁で、端部は肥厚させる。口唇部および外面に沈線文をもつ。33は口縁部がわずかに外反し、口唇部は円形押圧刻みをもつ。沈線間は縄文ではなく、二枚貝による条痕である。34は波状口縁の頂部に沈線文や刺突文を施す。内面二枚貝条痕、外面ミガキである。35は深鉢で、口縁端部上面に沈線を中心に山形文を連ねて施文する。口縁下に穿孔がある。36は浅鉢で、口縁上面に沈線文、口唇部に刻みを巡らす。37は浅鉢で、竹管文と沈線文を施す。内面は巻貝条痕。38は浅鉢の口縁部で、外面に沈線文をもつ。39は波状口縁をなし、条痕地に沈線文を施す。40は浅鉢で、磨消縄文を施す。波頂部両側に細管状工具による押圧がある。41は口縁部がほぼ直立する。条痕地に沈線文を施し、沈線屈曲部に穿孔をもつ。42は浅鉢で、口縁部はわずかに外反し端部は面をもつ。磨消縄文を施す。43は深鉢で、口縁部はほぼ直立し、内面を肥厚させる。44は浅鉢の胴部片で、外面に磨消縄文。45は浅鉢で、外面に磨消縄文。46は口縁部で、外面に曲線文を施す。胎土中に多量の雲母を含む。

47は深鉢である。波状口縁をなし、口縁外面屈曲部には竹管文、口縁部と胴部に磨消縄文を施す。内面に黒色の付着物がある。48は深鉢で、胴部下位が張り、緩やかに外反する体部が続く。口縁部は緩やかに内湾し、外面をやや肥厚させる。波頂部の片側のみ円形押圧刻みを施す。49は深鉢で、口縁部の外面をやや肥厚させる。50は突起部で、磨消縄文を施す。51は突起部で、凹線を施した粘土帯を立体的に組み合わせる。52は浅鉢で、外面に磨消縄文。53は外面および口唇部に羽状や斜線状の沈線文を施す。54は浅鉢で、外面に連弧状の文様を巡らす。55は浅鉢で、端部を肥厚させ、上面は平坦に整えている。調整はミガキ。56は口縁内面の屈曲部に稜を持ち、端部は内傾して立ち上がる。57・58は注口部で、57は基部付近の断面は隅丸方形をなす。58は胎土に多量の雲母を含む。59は浅鉢で、口縁部は肥厚させ、内面に稜をもつ。内外面ともミガキ。60は深鉢で、山形口縁をなす。条痕地に沈線文を施し、内外面とも巻貝条痕。61は胴部片で、外面に沈線文を施す。62は浅鉢で、口縁内面に磨消縄文。焼成前穿孔あり。63は浅鉢で、口縁部はやや肥厚させる。内面の肥厚部に磨消縄文。64は浅鉢で口縁内面に斜線文を施す。66は山形口縁の波頂部で、外面に竹管文を施す。67は浅鉢で、口縁内面屈曲部に稜をもつ。焼成前の穿孔は装飾とみられる。68は浅鉢で、口縁部はやや肥厚させ、内面に稜をもつ。端部周辺に磨消縄文。69は浅鉢とみられ、内面屈曲部に稜をもつ。外面は沈線文と巻貝による竹管文。70は波状口縁の波頂部で、口縁部は内湾し、内面屈曲部に稜をもつ。

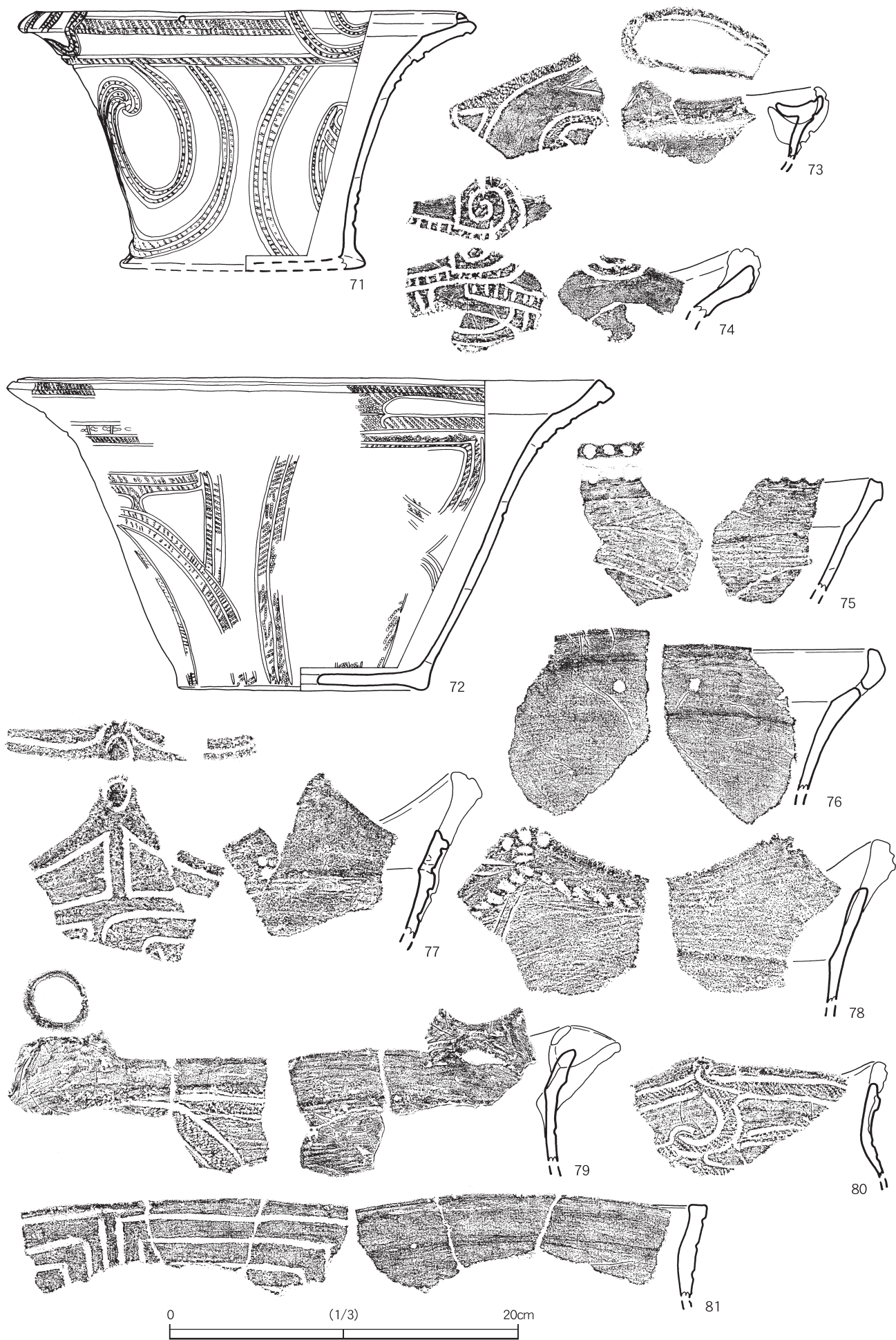
71は浅鉢で底部を欠失する。口縁部内面は屈折部に稜をもつ。端部は内傾し、立ち上がり部に穿孔がある。全面に磨消縄文。72は浅鉢で、底部に焼成後穿孔がある。磨消縄文。73は波頂部で、突起部の外面に磨消縄文がある。74は波頂部を拡張し、沈線文を施す。75は外傾する口縁部で、内面屈折部に段をもつ。端部は拡張し、口唇部に円形押圧刻みをもつ。76は口縁端部を内方へ拡張し、内面屈曲部に稜をもつ。焼成後穿孔がある。77は浅鉢で、山形口縁の頂部。口縁内面は屈曲部に稜をもち、条痕地に沈線文を施す。屈曲部に穿孔があり、隣接して未貫通孔がある。78は山形口縁の頂部で、内面屈曲部に稜を持ち、外面に刺突文を施す。79は深鉢の口縁部で、つまみ状突起をもつ。外面は磨消縄文。80は波状口縁をなし、口縁部は緩やかに外反し、外面は磨消縄文。81は口縁部がわずかに外反し、



第29図 縄文土器実測図④



第30図 縄文土器実測図⑤



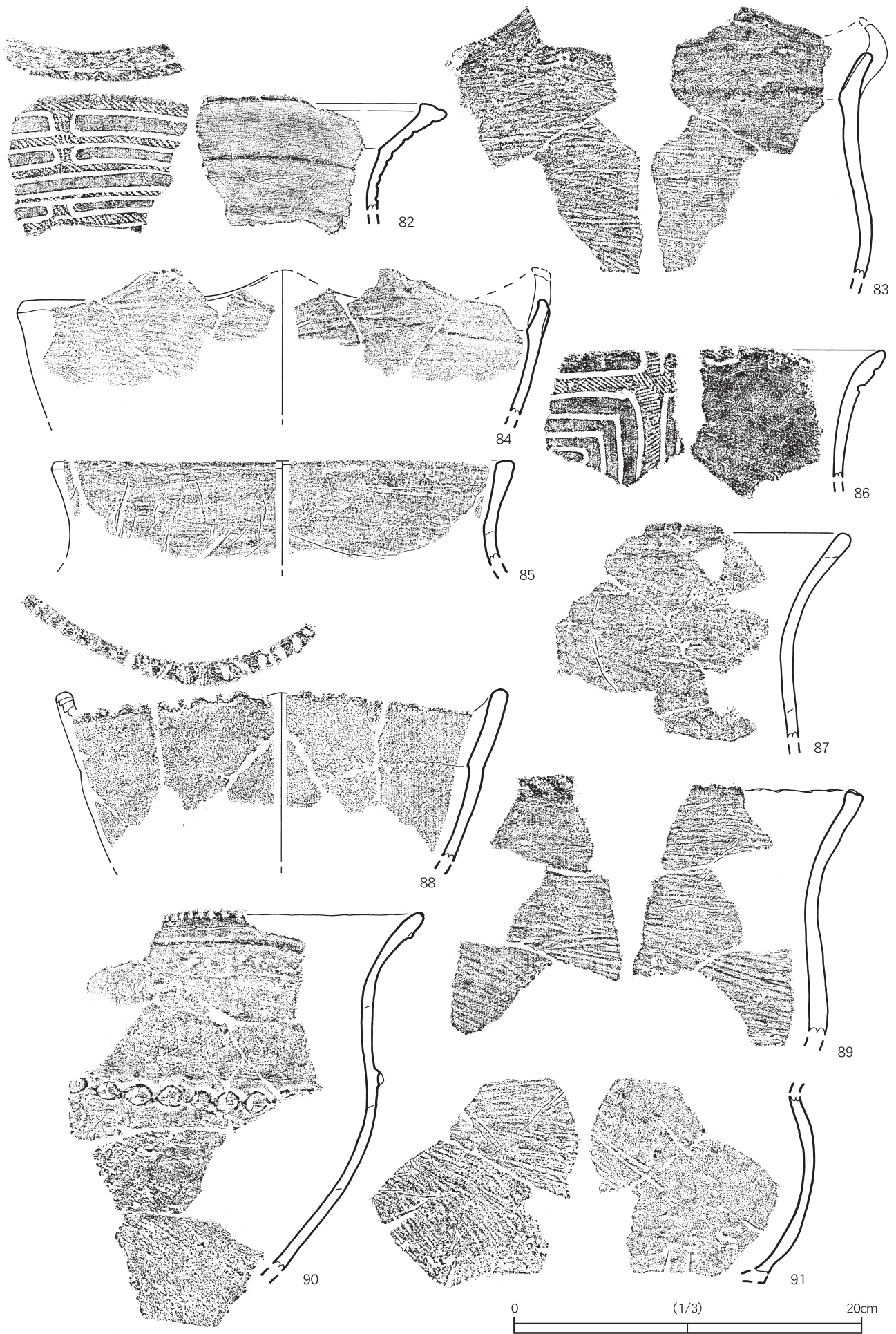
第31図 縄文土器実測図⑥

端部は面をもつ。外面は条痕地に沈線文を施す。82は浅鉢で、口縁部は外反し、端部は内面に拡張する。口縁内面は屈曲部に稜をもつ。外面に磨消縄文を施す。83は深鉢で、山形口縁をなす。口縁部は緩やかに外反し、内面屈折部に稜をもつ。84は深鉢の口縁部で、山形口縁をなし、口縁内面の屈曲部に稜をもつ。調整は巻貝条痕。85は、端部は肥厚し面をもつ。器面調整は巻貝条痕後ミガキ。86は緩やかに外反する口縁部で、磨消縄文を施す。87は深鉢で、口縁部は緩やかに弧を描き外反する。88は深鉢で、波状口縁をなす。口唇部に刻みを施し、口縁内面屈曲部に稜をもつ。胎土中に多量の雲母を含む。89は深鉢で、口縁部は緩やかに弧を描いて外反し、口唇部に刻みをもつ。90は、口縁部および胴部に突帯を貼付する。口唇部に刻み、胴部突帯に連鎖状円形押圧を施す。

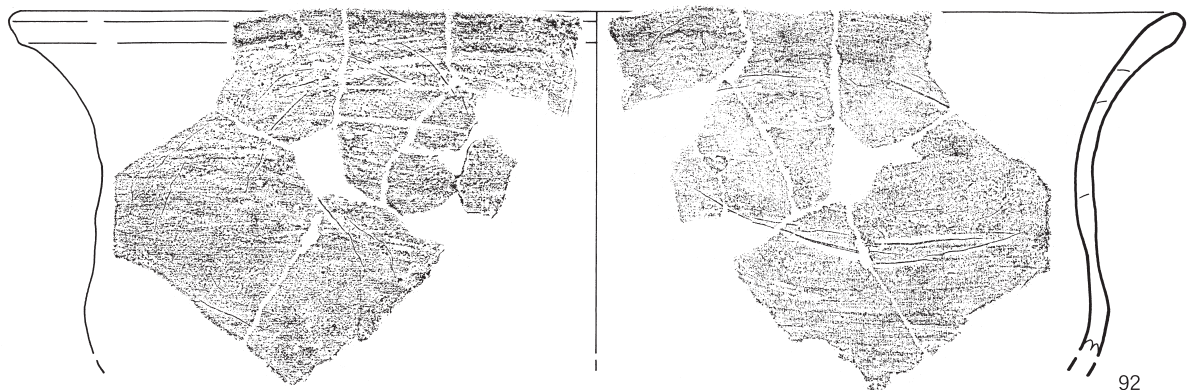
92は胴部上位が張り、緩やかに弧を描いて外反する口縁部が続く。93は大型の深鉢片。山形口縁をなし、内外面とも条痕である。95は深鉢で、わずかに上げ底をなす。胴部は内湾して立ち上がり、屈曲して外反する長い口縁部が続く。口縁内面および外面屈曲部下に沈線を巡らす。口縁部に焼成後穿孔が2つある。器面調整は巻貝条痕後ナデ。96は波状口縁で、口縁部は外反し、端部を肥厚させる。口唇部に沈線、刻みを施す。98は深鉢で、口縁部は波状口縁をなす。波頂部周辺のみ刻みを施す。99は深鉢で、緩やかに外反する口縁部の外面を肥厚させ、下端付近に竹管文を配する。竹管文は列状に連なり、部分的に渦状に回る。100は深鉢で、口縁部は外面を肥厚させ、下端付近に竹管文を施す。波状口縁をなし、波頂部より片側のみ刻みをもつ。101は外反する口縁部を拡張し、口唇部に沈線と刻み、外面に沈線および竹管文を施す。104は深鉢で、口縁部は緩やかに外反する。106は口縁部がやや長く外傾する。磨消縄文は疑似縄文とみられる。107は浅鉢で、底部は平底で、体部は内湾し、口縁部は緩やかに弧を描いて外反する。胎土中に多量の雲母を含む。109は内傾する口縁部で、上端はわずかに外方に反り、端部は丸みをもつ。111は、口縁部は波状口縁をなし、外面は条痕地に沈線文を施す。112は、口縁部は弧を描いて緩やかに外反する。口縁部外面をやや肥厚させる。

114は大型の深鉢で、口縁部は弧を描いて緩やかに外反し、外面に沈線文を施す。117は上位が張る胴部に外反する口縁部が続く、端部に向かってしだいに厚みを増す。118は突起部で、端部は円形を呈する。沈線文を施す。119は口縁部がわずかに内湾気味に立ち上がり、波頂部口唇および外面に竹管文を施す。120は胴部上位が張り、外反する短い口縁部が続く。波状口縁をなし、内外面とも巻貝条痕。121は上位が張る胴部に、外反する短い口縁部が続く。122は深鉢で、口縁部は内傾し、外面は肥厚させる。口唇部は刻みを施し、肥厚部下端付近に竹管文を施す。123は口縁部は弧を描いて緩やかに外反し、外面に1条の沈線を巡らす。124は胴部上位が張り、内傾する口縁部が続く。口縁端部を拡張し、口唇部に刻みを施す。125は注口部とみられる。大型品で、断面形は基部付近が隅丸方形、先端部付近が円形である。126は口縁部は緩やかに外反し、上端部外面に突帯を貼付する。128は口縁部で、端部は円形押圧を連ねた刻みをもつ。129は深鉢で、磨消縄文。130はボウル形浅鉢の口縁部で、並列して2個の穿孔がある。131はボウル状浅鉢で、内面に曲線状に突帯をもつ。132は深鉢で、口縁部は内湾気味に立ち上がる。胎土中に多量の雲母を含む。133は波状口縁で、外面は沈線文を施す。134は山形口縁の波頂部で、外面をやや肥厚させ、竹管文を施す。135は口縁外面を肥厚させ、上下2段に巻貝による竹管文を施す。

136は深鉢で、波状口縁をなす。内面巻貝条痕、外面二枚貝条痕。137は深鉢で、口縁部はやや内湾



第32図 縄文土器実測図⑦



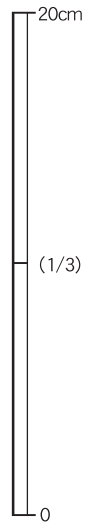
92



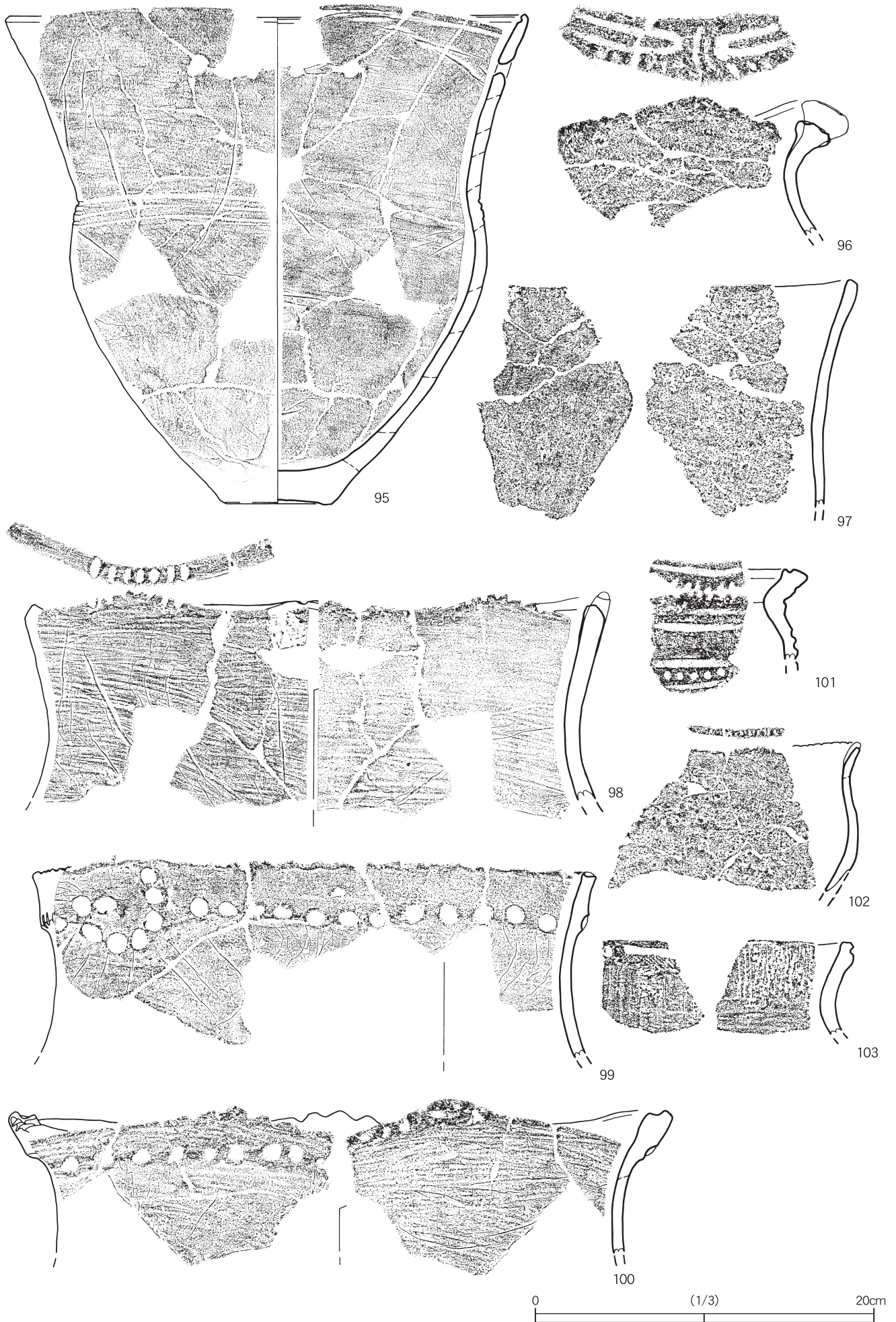
93



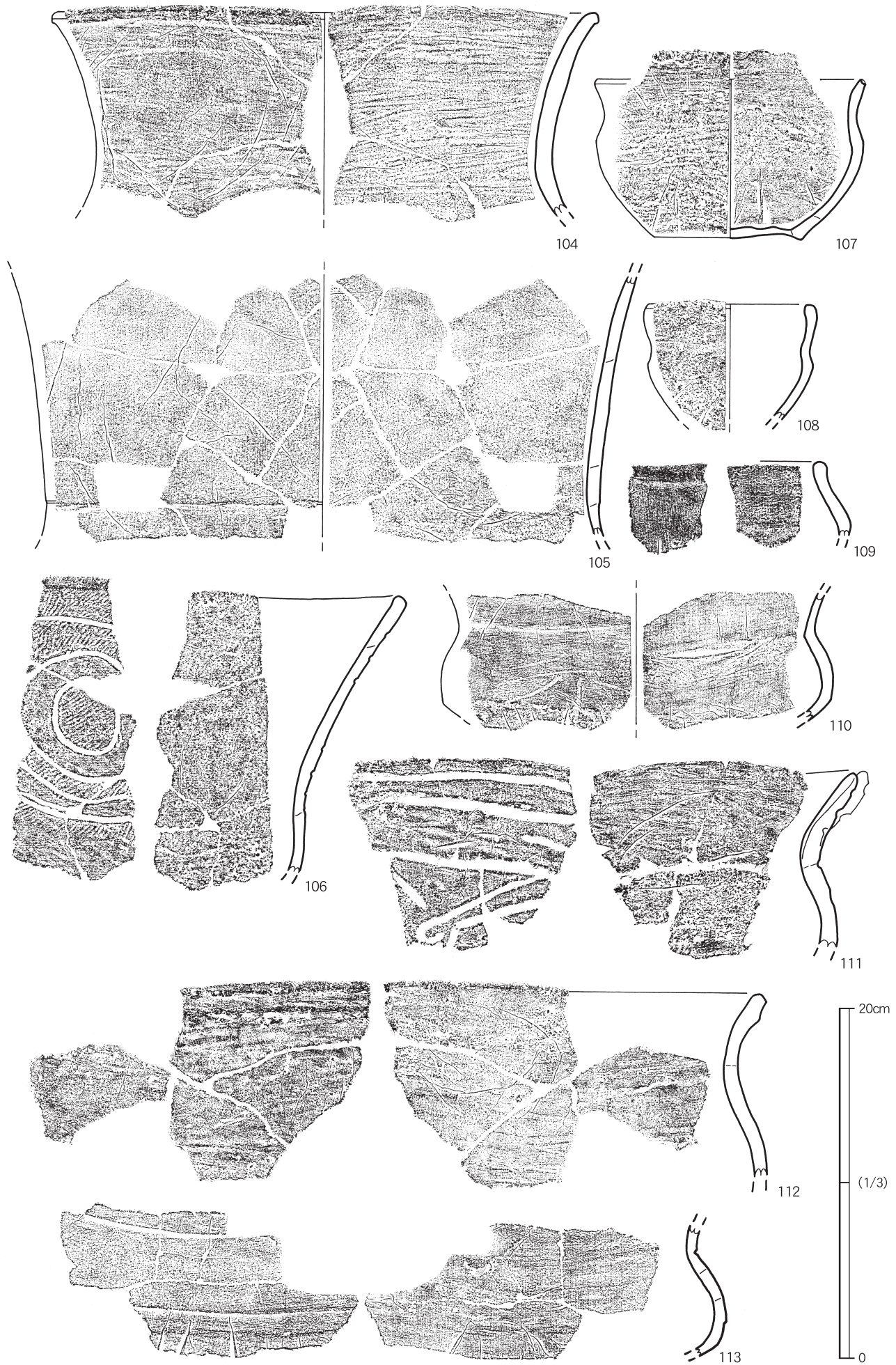
94



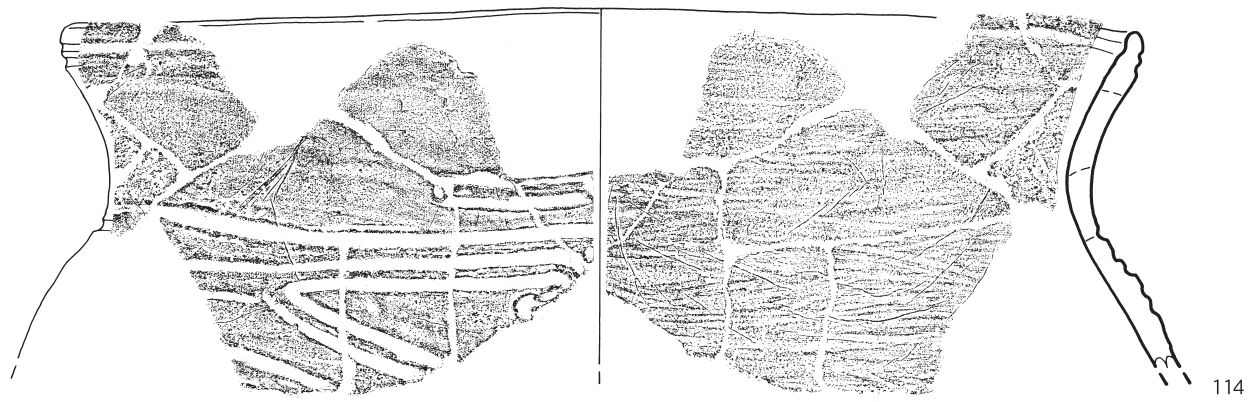
第33図 縄文土器実測図⑧



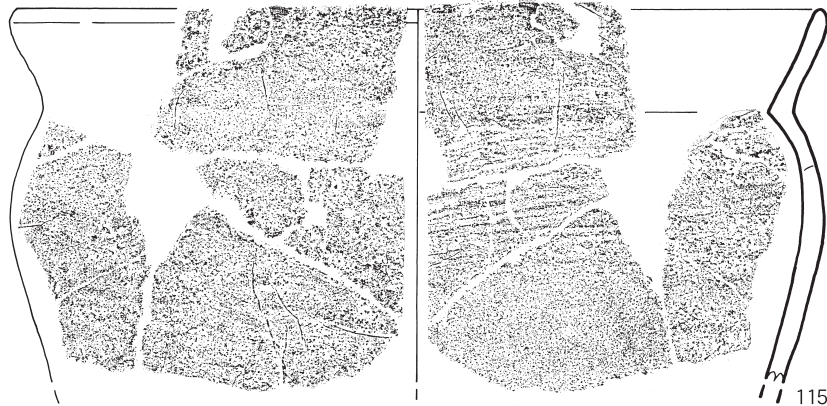
第34図 縄文土器実測図⑨



第35図 縄文土器実測図⑩



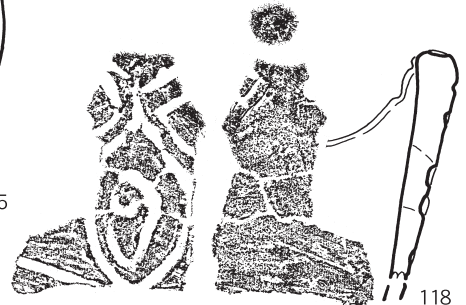
114



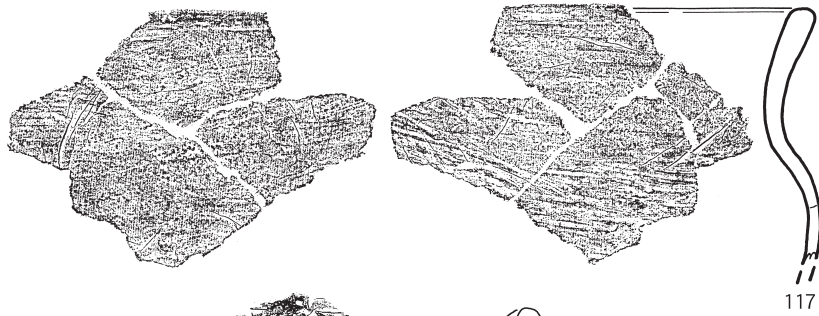
115



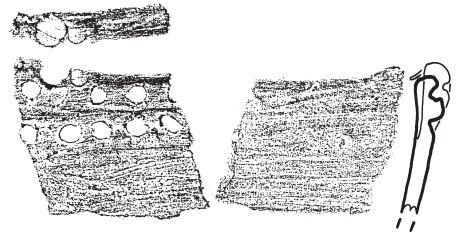
116



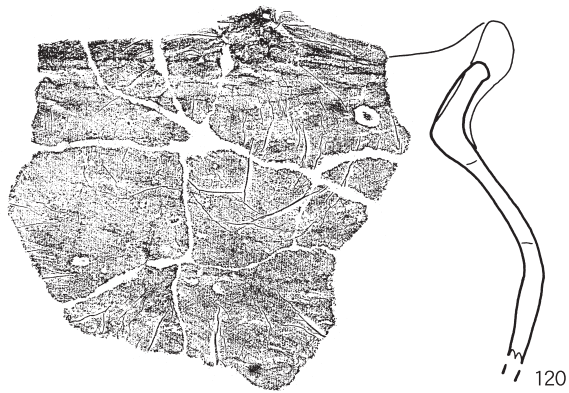
118



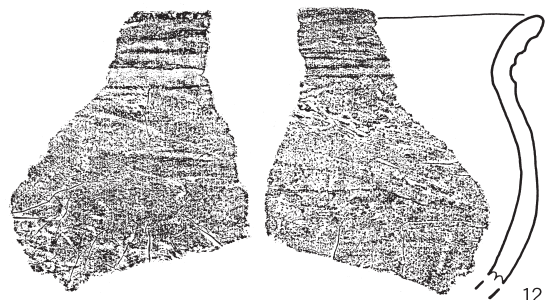
117



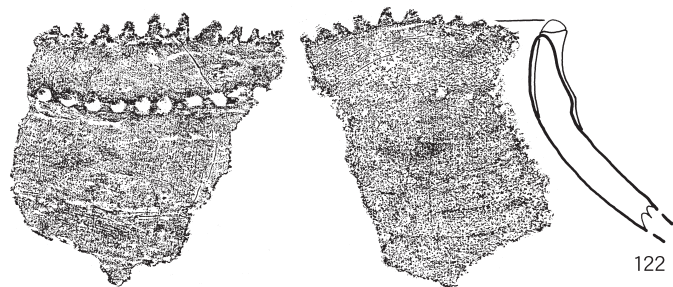
119



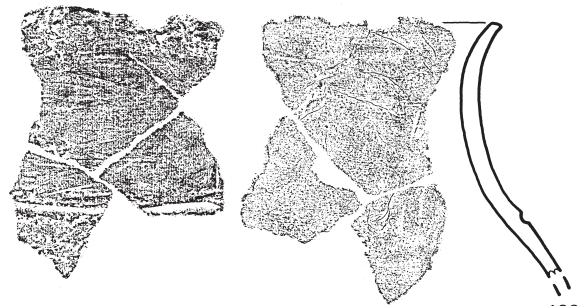
120



121



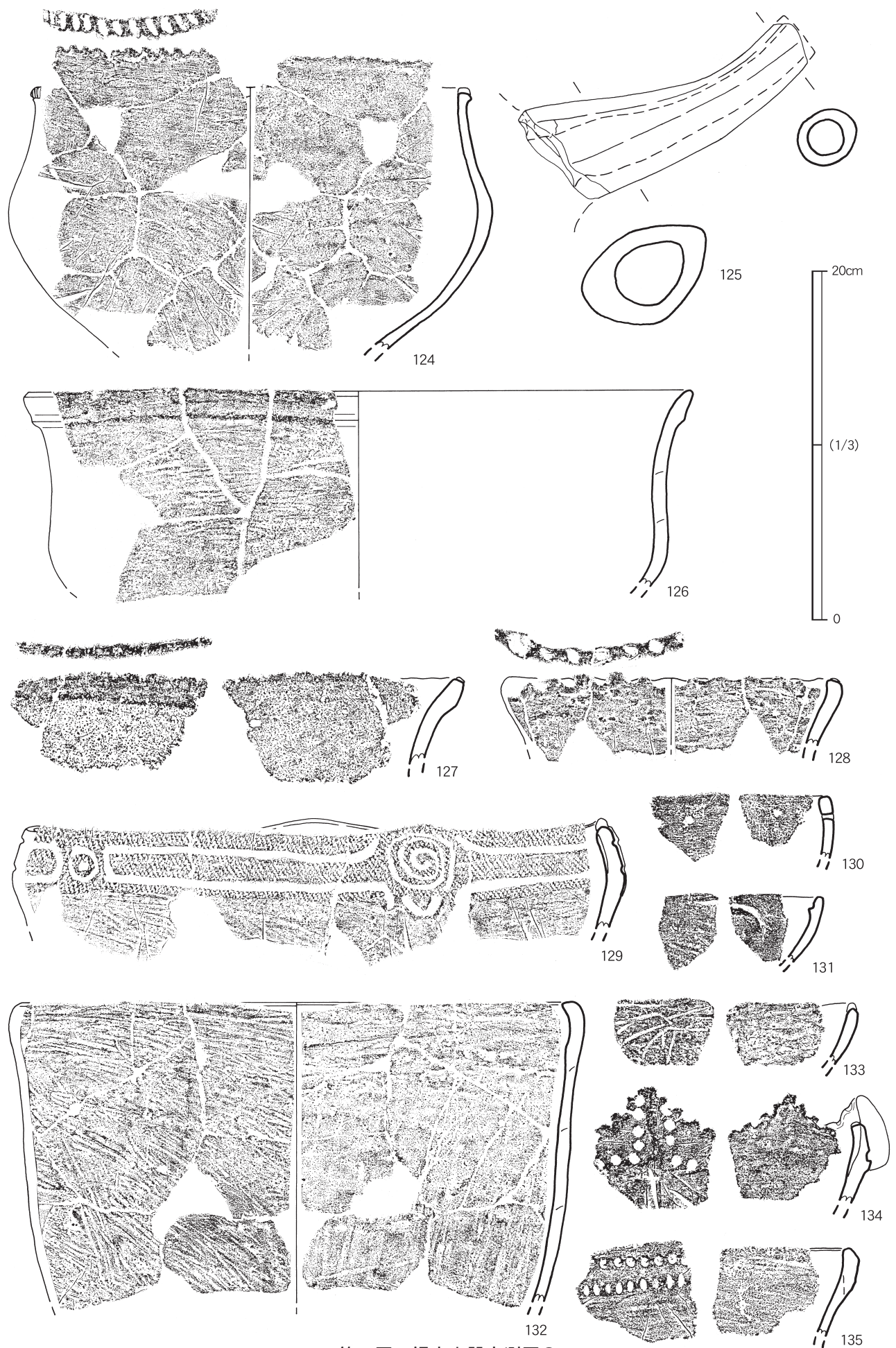
122



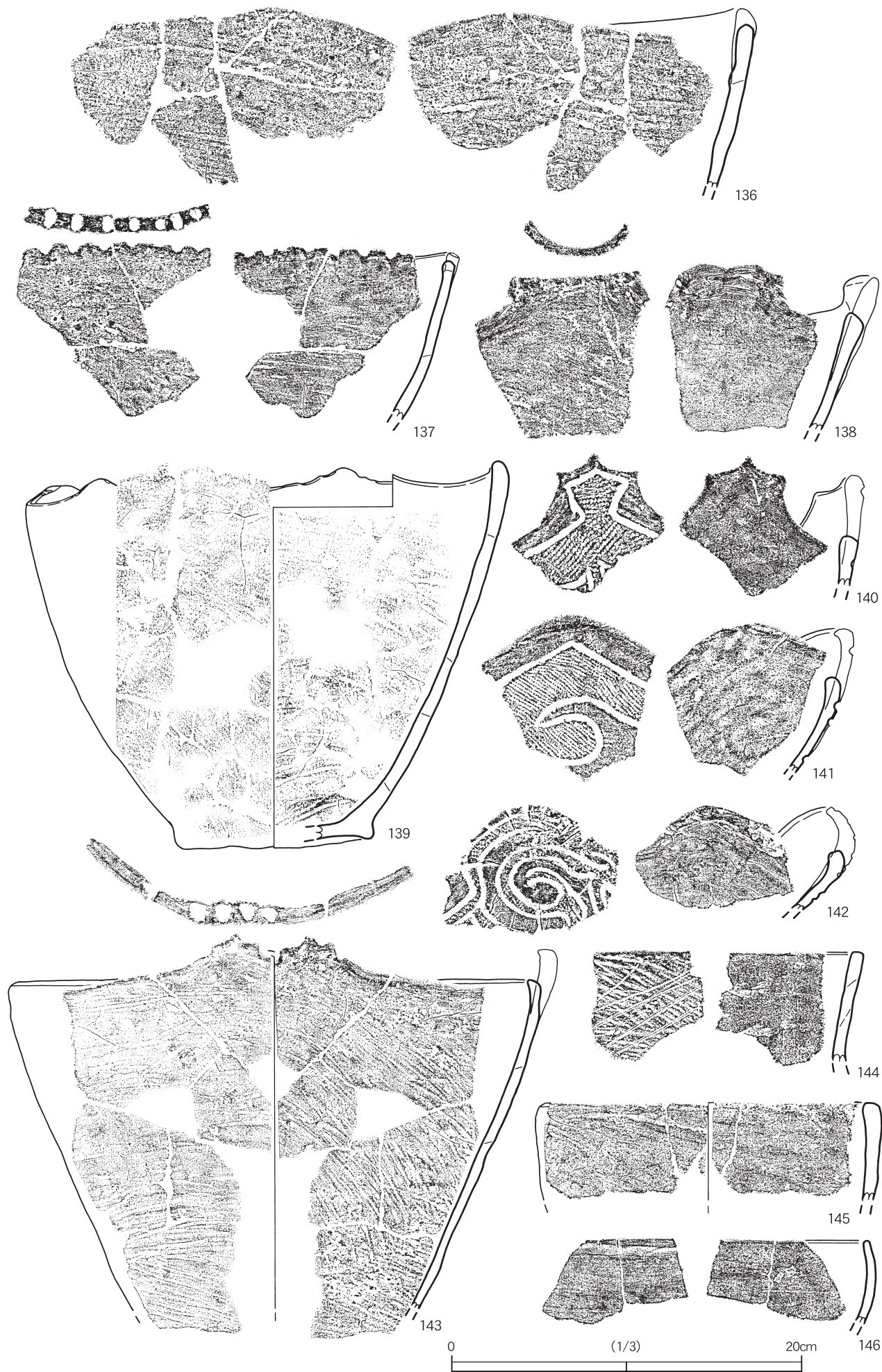
123

0 (1/3) 20cm

第36図 縄文土器実測図①



第37図 縄文土器実測図⑫

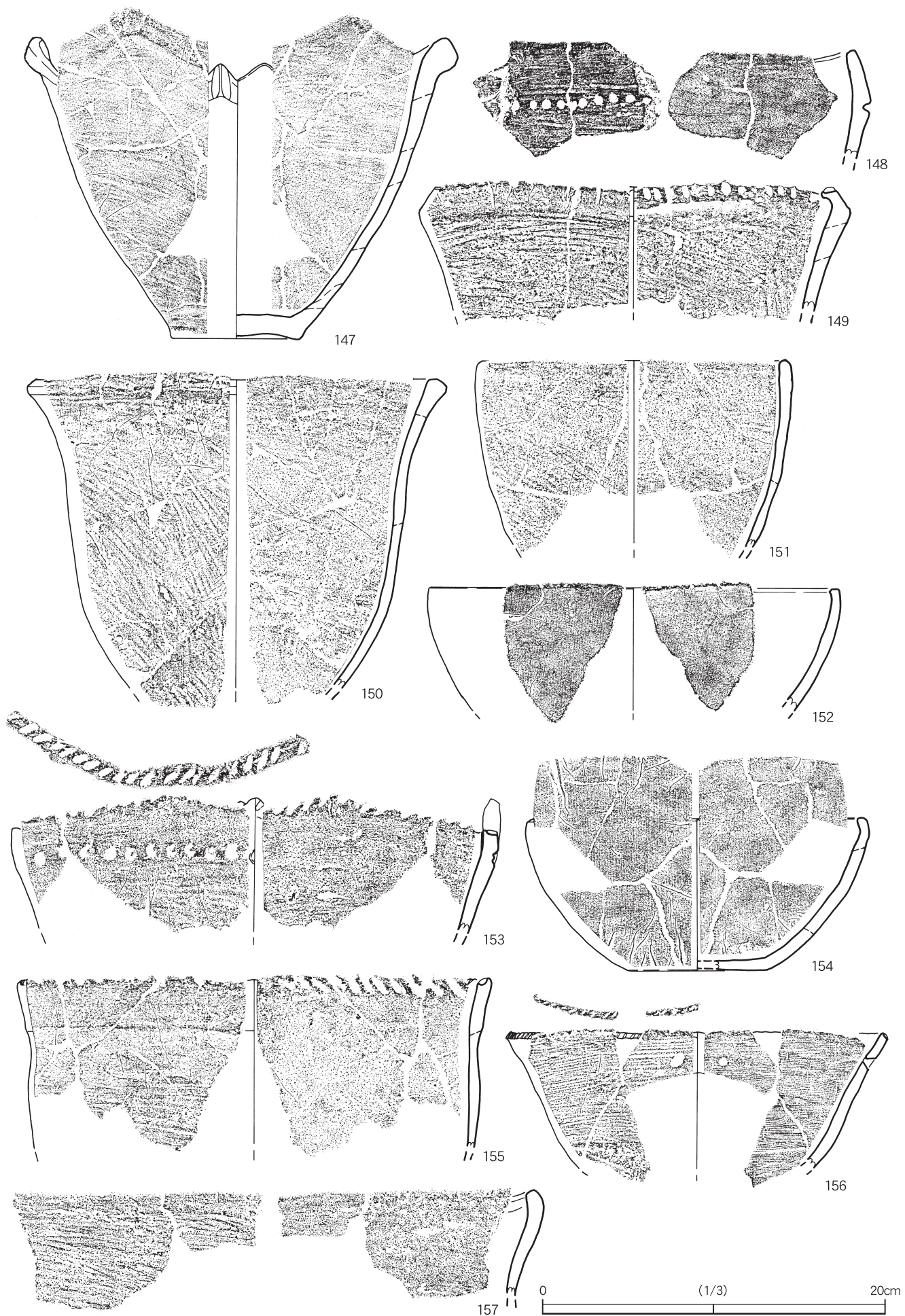


第38図 縄文土器実測図⑬

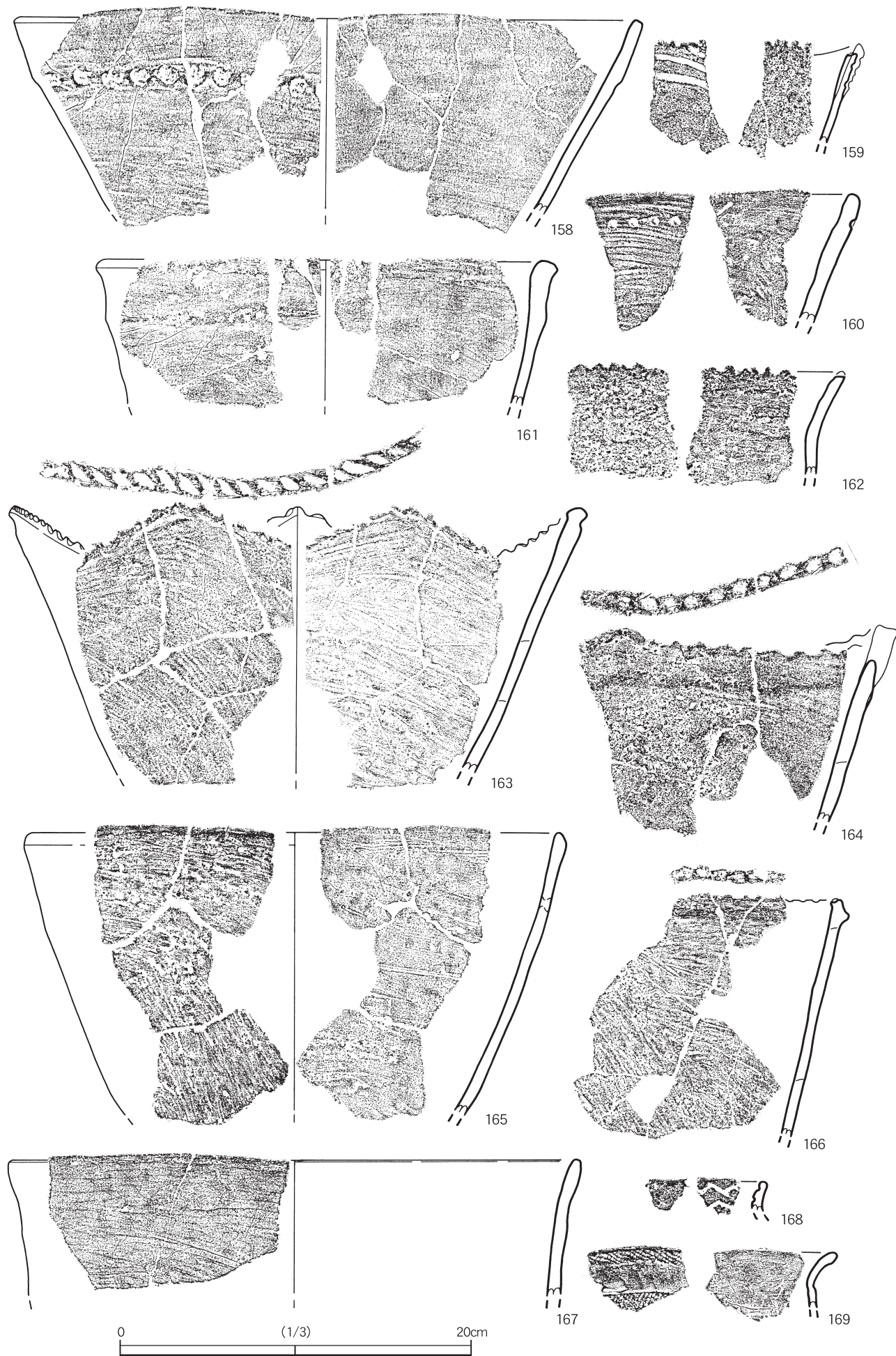
気味に立ち上がり、口唇部に円形押圧刻みを施す。138は突起部で、注口状をなし、断面形は半弧状である。139は深鉢で波状口縁をなす。底部はやや上げ底を呈し、体部は内湾気味に立ち上がる。口縁部はやや肥厚し、端部は丸みをもつ。140は突起部で、外面は磨消縄文。141は内湾気味に立ち上がる口縁の波頂部で、外面は磨消縄文。142は内湾気味に立ち上がる口縁部の波頂部で、渦巻き状の沈線文をもつ。143は深鉢で、波状口縁をなし、口縁部はやや内湾する。波頂部周辺のみ刻みを施す。調整は二枚貝条痕。144は深鉢で、口縁部はわずかに外傾し、端部は面をもつ。外面にヘラ描き斜線文を施す。145は口縁部がほぼ直立気味に立ち上がり、端部はやや肥厚させる。147は深鉢で、口縁部外面に肥厚帯がめぐる。148は内湾する口縁部の外面に竹管文を施す。149は深鉢で、口縁部は逆くの字形に屈折し、口唇部に刻みを施す。150は深鉢で、口縁部は緩やかに外反し、端部に向かってしだいに厚みを増す。151は深鉢で、内湾気味に立ち上がる。153は深鉢で、波状口縁をなし、端部に刻みを施す。口縁外面を肥厚させ巻貝による竹管文を施す。154はボウル形の浅鉢で、体部～口縁部は内湾して立ち上がる。内外面ともミガキ。155は深鉢で、口縁部外面を肥厚させ、口唇部内側に刻みをもつ。156は浅鉢とみられ、口唇部に刻みを施し、口縁部下に穿孔がみられる。外面ハケ、内面は二枚貝条痕。157は深鉢で、口縁部は内湾し、やや肥厚させる。胎土中に多量の雲母を含む。

158は深鉢で、口縁外面の肥厚部下端に竹管文を施す。胎土中に多量の雲母を含む。159は口唇部に刻み、外面に沈線文を施す。160は深鉢の口縁部で、口縁外面に巻貝による竹管文を施す。161は深鉢で、口縁部は外面を肥厚させる。163は深鉢で、山形口縁をなす。胴部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり、端部は刻みをもつ。164は深鉢で、口縁部は波状口縁をなす。口唇部は波頂部を境に片側のみ円形押圧刻みをもつ。165は深鉢で、口縁部は内湾気味に立ち上がる。穿孔は焼成前に行う。調整は巻貝条痕。166は深鉢で、口縁外面に突帯を貼付し、口唇部に円形押圧刻みを施す。167は深鉢で、口縁部はわずかに外反する。168は短く外反する口縁部の内面に二段のヘラ描き山形文を施す。169は口縁部は外反し、磨消縄文。170は深鉢で、口縁外面がやや肥厚する。171は深鉢で、わずかに波状口縁をなす。172は浅鉢の口縁部で、外面に刺突文がある。173は浅鉢で、口縁部はくの字形をなし、端部は内方へ拡張する。外面に沈線文を施す。174は浅鉢で、口縁部は内湾気味に立ち上がる。外面に沈線文を巡らす。胎土中に多量の雲母を含む。175は浅鉢で、半球形の体部から屈折して、外傾する短い口縁部が続く。体部外面に沈線を3条巡らす。176は口縁部外面に凹線を施す。177は深鉢で、口縁部は肥厚させる。178は浅鉢で、口唇部に刻みをもつ。180は深鉢で、口縁部はやや肥厚させている。内外面とも二枚貝条痕後ナデ。181は浅鉢で、体部から屈折して内湾気味に立ち上がる口縁部が続く。内外面ともミガキ。

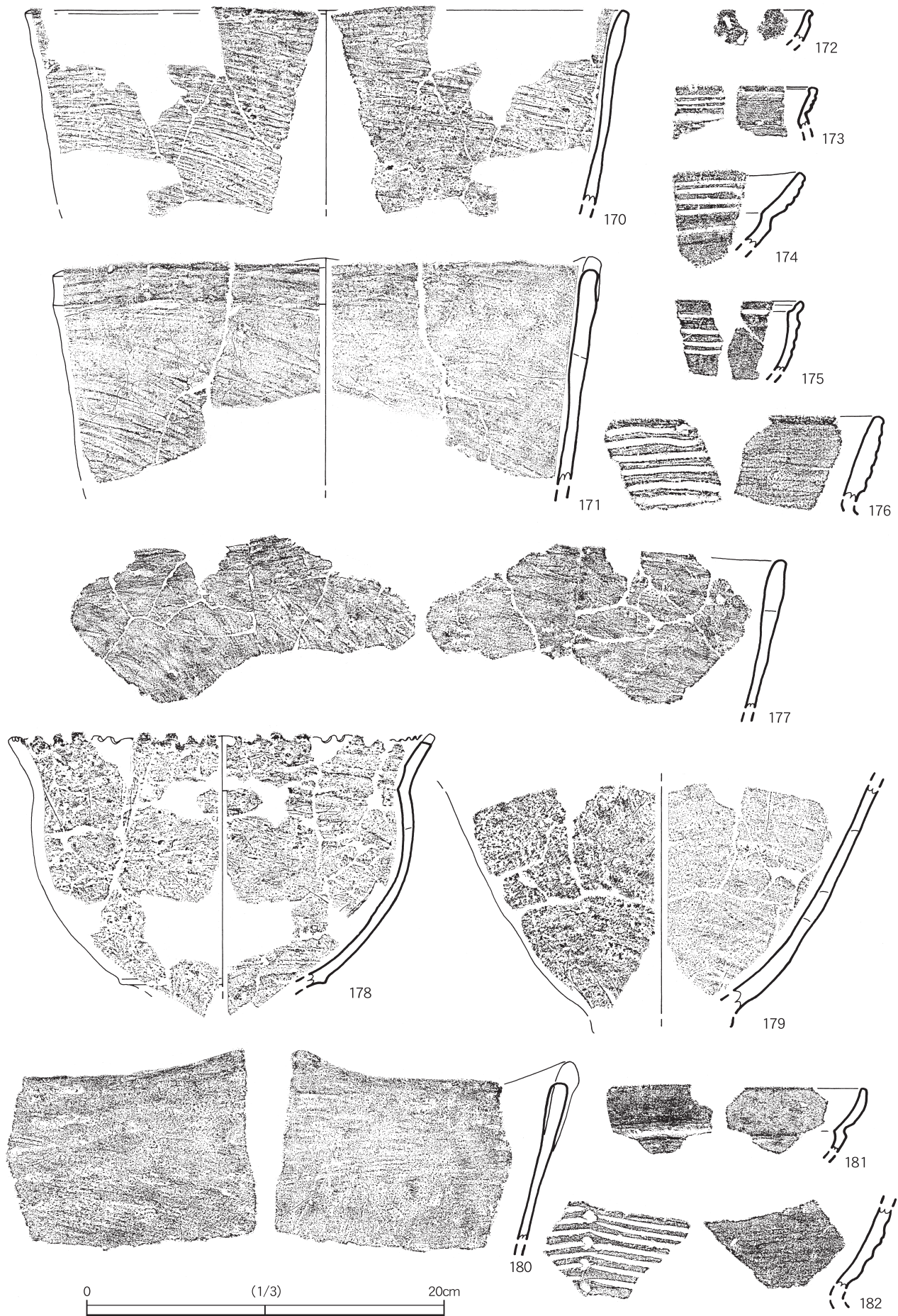
183は深鉢で、胴部上位が張り、外傾する口縁部が続く。184は深鉢で、口縁部はわずかに波状口縁をなす。口唇部は波頂部を境に片側のみ円形押圧刻みを施す。内面二枚貝条痕、外面巻貝条痕。185は深鉢で、胴部上位が張り、緩やかに外反する口縁部が続く。口縁の一部にわずかな突起がある。磨消縄文を施す。186は胴部片で、連鎖状に刺突文を巡らす。187は浅鉢で、内湾して立ち上がる体部に短い口縁部が続く。内面ミガキ、外面二枚貝条痕。188は浅鉢で、半球形の胴部から屈曲して内湾気味の口縁部が続く。口縁外面に沈線文を施す。189は浅鉢で、体部から屈折して口縁部が内湾気味に立ち上がり、端部は丸みをもつ。外面は沈線文を施し、沈線内に赤色顔料の痕跡がみられる。190は浅鉢の口



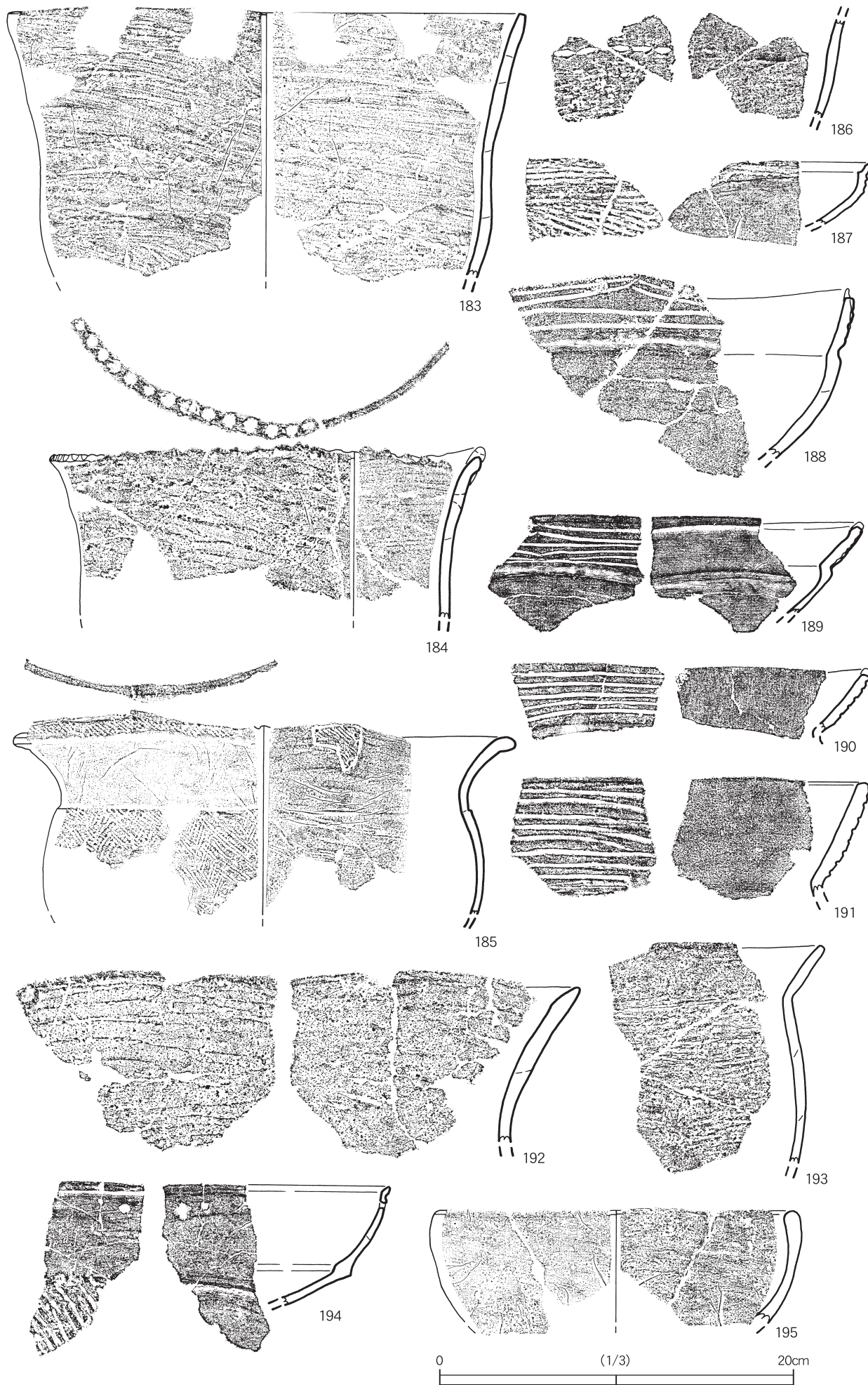
第39図 縄文土器実測図⑭



第40図 縄文土器実測図⑮



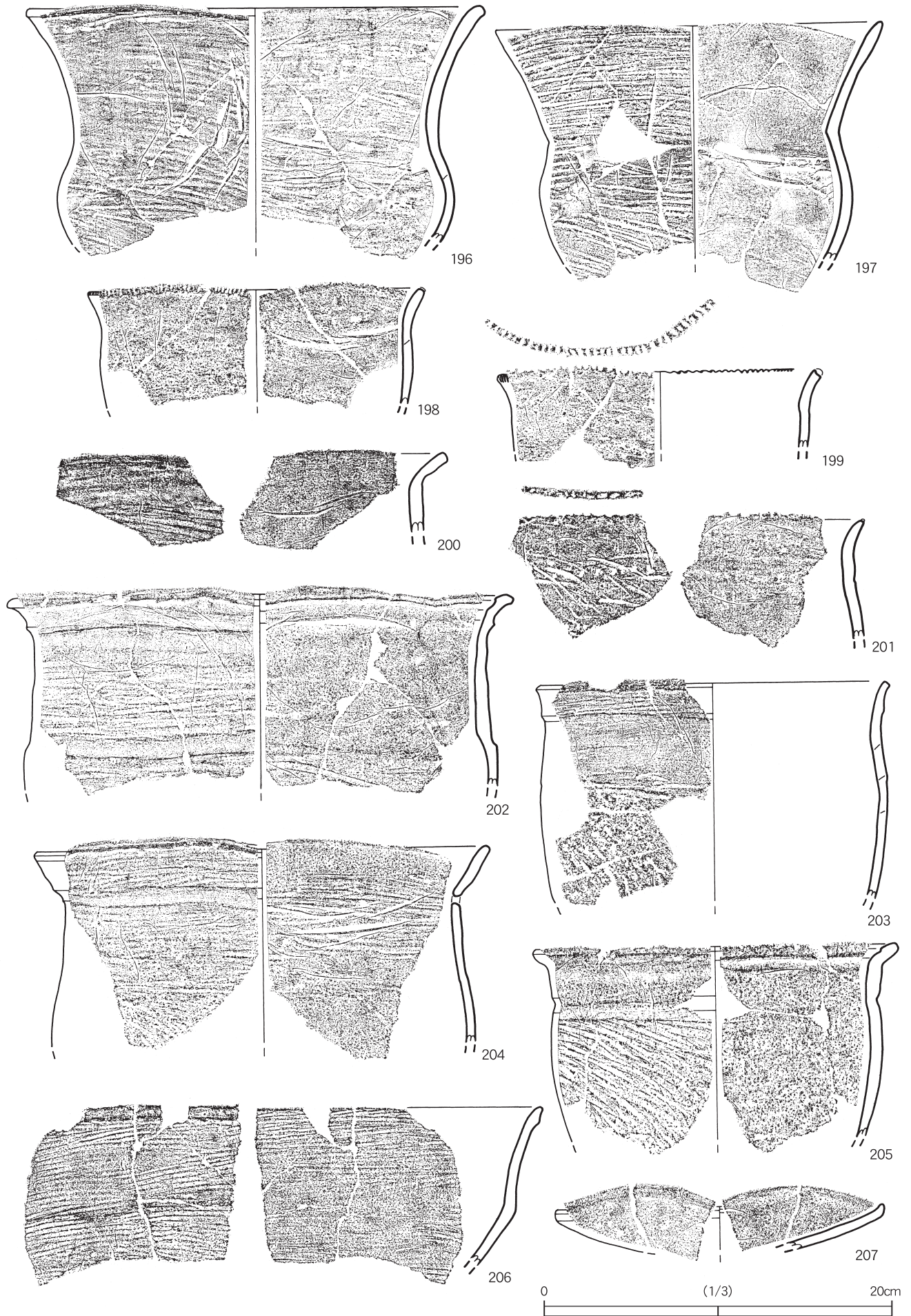
第41図 縄文土器実測図⑯



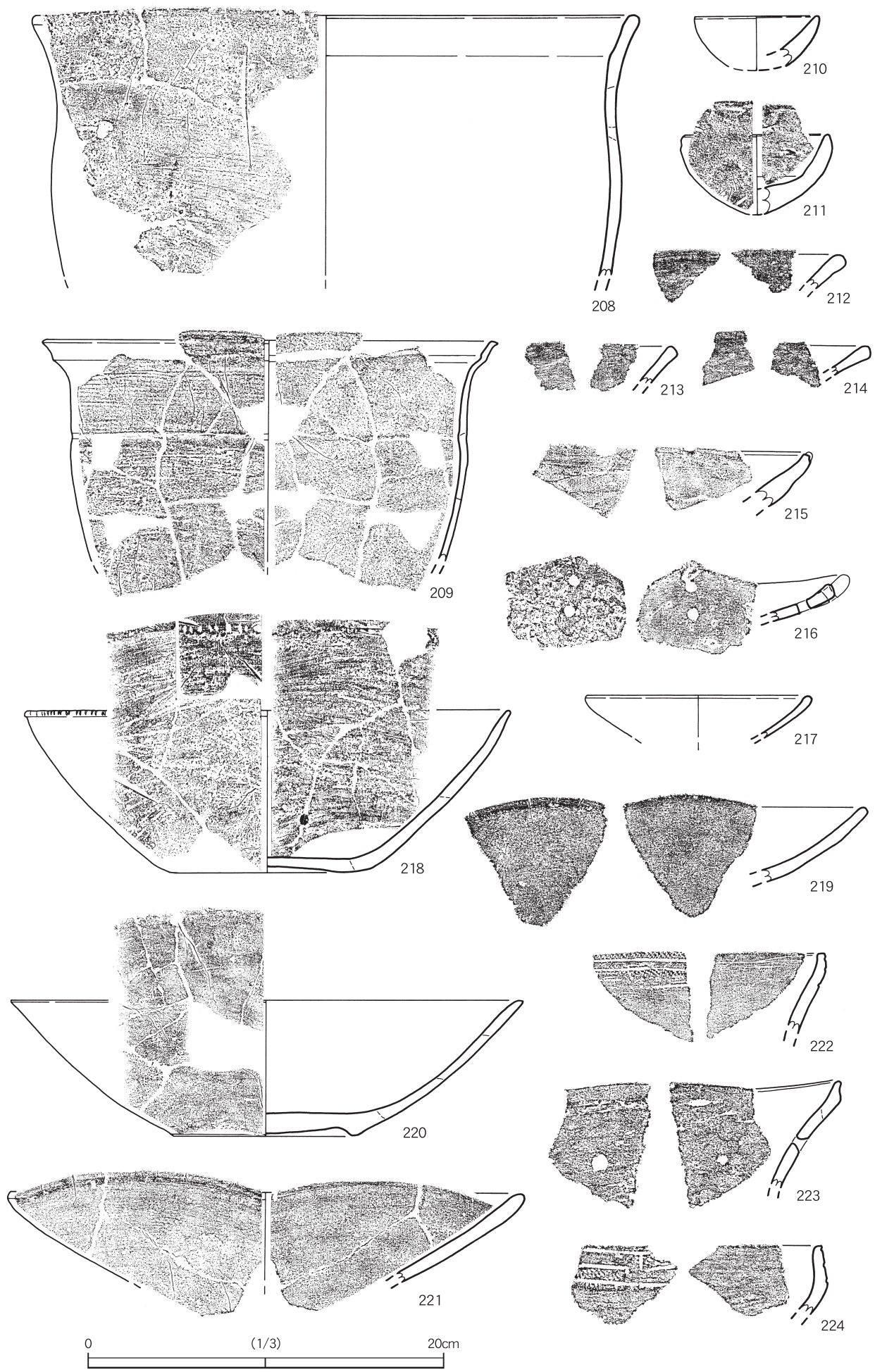
第42図 縄文土器実測図⑰

縁部で、わずかに波状口縁をなす。口縁部は内湾気味に立ち上がり、外面に沈線文を巡らす。191は外傾してやや内湾気味に立ち上がる口縁部で、外面に多条の沈線文を施す。193は深鉢で、胴部中位が張る。口縁部はくの字形に外反し、外面はやや肥厚させる。内面ナデ、外面二枚貝条痕。194は浅鉢で、口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部はやや外反する。口縁部下に焼成前穿孔と焼成後穿孔がある。体部外面は二枚貝条痕、他はミガキ。195はボウル形の浅鉢で、口縁部はやや肥厚し、端部は丸みをもつ。胎土中に多量の雲母を含む。196は深鉢で、胴部上位が張り、弧を描いて緩やかに外反する口縁部が続く。調整は内外面とも巻貝条痕。197は深鉢で、胴部中位が張り、口縁部はやや長い。198は深鉢で、口縁部は緩やかに外反し、口唇部に刻みを施す。199は深鉢とみられ、口縁部は外反し、口唇部に刻みを施す。201は深鉢で、やや内傾気味に立ち上がる胴部に緩やかに外反する口縁部が続く。口唇部および頸部に刺突文を施す。202は深鉢で、ほぼ直立する頸部に外反する口縁部が続き、端部は拡張し丸みをもつ。外面に突帯を巡らす。203は深鉢で、胴部中位がわずかに張り、口縁部は緩やかに外反し、外面をやや肥厚させる。内面には、粘土帯接合痕が明瞭に残る。204は深鉢で、口縁部は外反し、頸部との境に稜をもつ。屈曲部に焼成後穿孔が認められる。205は深鉢で、外面の頸部と胴部の境および口縁部内面に凹線状のくぼみがみられる。206は浅鉢とみられ、体部から屈曲して緩やかに外反する口縁部が続く。外面は上端部に突帯を巡らす。内外面とも二枚貝条痕。207は浅鉢で、体部はわずかに内湾し、口縁端部は内方に拡張する。胎土中に多量の雲母を含む。

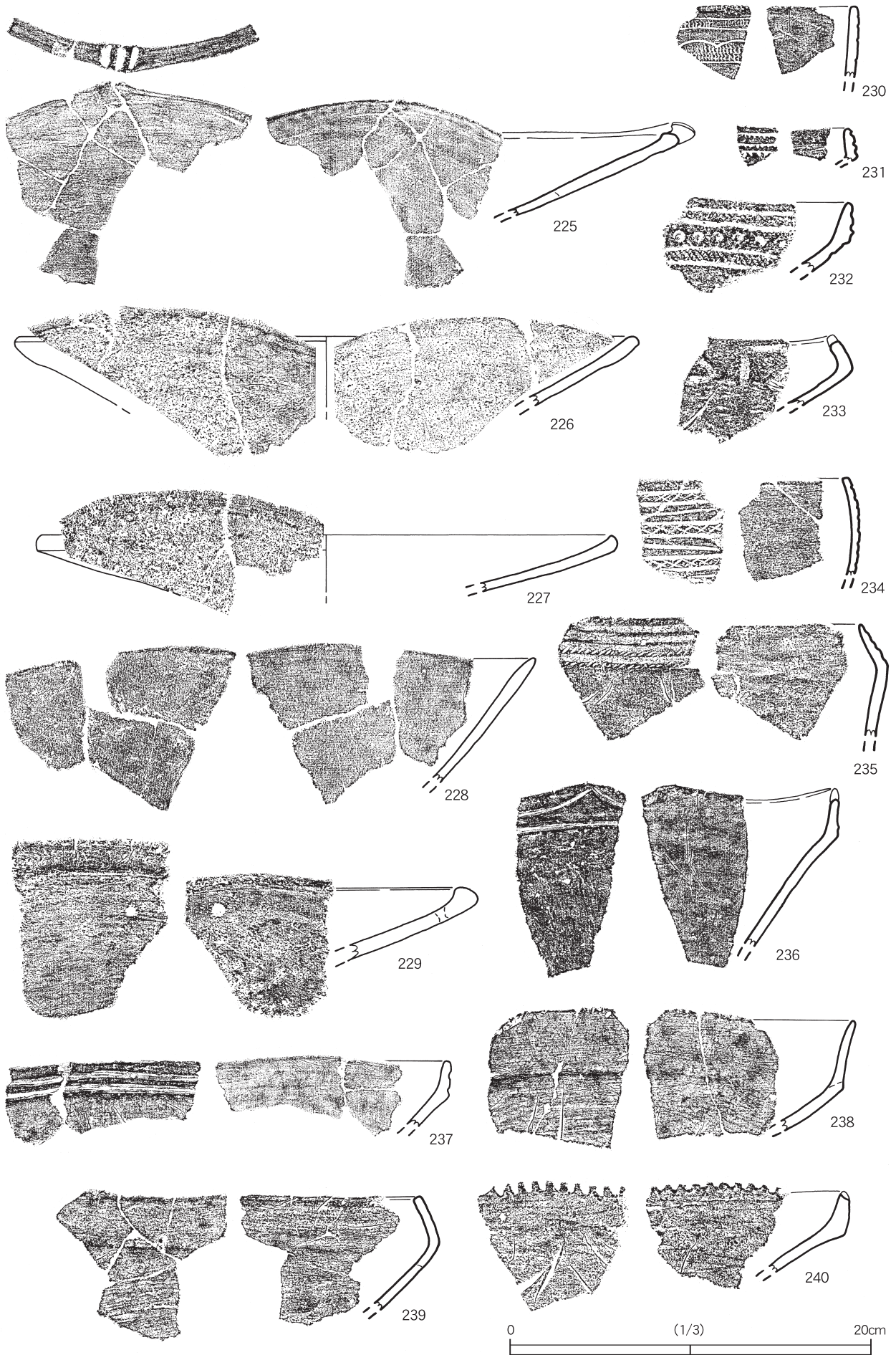
208は深鉢で、胴部上位がやや張り、わずかに外反する口縁部が続く。口縁部内面の屈曲部に稜をもつ。胴部上位に焼成前穿孔がある。胎土中に多量の雲母を含む。209は深鉢で、胴部上位が張り、口縁部は屈折部に稜を持ち、外反する。胴部と頸部の境に段をもつ。211は小型鉢で、口縁端部は細くなる。内外面ともナデ。212～214は浅鉢の口縁部で、赤色顔料を塗布している。216は浅鉢の口縁部で、波状口縁をなす。波頂部の上下に焼成前穿孔を施す。胎土中に多量の雲母を含む。218は浅鉢で、底部はやや上げ底をなし、体部は内湾気味に立ち上がる。口唇部に刻みをもつ。219は浅鉢で、口縁部は内湾気味に立ち上がる。内外面ともミガキ。220は浅鉢で、底部はやや上げ底をなし、体部は内湾して立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。222は外傾する体部から屈折して口縁部が直立し、端部は面をもつ。外面に磨消縄文。223は口縁端部はわずかに内方へ拡張する。焼成前穿孔がみられる。224は口縁部が屈折して直立気味に立ち上がり、外面に幾何学的な沈線文を施す。225は浅鉢で、口縁部はわずかに波状口縁をなす。波頂部には刺突文を3つ施す。226は浅鉢で、口縁外面はやや肥厚させる。内外面ともミガキ。229は浅鉢で、口縁部は内側を肥厚させる。口縁部下に穿孔がある。230は口縁部がほぼ直立気味に立ち上がる。外面に直線、連続弧状の沈線文を施し、沈線間は貝殻施文で充填する。231は口縁部がやや内傾し、外面に沈線および刺突文を施す。232は、口縁部が屈折し、ほぼ直立気味に立ち上がる。外面は磨消縄文で、沈線文と竹管文を施す。233は浅鉢で、口縁部が逆くの字形に屈折する。234は浅鉢で、口縁部は内湾気味に立ち上がる。外面に平行沈線を巡らし、沈線間に斜格子文を施す。235は口縁部が逆くの字形に屈折し、立ち上がり部外面に4条の凹線を施し、凹線間に短斜線文を施す。236は口縁部が逆くの字形に屈折して立ち上がり、波状口縁をなす。237は口縁部が屈折して、直立気味に立ち上がる。外面に2条の凹線を施す。内外面ともミガキ。238は浅鉢で、体部から屈折して口縁部はわずかに外反して立ち上がる。240は口縁部が屈折して直立気味に立ち上がり、口唇部に刻みをも



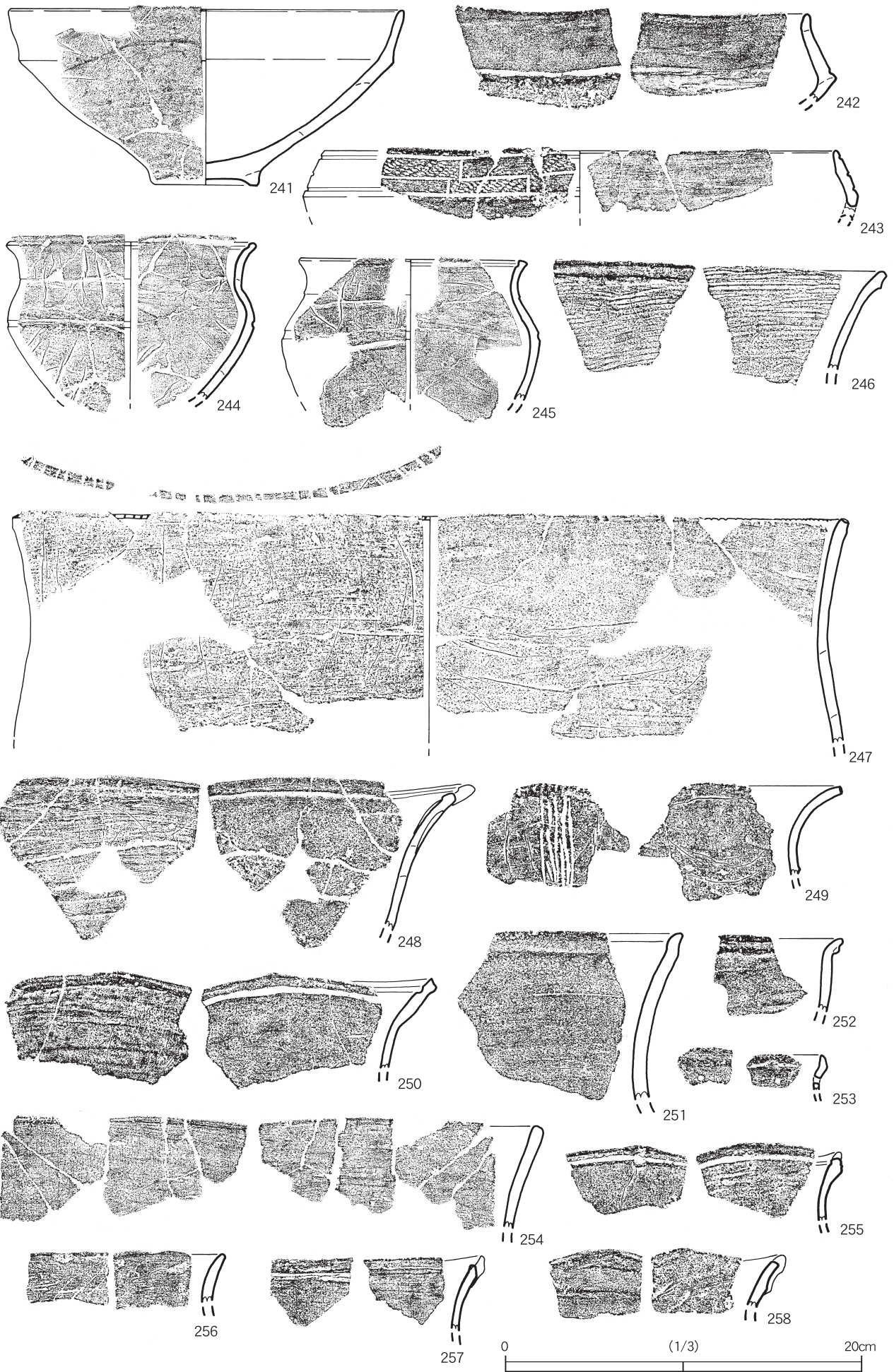
第43図 縄文土器実測図⑱



第44図 縄文土器実測図⑨



第45図 縄文土器実測図②

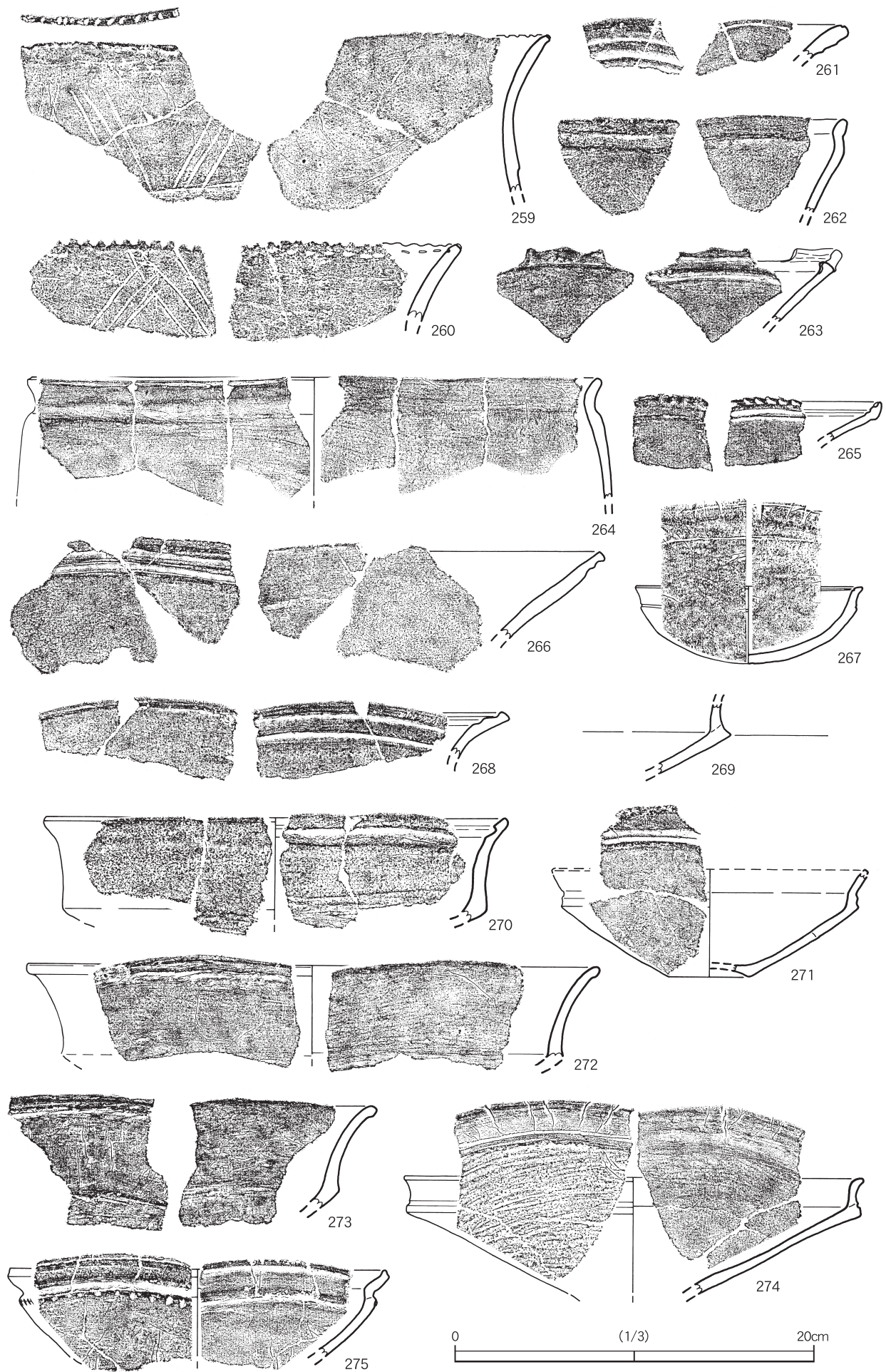


第46図 縄文土器実測図②

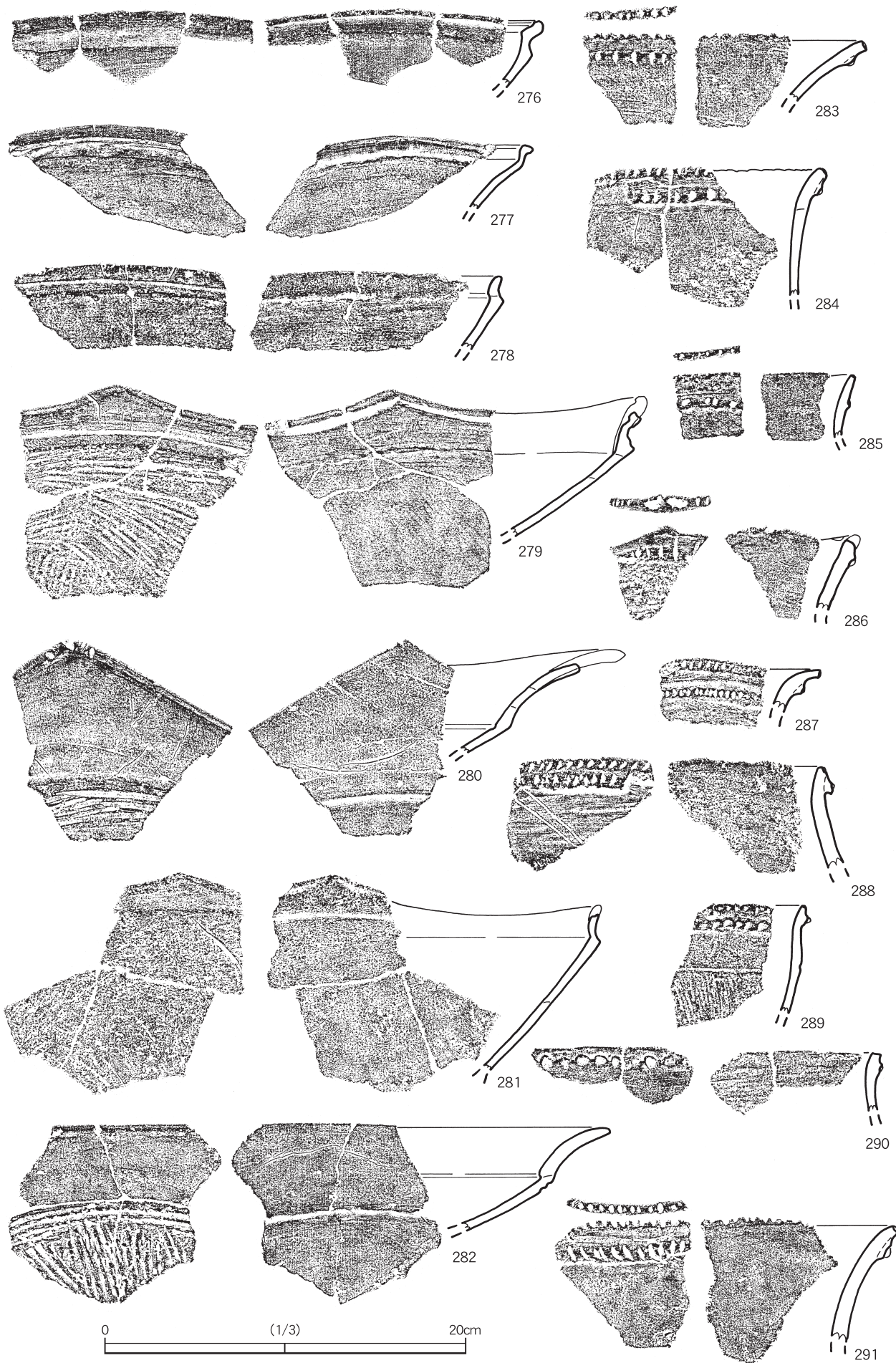
つ。

241は浅鉢で、底部はやや上げ底をなす。体部は内湾気味に立ち上がる。242は浅鉢で、口縁部は逆くの字形を呈し、端部はわずかに外方へ反る。243は浅鉢で、口縁部は逆くの字形に屈折し、外面に幾何学的な沈線文を施す。屈折部下に穿孔がある。244・245は浅鉢で、口縁部は緩やかに外反する。口縁内面および胴部最大径外面に凹線を施す。246は口縁部が弧を描いて緩やかに外反し、外面に突帯状の隆起部を巡らす。内外面とも二枚貝条痕。247は大型の深鉢で、口縁部は緩やかに外反し、口唇部に鋭利な工具による刻みを施す。内外面とも巻貝条痕調整。248は緩やかに外反する口縁部の端部を拡張し、内面に段をもつ。249は深鉢とみられ、口縁部は弧を描いて外反し、口唇部に刻みを施し、外面にヘラ描き平行沈線文を施す。250は外反する口縁部の内面上端付近に1条の沈線を巡らす。251は深鉢で、口縁部は緩やかに外反し、端部はわずかに屈曲する。252は外反する口縁部の屈曲部に突帯を貼付し、刻みを施す。253は胎土が精良で砂粒が少なく、異質である。口縁部は内湾気味に立ち上がり、口縁部下に穿孔をもつ。255は口縁部内外面に1条の沈線をもつ。内外面ともミガキ。256は緩やかに外反する口縁部で、外面に先端の細いヘラにより葉のような文様を施す。内外面ともミガキ。257は外反する口縁の端部を上方へ拡張する。内外面ともミガキ。259は深鉢で、口縁部は弧を描いて緩やかに外反し、口唇部に刻みをもつ。口縁部と体部の境には段を有し、3本一組みのヘラ描き文を施す。260は深鉢で、外反する口縁部の内面に刺突文、口唇部に刻みを施す。外面はヘラ描き平行線による山形文を施す。胎土中に多量の雲母を含む。261は浅鉢とみられ、口縁部外面に2条の凹線を巡らす。262は外傾して立ち上がる体部から屈折して短い口縁部が続く、端部は丸みをもつ。263は浅鉢のリボン状突起部である。264は体部が内傾し、外反する短い口縁部が続く。内外面ともミガキ。265は浅鉢で、口縁部はわずかに上方に立ち上がり、口唇部内面に刺突文、下に沈線を巡らす。266は外傾する口縁部外面に2条の凹線を巡らす。内外面ともミガキ。267は浅鉢で、底部は丸底をなし、体部は内湾して立ち上がり、屈折して口縁部は外反する。屈折部外面および口縁部内面に沈線を巡らす。内外面ともミガキ。268は浅鉢で、外反する口縁部内面に2条の沈線を巡らす。内外面ともミガキ。269は浅鉢で、胎土が極めて精良で他の土器とは異なることから、搬入品とみられる。270は浅鉢で、口縁部は緩やかに外反する。内外面ともミガキ。271は浅鉢で、底部は上げ底を呈し、外傾する体部上端から屈折して、口縁部は外反する。272は浅鉢で、口縁部は緩やかに外反し、端部はやや丸みをもつ。273は浅鉢で、口縁部は弧を描いて外反し、端部は丸みをもつ。274は浅鉢で、体部は直線的に外傾して立ち上がり、上端部で屈折して、口縁部は外反する。275は浅鉢で、口縁部は外反し、端部はわずかに上方に拡張している。胴部上位の屈折部に刻みを施す。内外面ともミガキ。

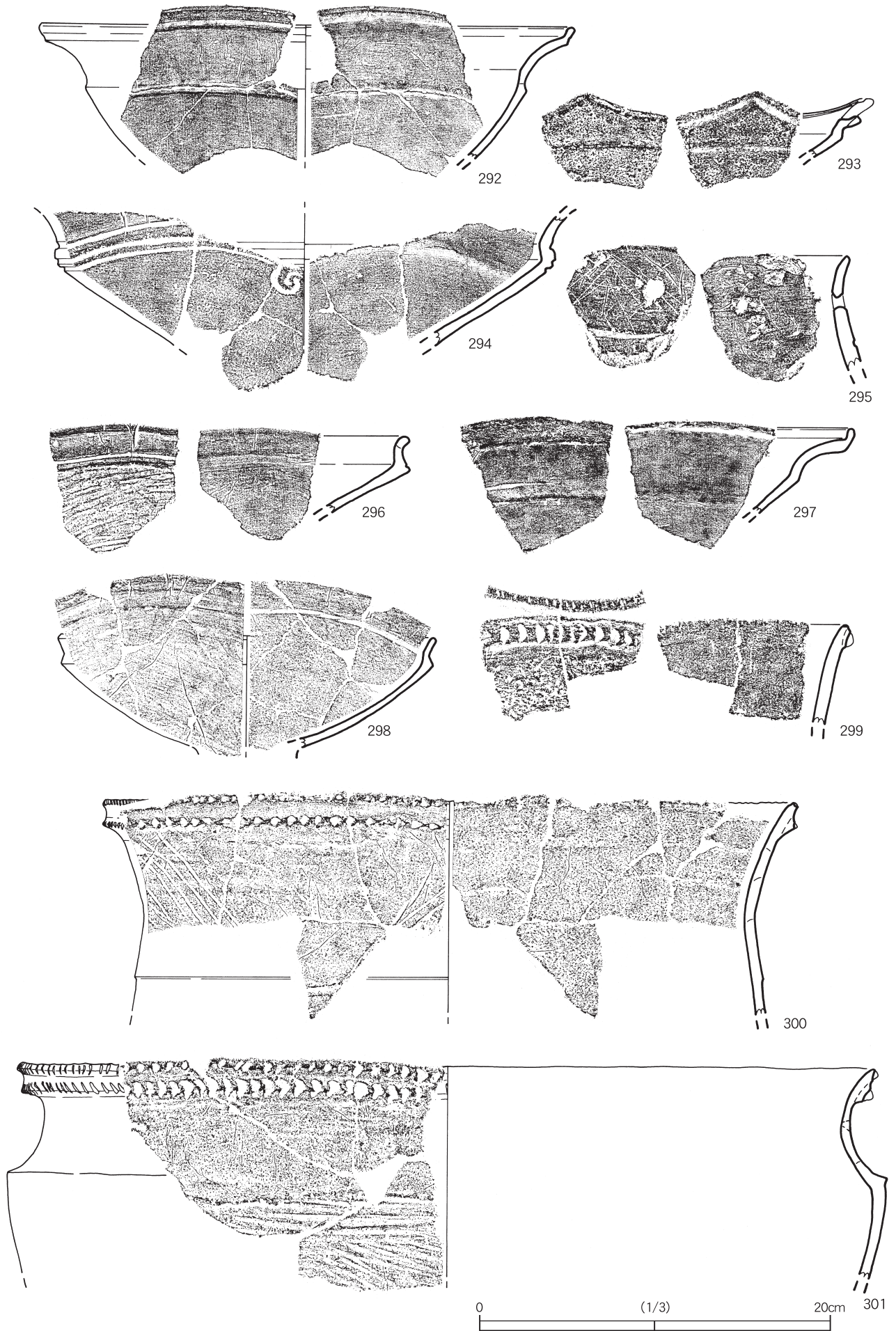
277は浅鉢で、口縁部は短く外反し、端部は外方へ拡張する。内外面ともミガキ。278は浅鉢とみられ、口縁部は短く外反し、端部は丸みをもつ。内外面ともミガキ。279は浅鉢で、口縁部は外反し、端部は内方へ拡張する。280は浅鉢で、山形口縁の波頂部である。口縁部は大きく弧を描いて外反する。体部外面は二枚貝条痕、他はミガキ。282は浅鉢で、口縁部は大きく外反する。体部外面上端に2条の沈線を巡らし、以下は二枚貝条痕、他はミガキ。283は外反する口縁部外面に突帯を貼付し、口唇部および突帯に刻みを施す。284は深鉢で、口縁部は緩やかに外反し、外面の上端部付近に突帯を貼付する。口唇部および突帯に刻みを施す。285は緩やかに外反する口縁部の外面に突帯を貼付し、口唇部および



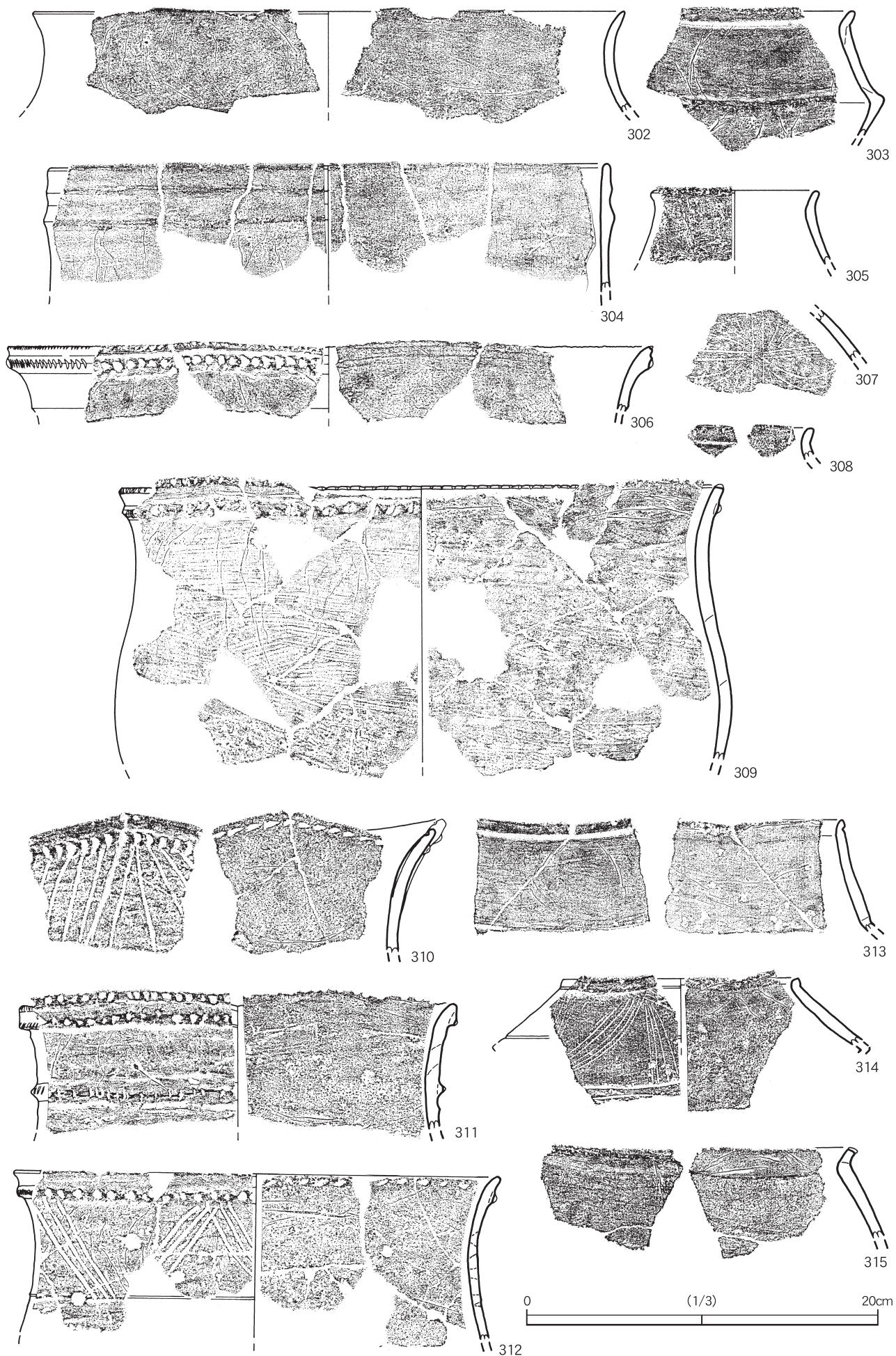
第47図 縄文土器実測図②



第48図 縄文土器実測図㉓

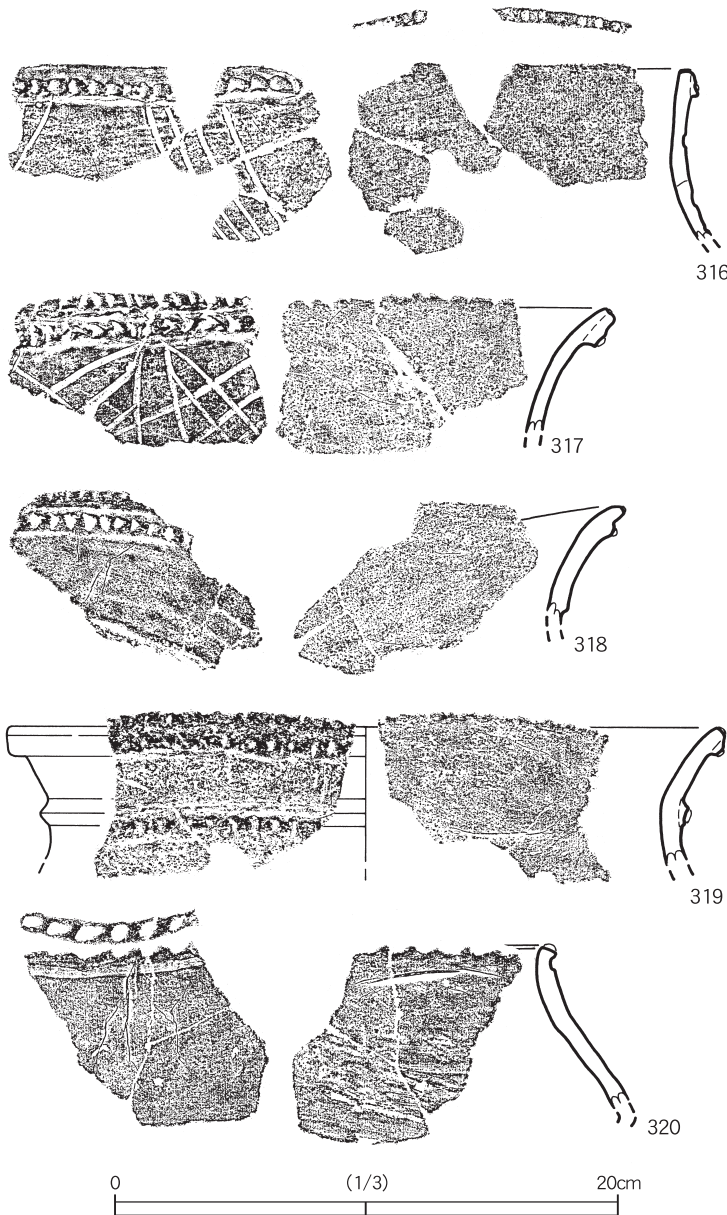


第49図 縄文土器実測図⑭



第50図 縄文土器実測図⑤

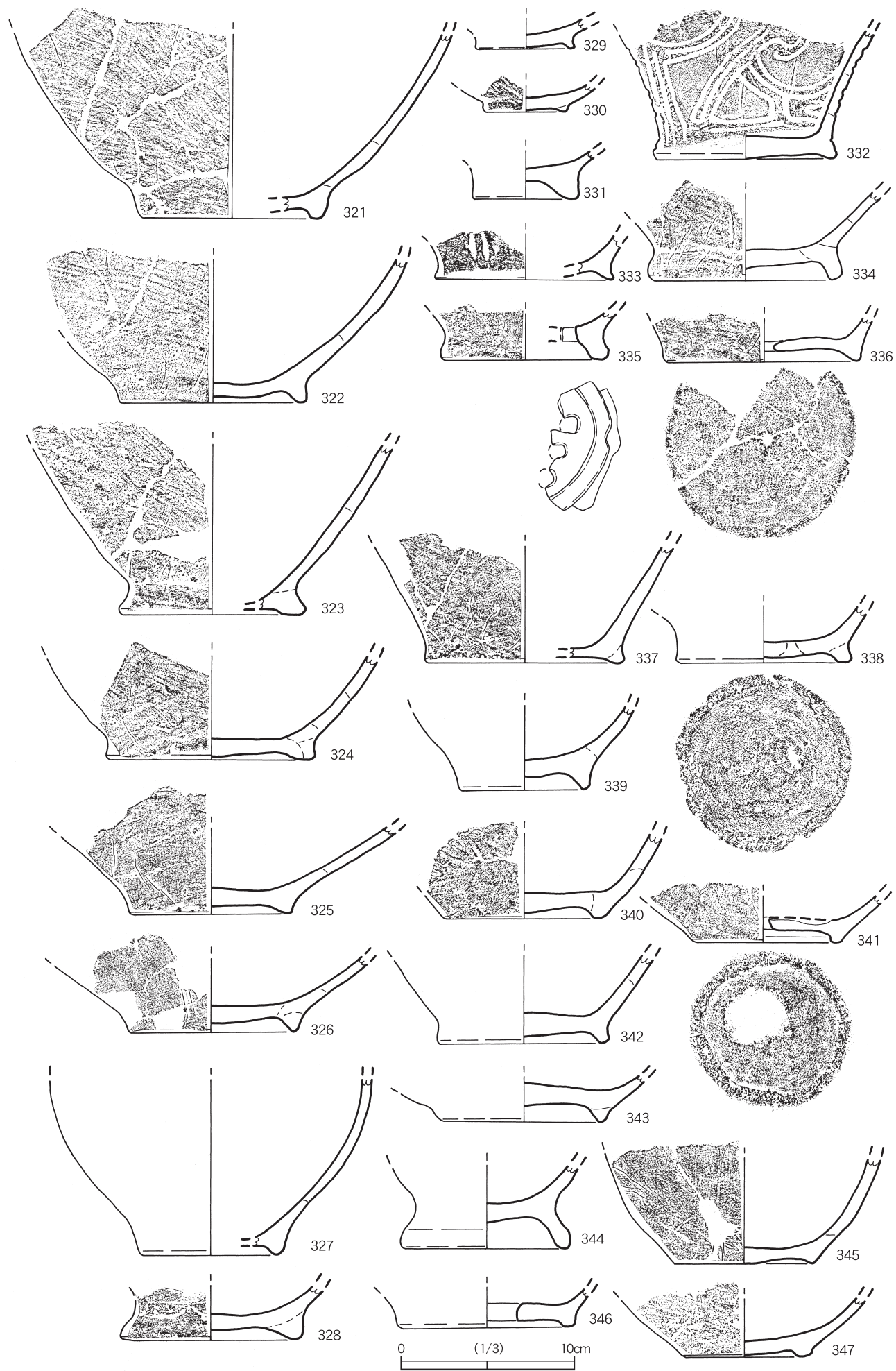
突帯に刻みを施す。286は深鉢とみられ、波状口縁をなす。外反する口縁部の外面に突帯を貼付し、刻みを施す。波頂部口唇には、一対の刺突文をもつ。287は外反する口縁部外面に突帯を貼付し、口唇部および突帯に刻みを施す。288は深鉢で、口縁部外面上端部に突帯を貼付し、口唇部外側と突帯に刻みを施す。外面にヘラ描き平行斜線文を施す。289は深鉢で、内湾気味に立ち上がる頸部にわずかに外反する口縁部が続く。外面上端部付近に突帯を貼付し、口唇部外側と突帯に刻みを施す。頸部に1条の沈線を巡らし、以下はハケ調整である。弥生土器に近い。291は深鉢で、外反する口縁部外面に突帯を貼付する。口唇部および突帯に刻みを施す。292は浅鉢で、口縁部は外反し、端部は屈折して短く立ち上がる。293は浅鉢で、体部より屈折して、外反する口縁部が続く。口縁部は山形口縁をなす。294は浅鉢で、外面に沈線を巡らし、下に渦巻き状の文様を施す。内外面ともミガキ。295は口縁部は内傾し、緩やかに外反する。外面は1条の沈線を巡らし、先端の細いヘラによる施文を施す。焼成後穿孔が認められる。296は浅鉢で、外傾して直線的に立ち上がる体部から屈折して、弧状に外反する口縁部が続く。体部外面は二枚貝条痕。他はミガキ。299は深鉢で、口縁部はわずかに外反し、上端部外面に突帯を貼付し、刻みを施す。口唇部にも細かい刻みを施す。300は深鉢で、口縁部は緩やかに外反し、口縁直下に貼り付け突帯を巡らす。口唇部および突帯に刻みを施す。頸部と胴部の境に段を持ち、外面にヘラによる平行斜線を施文する。301は大型の深鉢で、肩部が張り、口縁部は弧を描いて外反する。口唇部および突帯に刻みを施す。



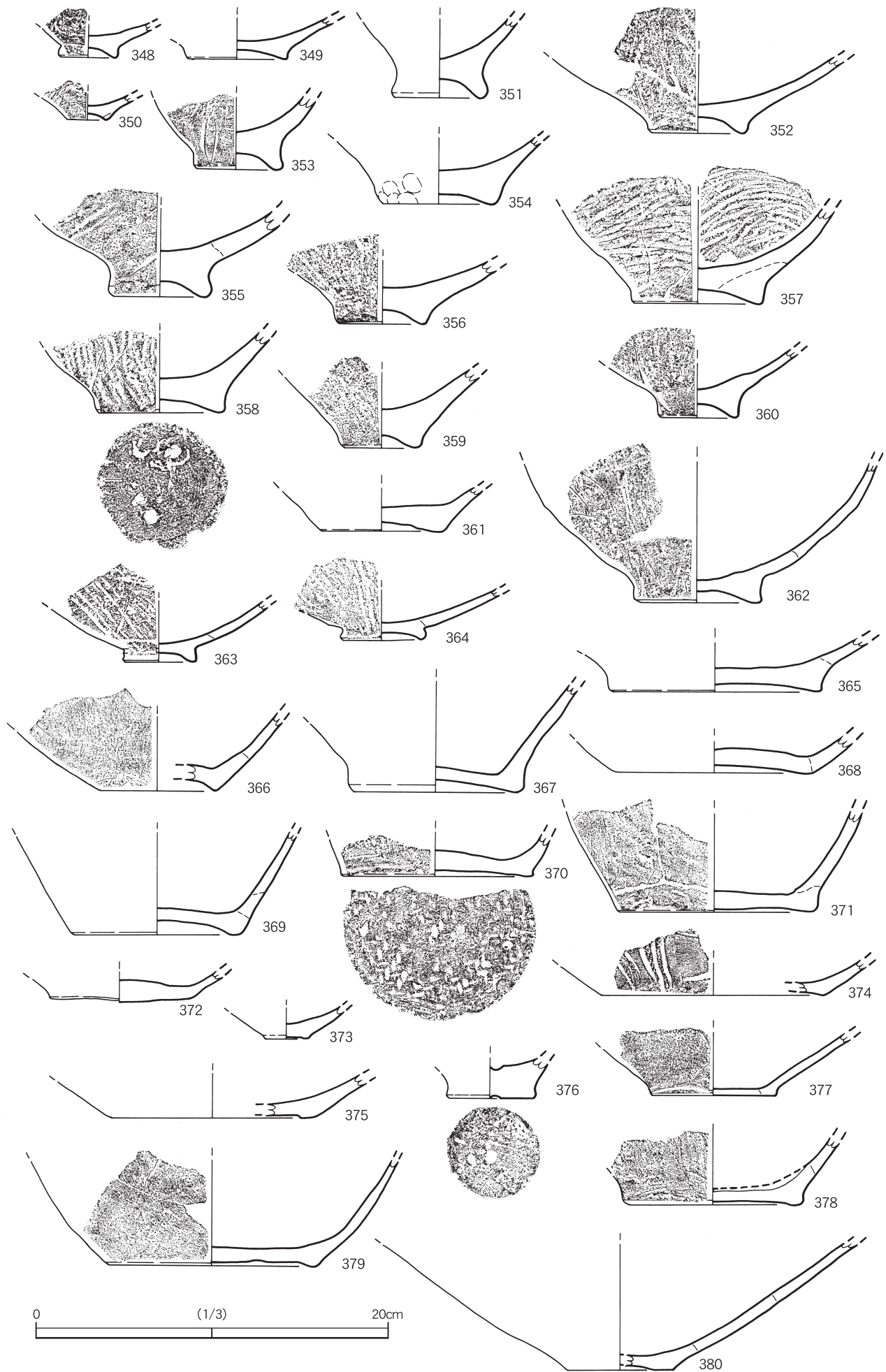
302は深鉢で、口縁部は弧を描いて緩やかに外反する。303は浅鉢で、口縁部は逆くの字形に屈折して立ち上がり、端部は外方に反る。器面に赤色顔料を塗布する。304は深鉢で、ほぼ直立する口縁部外面に2条の突帯を巡らす。胎土中に多量の雲母を含む。305は壺の口縁部で、頸部は内傾し、口縁部は短く外反する。306は深鉢で、口縁部は外反し、外面に突帯を貼付する。口唇部および突帯に刻みを施す。308は上端部が外方に反る口縁部片で、端部は丸みをもつ。外面に

を貼付し、刻みを施す。口唇部にも細かい刻みを施す。300は深鉢で、口縁部は緩やかに外反し、口縁直下に貼り付け突帯を巡らす。口唇部および突帯に刻みを施す。頸部と胴部の境に段を持ち、外面にヘラによる平行斜線を施文する。301は大型の深鉢で、肩部が張り、口縁部は弧を描いて外反する。口唇部および突帯に刻みを施す。

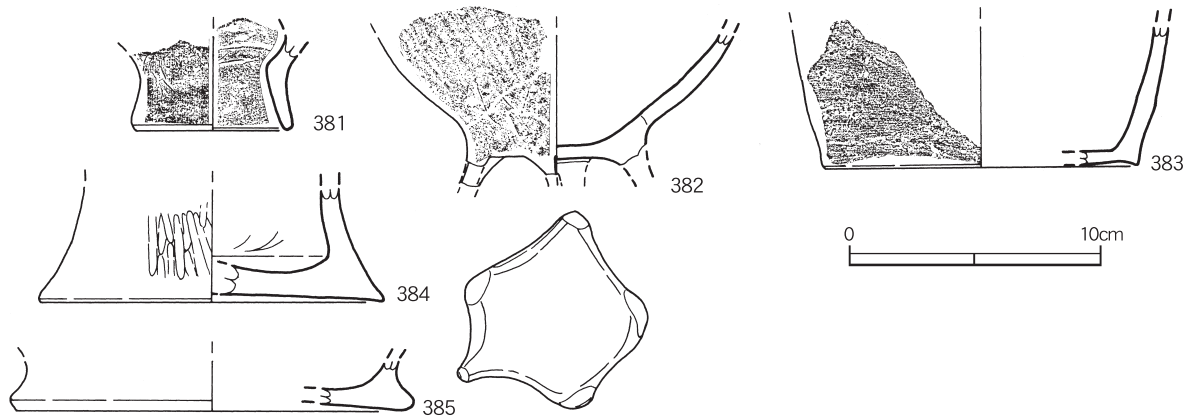
第51図 縄文土器実測図⑥



第52図 縄文土器実測図⑦



第53図 縄文土器実測図㉔



第54図 縄文土器実測図㊹

赤色顔料を塗布するが、他の土器にみられる赤色顔料とは全く異なる鮮やかな濃桃色を呈し、赤漆による可能性が高い。309は深鉢で、口縁部は緩やかに外反し、外面に突帯を貼付する。口唇部および突帯に刻みを施す。310は深鉢で、波状口縁をなす。口縁部外面に突帯を貼付し、刻みを施す。内面には刺突文、外面には沈線文を施す。311は深鉢で、緩やかに外反する口縁部の上端および下位に刻みをもつ突帯を貼付する。口唇部にも刻みを施す。外面に煤が付着する。312は深鉢で、口縁部は緩やかに外反し、外面に突帯を貼付する。突帯には刻みを施し、口縁内面には刺突文を巡らす。頸部の3ヶ所に焼成前穿孔をもち、3本一組みのヘラ描き山形文を施す。313は口縁部は内傾し、端部はわずかに外方へ反る。残存する下端付近で屈折し、外方へ広がる。314は浅鉢で、口縁部は内傾し、端部は外方へ拡張する。外面にヘラ描き施文がみられる。内外面ともミガキ。315は浅鉢で、口縁部は内傾し、端部は屈折して、外方へ反る。316は深鉢で、口縁部は外反し、上端部外面に突帯を貼付する。口唇部内面および突帯に刻みを施し、外面にヘラ描き平行斜線を施す。317は深鉢で、外面上端部に突帯を貼付する。口唇部および突帯に刻みを施す。外面にはヘラ描き斜線と葉状の文様を組み合わせた施文がある。318は深鉢で、口縁部は外反し、外面上端付近に突帯を貼付する。口唇部および突帯に刻みを施す。319は深鉢で、口縁部は弧を描いて緩やかに外反し、上端部外面と屈曲部に刻みを施した突帯を貼付し、口唇部にも刻みを施す。320は口縁部は内傾し、端部はわずかに外方に反る。口唇部には刺突による刻み状の施文を施す。

321～347は底部で、上げ底を呈し、底面は中心に向かって下る傾向が認められる。332は外面に磨消縄文。335は底面に複数の焼成前穿孔を有する。336は底面中央に焼成後穿孔がある。341の底面には大きな焼成後穿孔がある。346も底面に大きな焼成後穿孔がある。348～370は上げ底を呈し、底面は中央が高くなる。362～364は底部外面に明瞭なくびれが認められる。370は外底面にアンペラの痕跡が認められる。358は外底面の2ヶ所に穿孔を試みた痕が残る。371～380はわずかに上げ底または平底をなす。374は外面磨消縄文。376は内外底面とも穿孔を試みた痕が残る。381は台付土器の台部分とみられる。382は底面が不整五角形を呈し、各頂点には足が付いた痕跡がある。382は平底からくびれなく体部が内湾気味に立ち上がる。384・385は平底で、体部が内傾して立ち上がる。

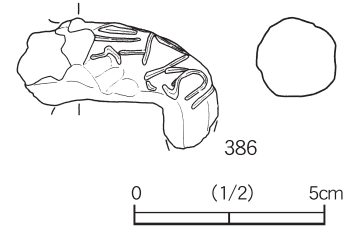
土製品 (第55図、図版42)

386は土偶の腕部分とみられる。基部には剥落した痕跡がみられる。腕の途中から下方へ屈曲し先端

部は欠失する。表面にヘラ描きの施文が認められる。

石製品（第56～68図、図版41～45）

387～439は安山岩製の石鎌である。最も軽いものは404で0.1g、最も重いものは439で8.2gであり、平均重量は1.2gである。形態は凹基無茎式と平基無茎式であり、平面形状は正三角形、二等辺三角形のものが多いが五角形が3点ある。406は屈曲が先端部に近く先端部が瘤状になる形状である。412は側縁に尖った段をもつ五角形鎌



第55図 土製品実測図①

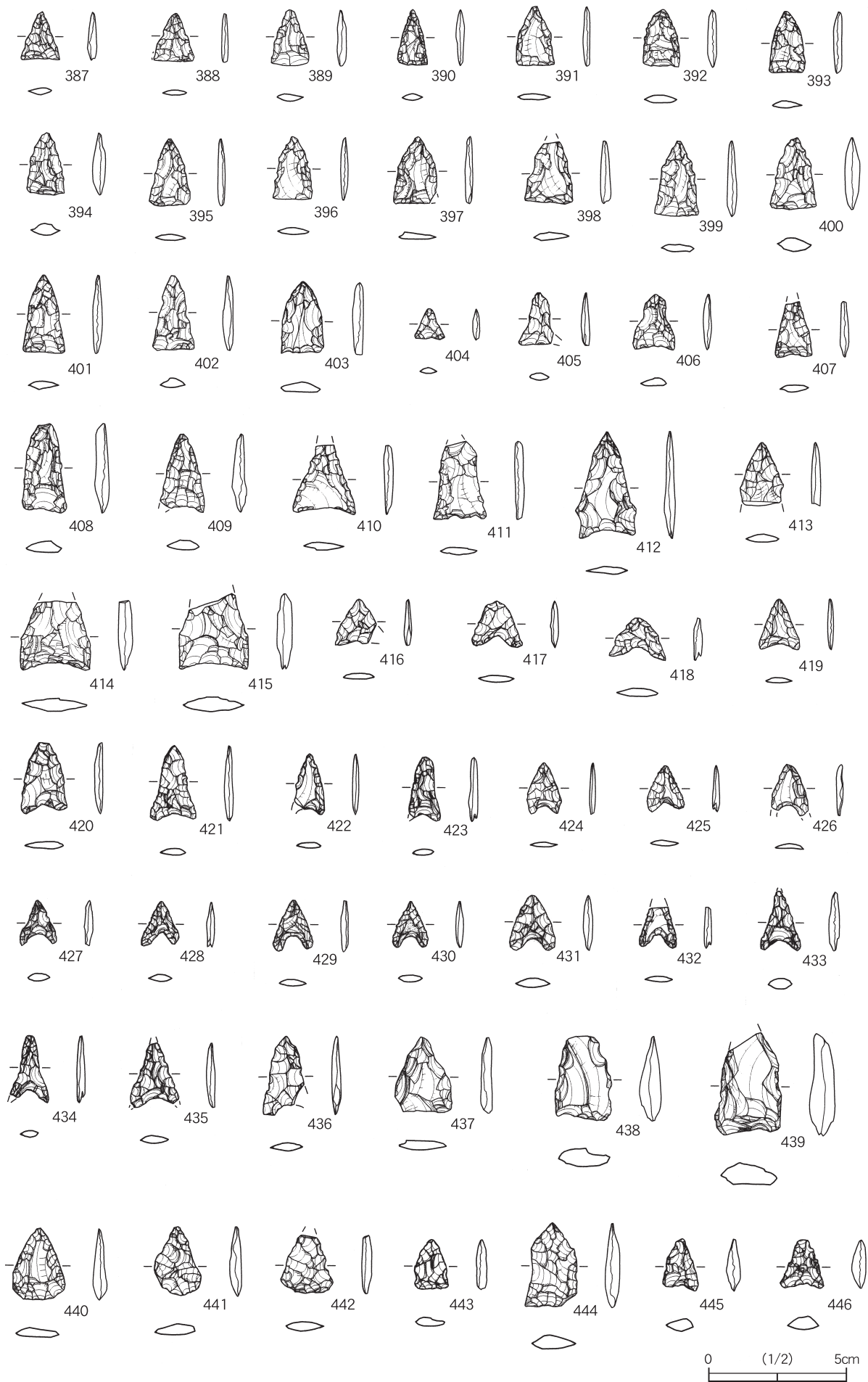
である。安山岩製の石鎌に使用されたのは金山産サヌカイト及び在地の安山岩である。440～482は姫島産黒曜石製の石鎌である。最も軽いものは458で0.1g、最も重いものは482で6.6gであり、平均重量は1.1gである。形態は凹基無茎式と平基無茎式及び円基無茎式である。平面形状は正三角形、二等辺三角形、五角形である。側縁は直線もしくは湾曲するものが多いが、476は鋸歯状の側縁が外反し、抉りが深く丸みのある幅広の基端をもつ。477は先端から直線的に下る側縁が基端部で内折する。483は、腰岳産黒曜石製の石鎌であり、重量0.4gである。484は、姫島産黒曜石製の尖頭器であり、重量は1.6gである。

485～489は石錐である。485は長三角形の剥片の先端にわずかな調整剥離を施し錐部を作っている。錐部の断面形は三角形を呈する。486は頭部、錐部ともに両面の全体に調整剥離が施されている。錐部の断面形は菱形を呈する。石材は、すべてサヌカイトである。490～498は剥片石器である。495は、片面に原石面を残す。刃部は両面から粗い剥離により作られている。497は三日月形を呈し、全縁に両面から調整剥離を施している。石材は490・491・493・495・496・498がサヌカイト、492・494・497が姫島産黒曜石である。

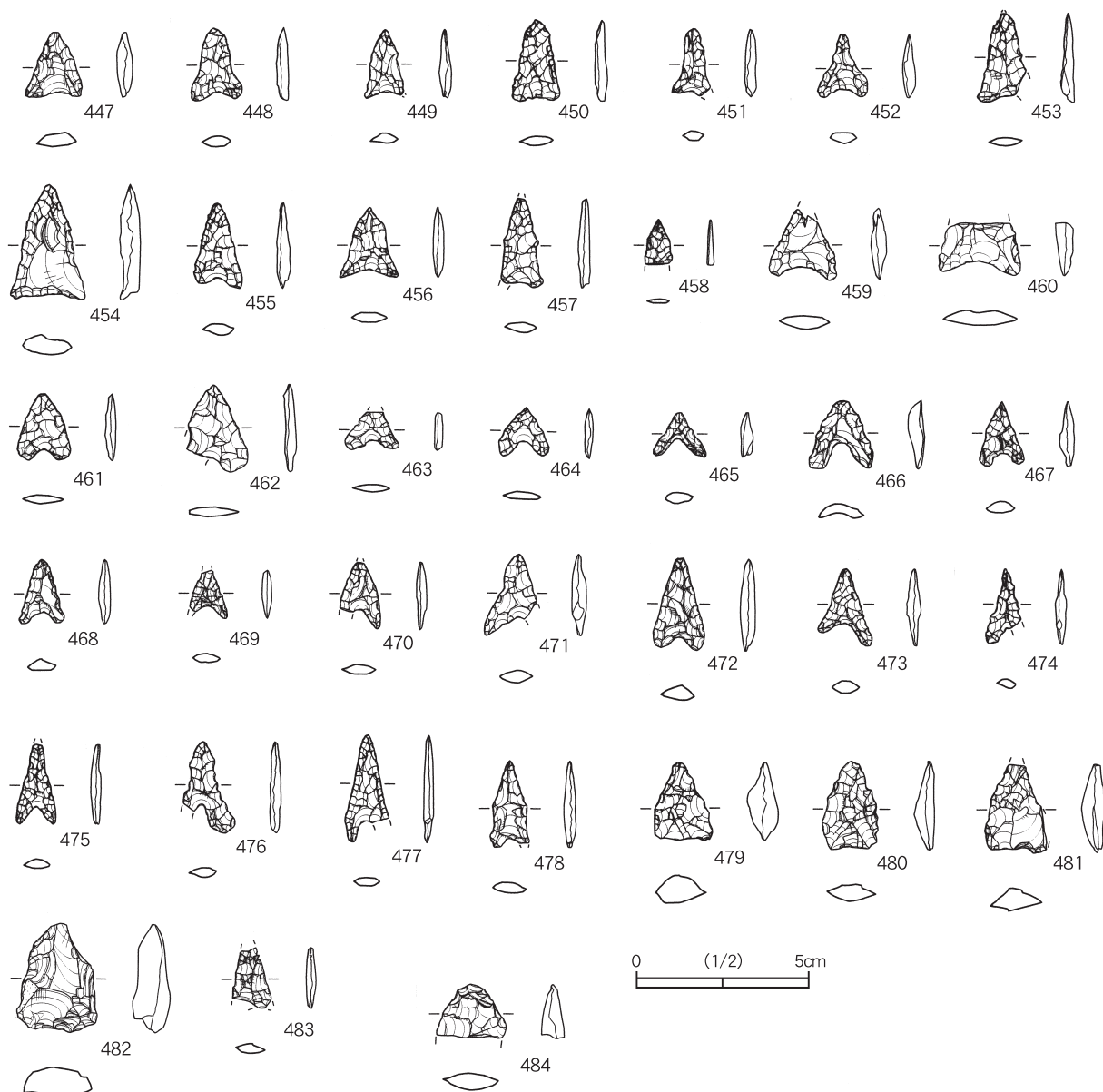
499～506は磨製石斧である。499は重量217g、最大厚3.1cmと最も厚い。着柄部はやや平滑に研磨している。石材は花崗閃緑岩である。500は重量226gである。全面を丁寧に研磨しており、刃部には使用による線状痕がみられる。石材は砂岩である。501は局部磨製で重量145gである。刃部表面は丁寧に、裏面はやや粗く研磨している。基部の厚さはほぼ同じである。石材は泥岩である。502は重量266gである。刃部は両面を丁寧に研磨して刃を作っており、基部には粗目の研磨痕がみられる。石材は泥岩である。503は扁平磨製石斧であり、重量78g、残存最大厚1.1cmである。刃部、基部の全面を丁寧に研磨しているが、裏面は剥落している。石材は安山岩である。504は重量143gである。刃部は調整加工がみられるが、基部の側縁は研磨を施している。刃部の製作に失敗したため転用したものと考えられる。石材は安山岩である。505は重量72g、最大幅2.8cm、最大厚1.5cmと細身である。刃部、基部の区別なく全面を丁寧に研磨している。石材は泥岩である。506は重量5g、残存最大厚0.5cmである。裏面の多くが剥落しているが、刃部は両面から丁寧に研磨している。

507～512は打製石斧未製品である。507は重量530gである。刃部表面には調整加工がみられる。石材は安山岩である。508は重量230gである。刃部にわずかに調整加工がみられる。石材は緑色片岩である。510は重量660g、最大厚3.5cmである。基部両面を研磨しているが、両側縁はほとんどが自然面である。刃部の一部に調整加工がみられる。石材は安山岩である。

513・514は石製円盤である。513は重量359g、最大径9.8cmである。長さ5cm程の自然面を残す以



第56图 石製品実測図①

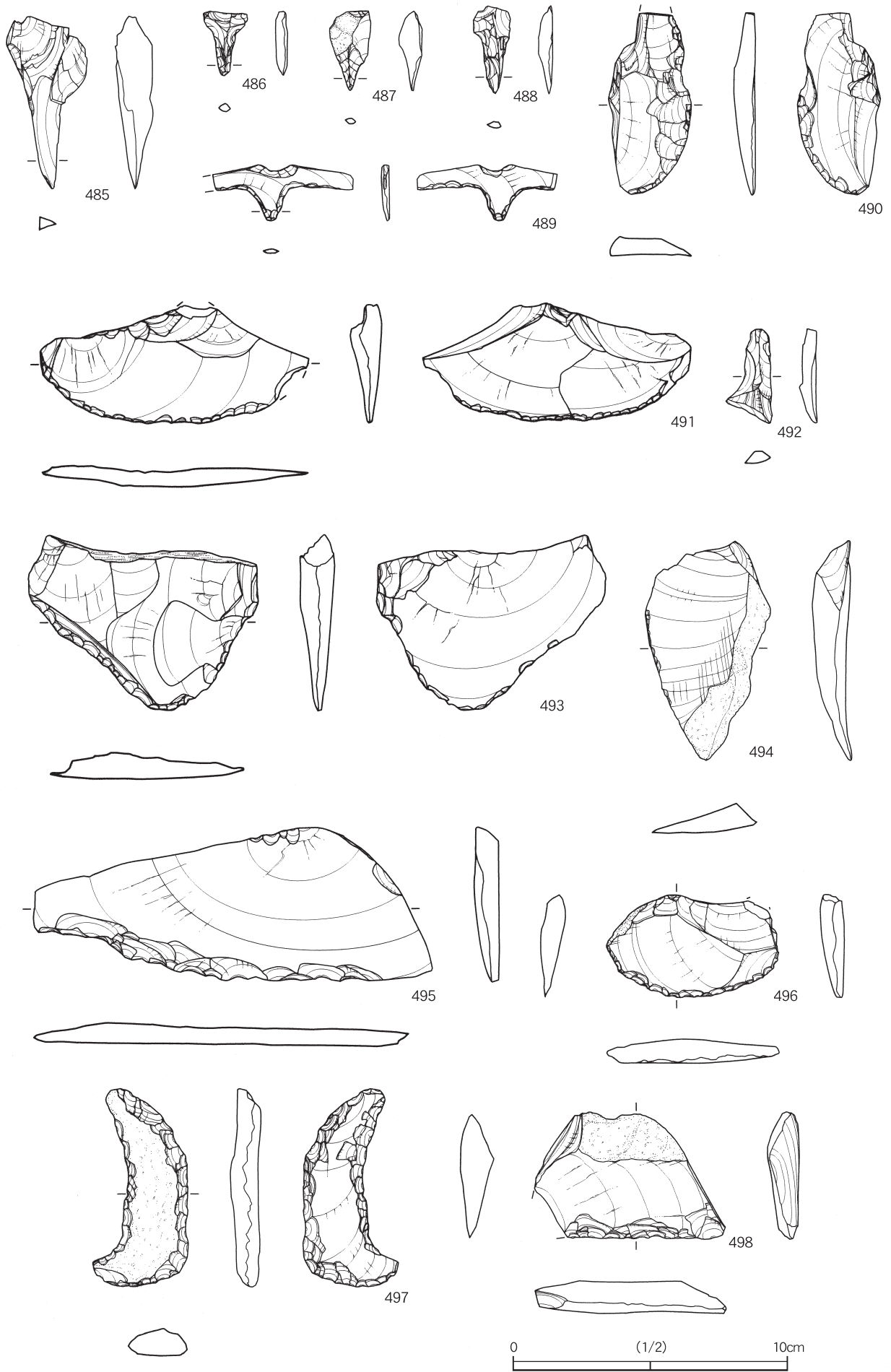


第57図 石製品実測図②

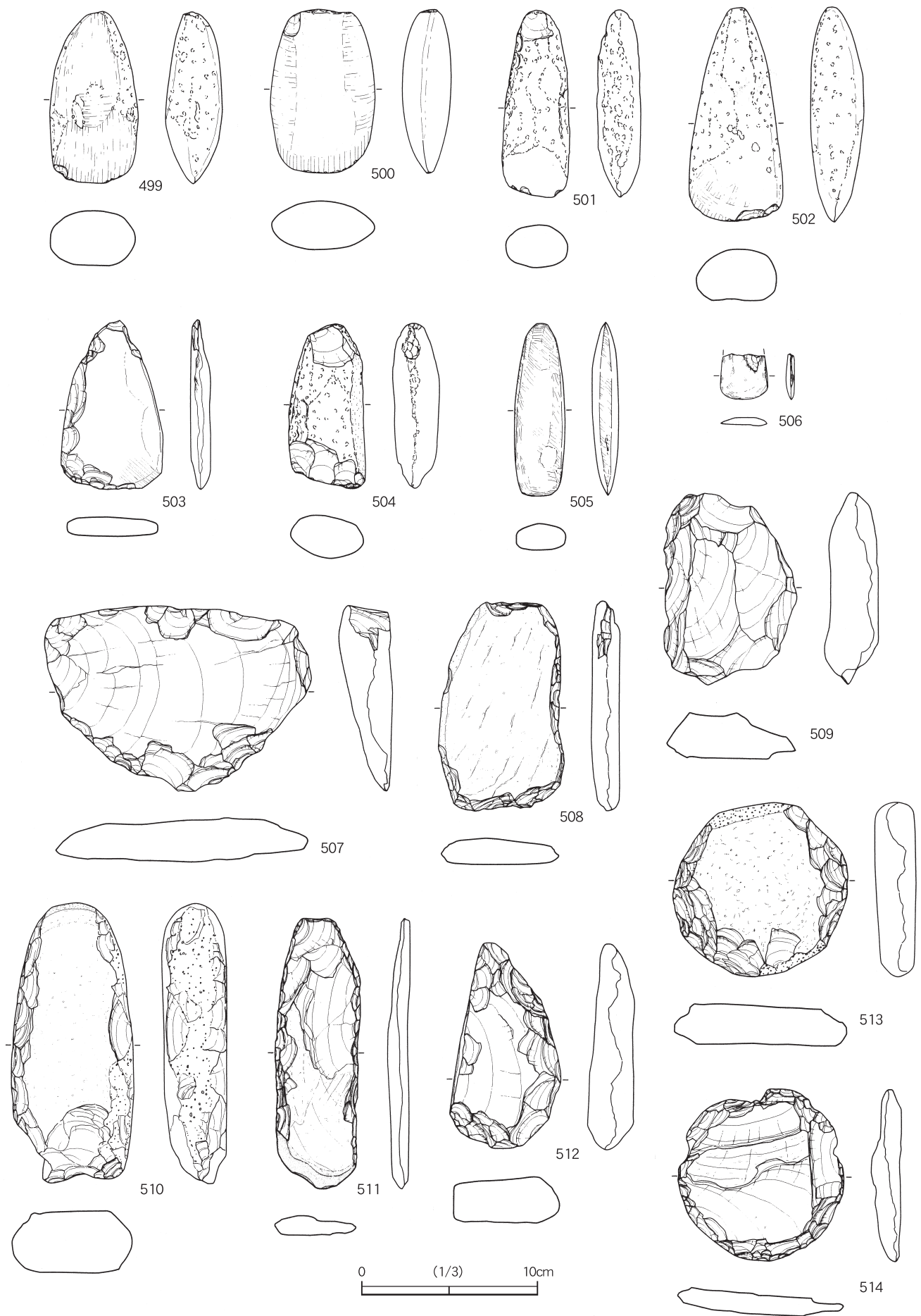
外は調整加工が施されている。石材は砂岩である。514は重量160g、最大径9.5cmである。全縁に調整加工が施されている。石材は泥質片岩である。

515・516は打製石斧である。515は重量338gである。側縁はやや外反し刃部に最大幅をもつ。縦断面形は基部から刃部にかけてしだいに厚みが減っていく。刃部は両面に調整加工が施されている。石材は安山岩である。516は重量271gである。側縁はやや外反し刃部に最大幅をもつ。基部と刃部の厚さはほぼ同じである。石材は泥質片岩である。517～524は打製石斧未製品である。517は重量440gである。基部上方に抉りを加工しており、ほぼ全縁を調整加工している。石材は安山岩である。519は重量910g、最大幅10.3cmの大型品である。両側縁中央に抉りがあり、上下両端に調整加工がみられる。石材は泥質片岩である。

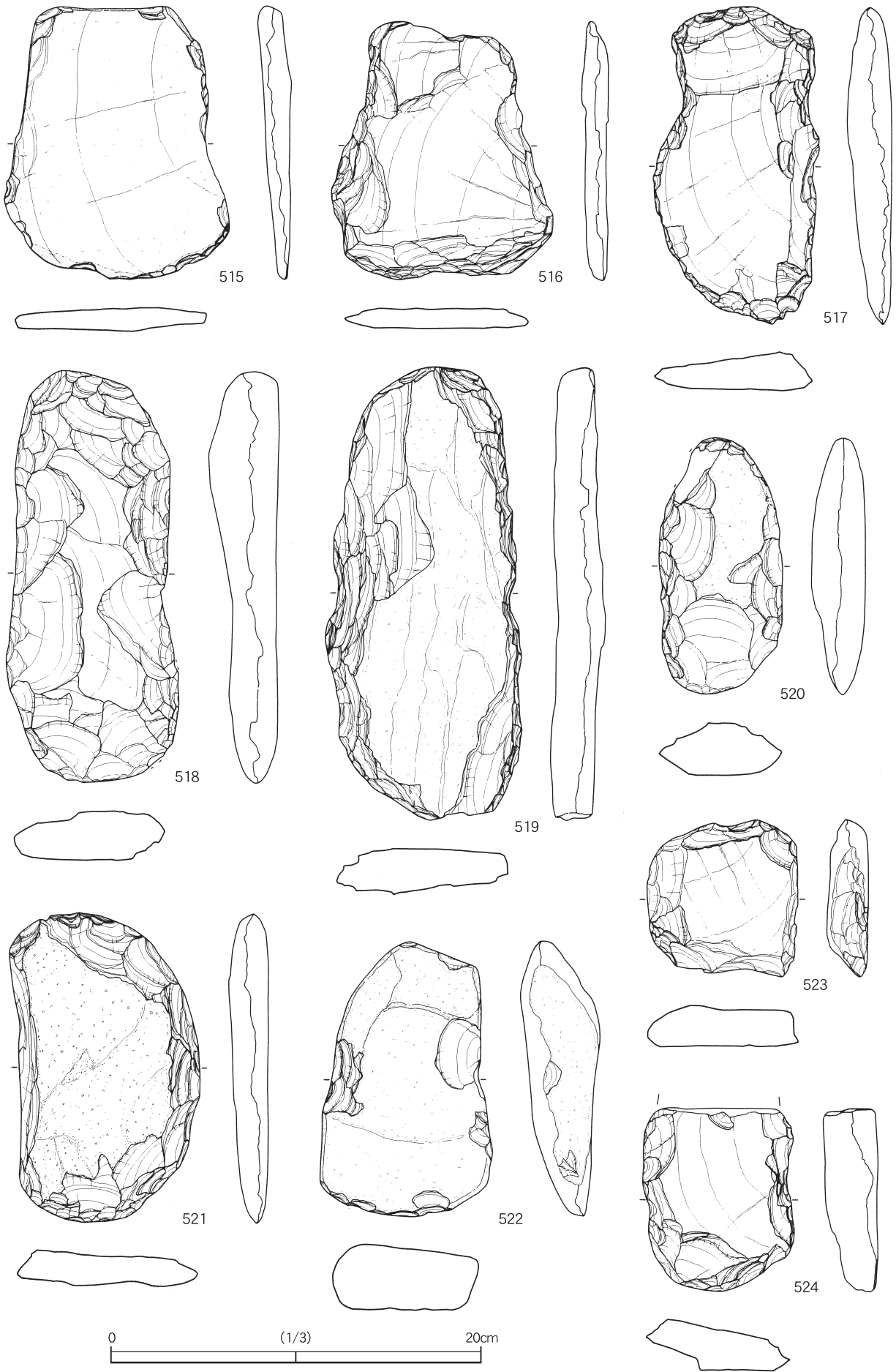
525は磨石である。一面を磨面としており、わずかに擦痕がみられる。石材は花崗閃緑岩である。526～542は敲石であるが、528・534は磨石と兼用である。528は、両側縁と表面中央に敲打痕がみられ



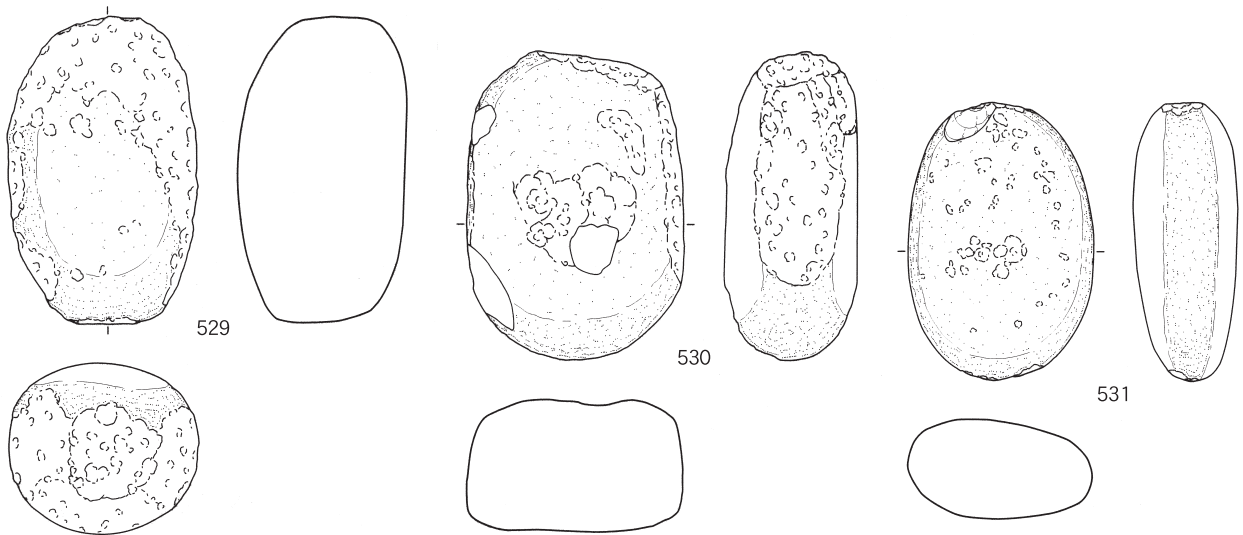
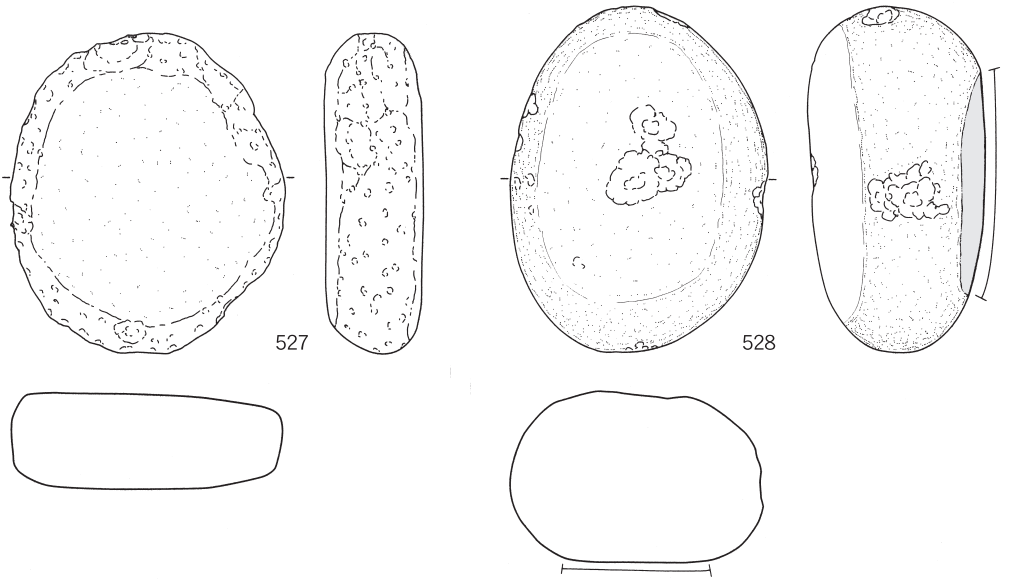
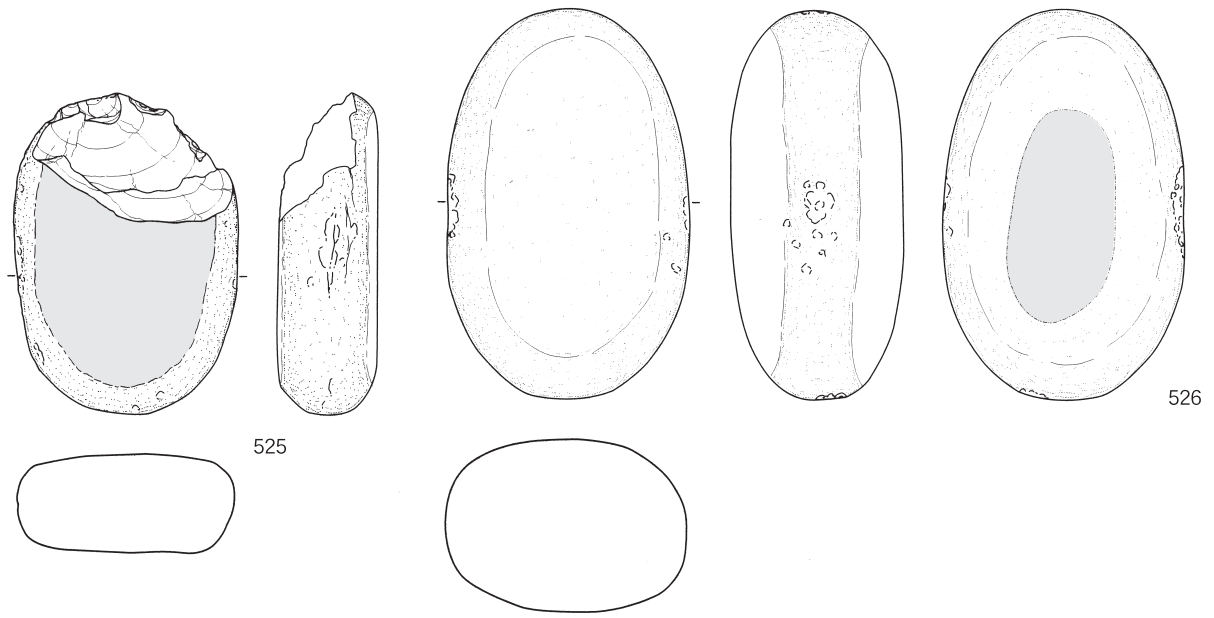
第58図 石製品実測図③



第59図 石製品実測図④

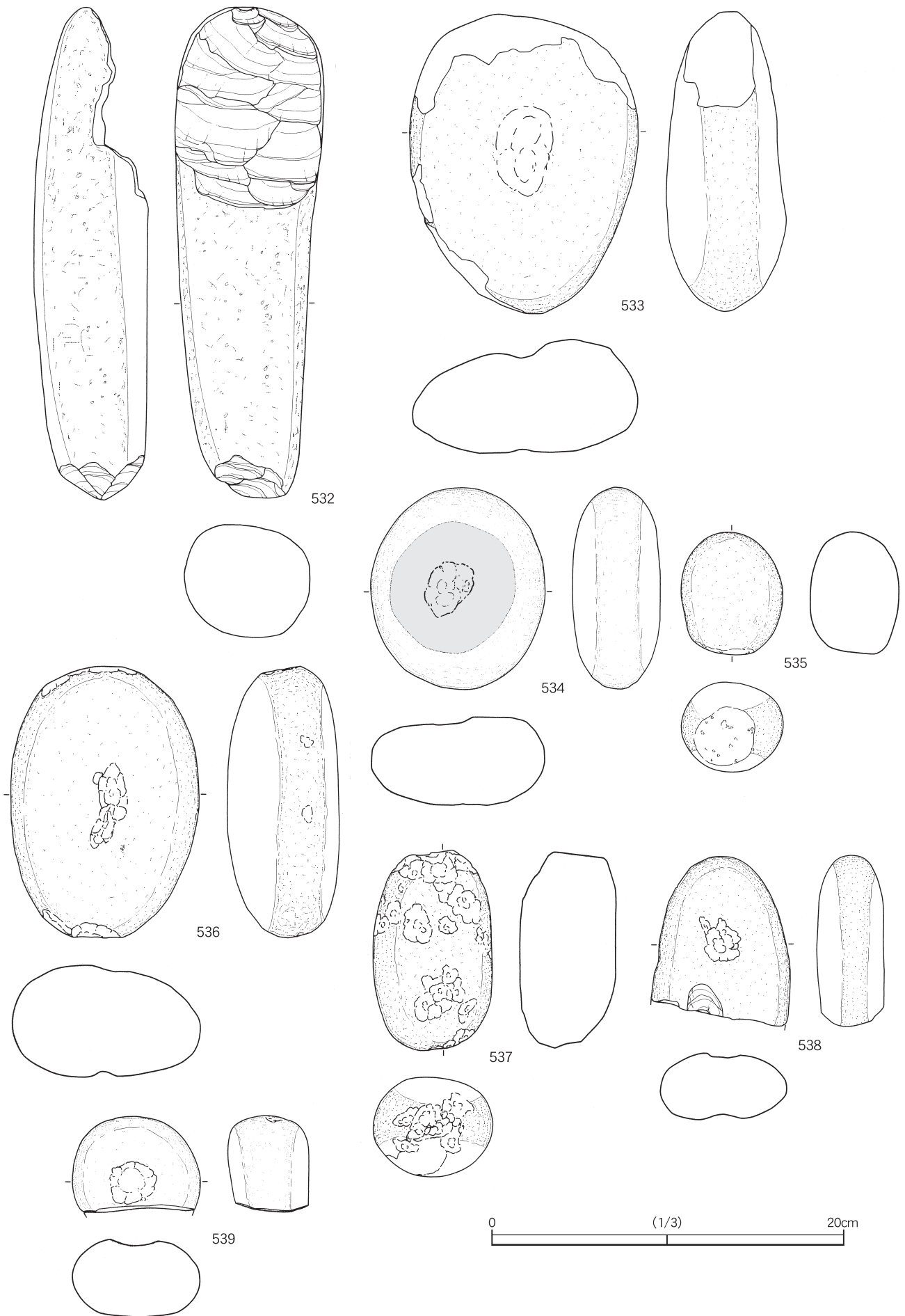


第60図 石製品実測図⑤



0 (1/3) 20cm

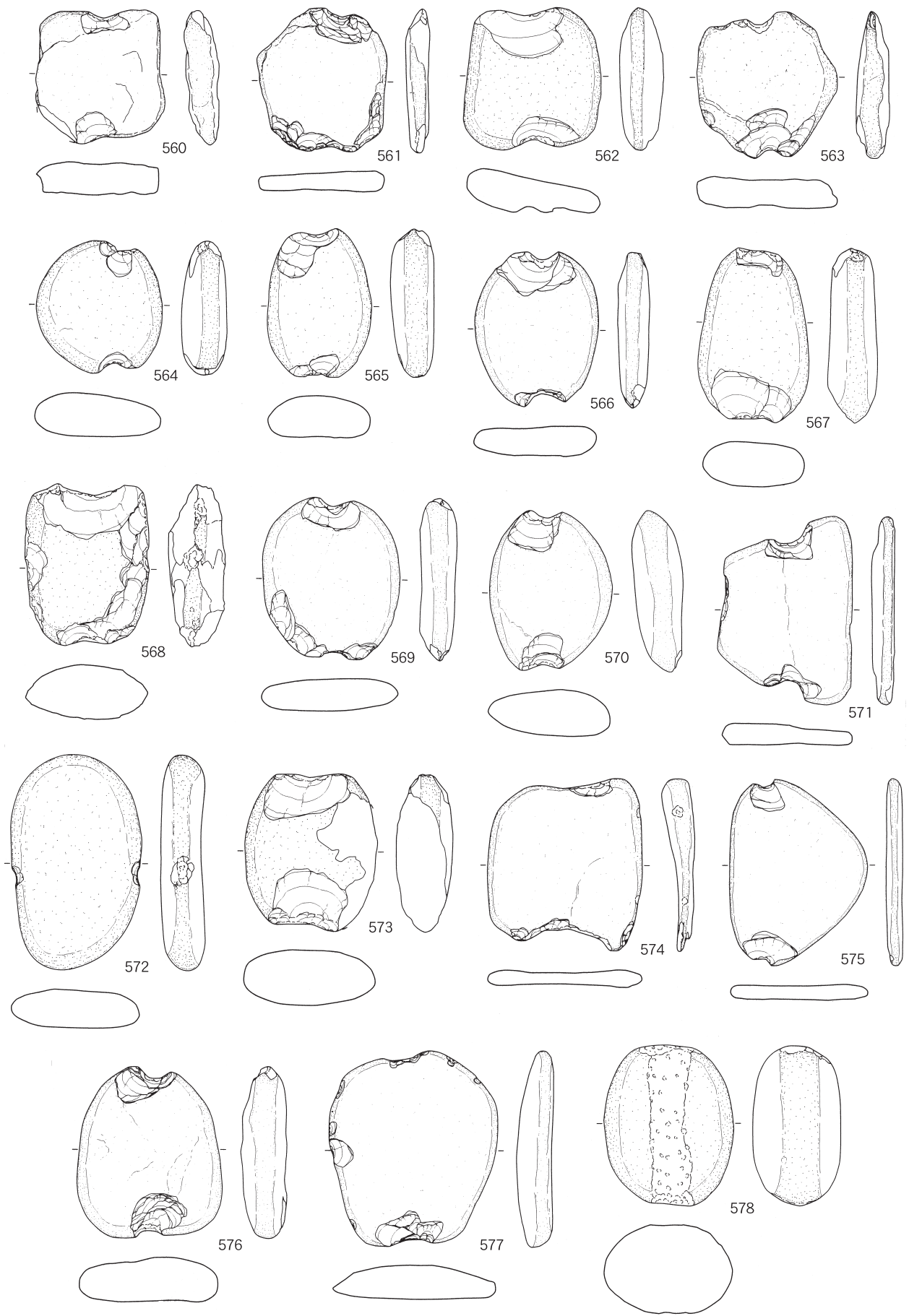
第61図 石製品実測図⑥



第62図 石製品実測図⑦

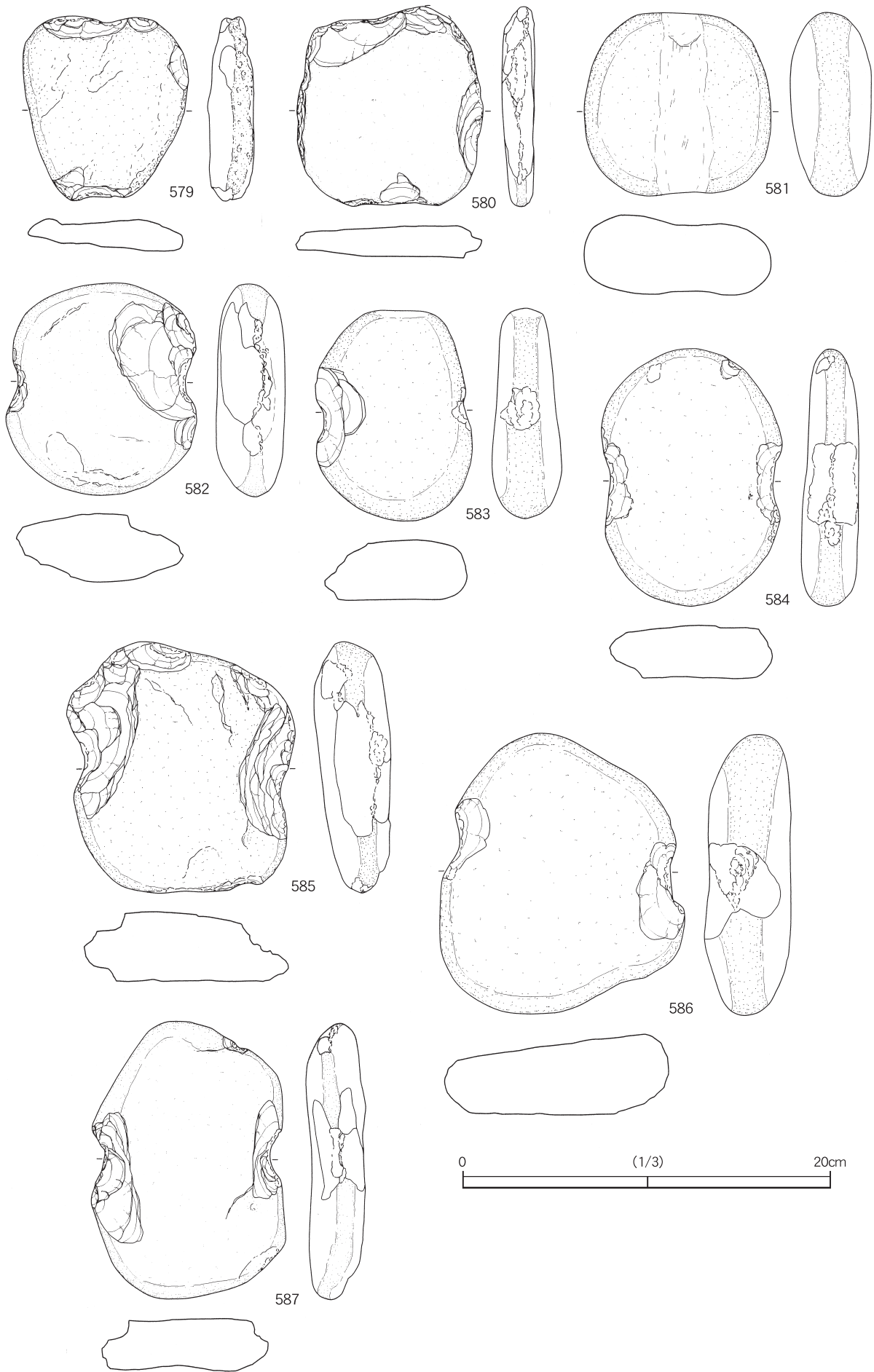


第63図 土製品実測図②, 石製品実測図⑧

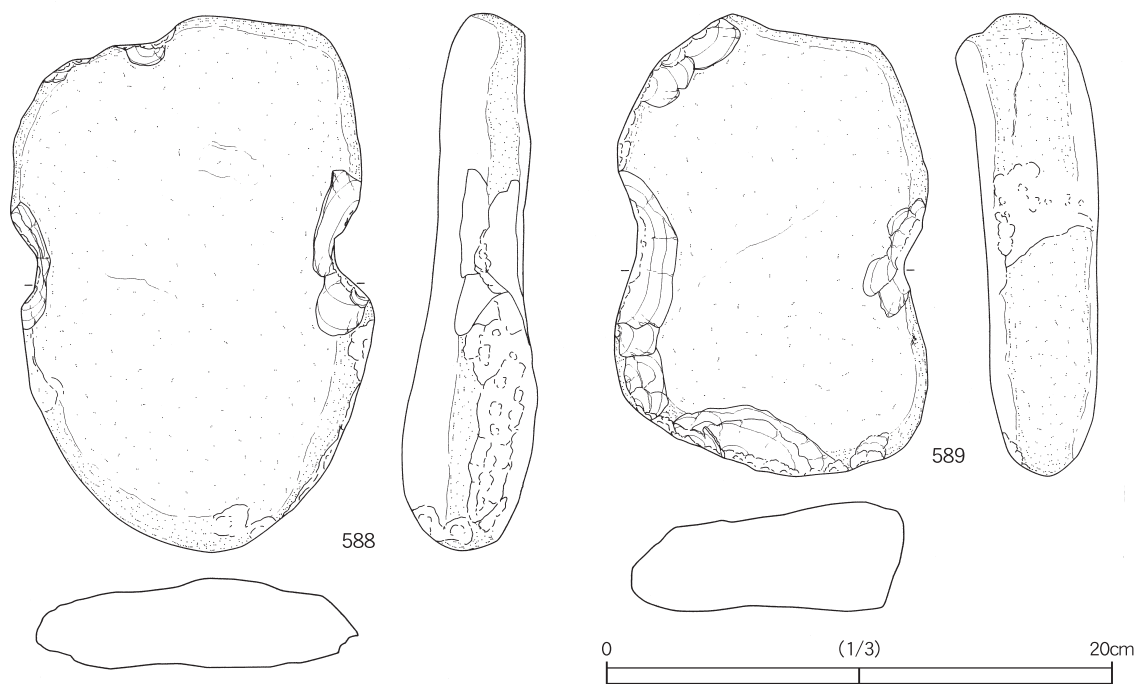


0 (1/3) 10cm

第64図 石製品実測図⑨



第65図 石製品実測図⑩



第66図 石製品実測図①

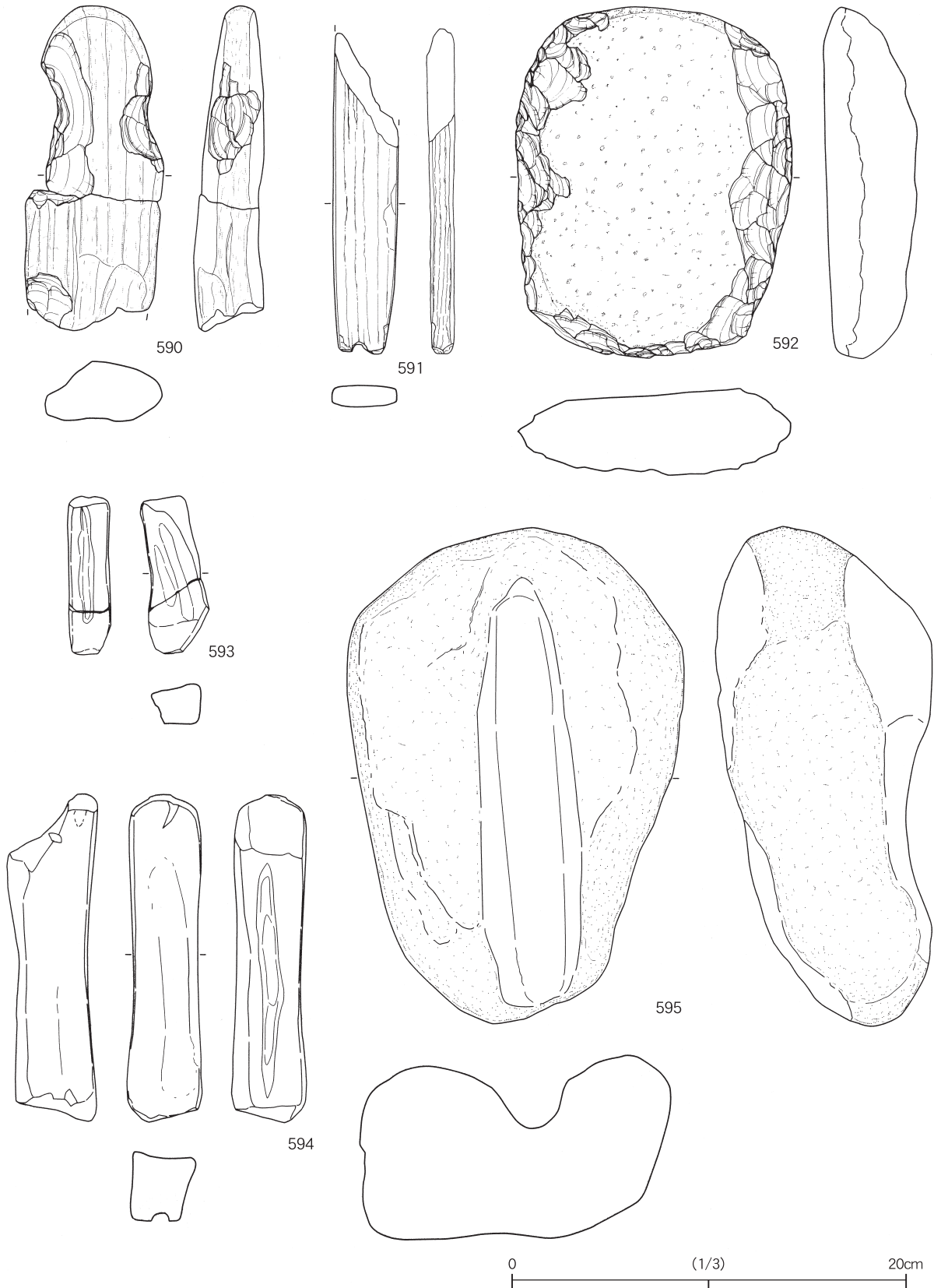
る。裏面は擦れて平らになっている。石材は花崗閃緑岩である。532は長さ28.1cm、最大幅8.4cm、重量2112gの大型品である。石材は花崗閃緑岩である。534は円礫中央に敲打痕があり、同じ面を磨面として兼用している。表面がやや風化しているために擦痕はみられない。石材は砂岩である。539は円礫の中央部と思われる箇所に明瞭な敲打痕が残る。石材は花崗閃緑岩である。

543は土器片錘で、重量は31.2gである。胎土は砂粒を多く含み、表面は黄灰色、内面は赤褐色を呈する。544～589は石錘である。556・578・581は有溝石錘、そのほかは打欠石錘である。555は重量152gである。ほぼ正方形の礫を長軸方向に打ち欠いて抉りを施し、沈子綱掛けをつくっている。石材は泥質片岩である。555は重量49.5gである。最大厚0.7cmの扁平な河原石を利用している。石材は角閃石安山岩であり、遺跡近辺に産地がない石材である。556は重量228gである。円礫の長軸に幅約1.5cmの溝が敲打により一条施されている。石材は花崗閃緑岩である。557は重量173gである。短軸方向を打ち欠いている。短軸方向を打ち欠いたものは、重量300g以下のものにはあまりみられない。575は重量94gであり、最大厚0.8cmの扁平な河原石である。石材は角閃石安山岩である。578は重量が460gである。円礫の長軸に幅約2cmの敲打による溝が一条施されている。溝の深さは1mmにも満たない。石材は花崗閃緑岩である。

581は重量680gである。長軸に幅約3cm、深さ約3mmの溝が一条施されているが、溝の内面は平滑であるため、擦り切りによる施溝と思われる。石材は花崗閃緑岩である。584は重量646gである。扁平な円礫の短軸方向を左右対称に丁寧に打ち欠いている。582～589は重量が500gを超える大型であり、短軸方向に打ち欠いている。重量が重いものは短い距離で綱を強く結び、綱の緩みを防ぐためであろう。石錘は415点が出土し、最も軽いものは544で13g、最も重いものは588で1731gで、平均重量は198gである。

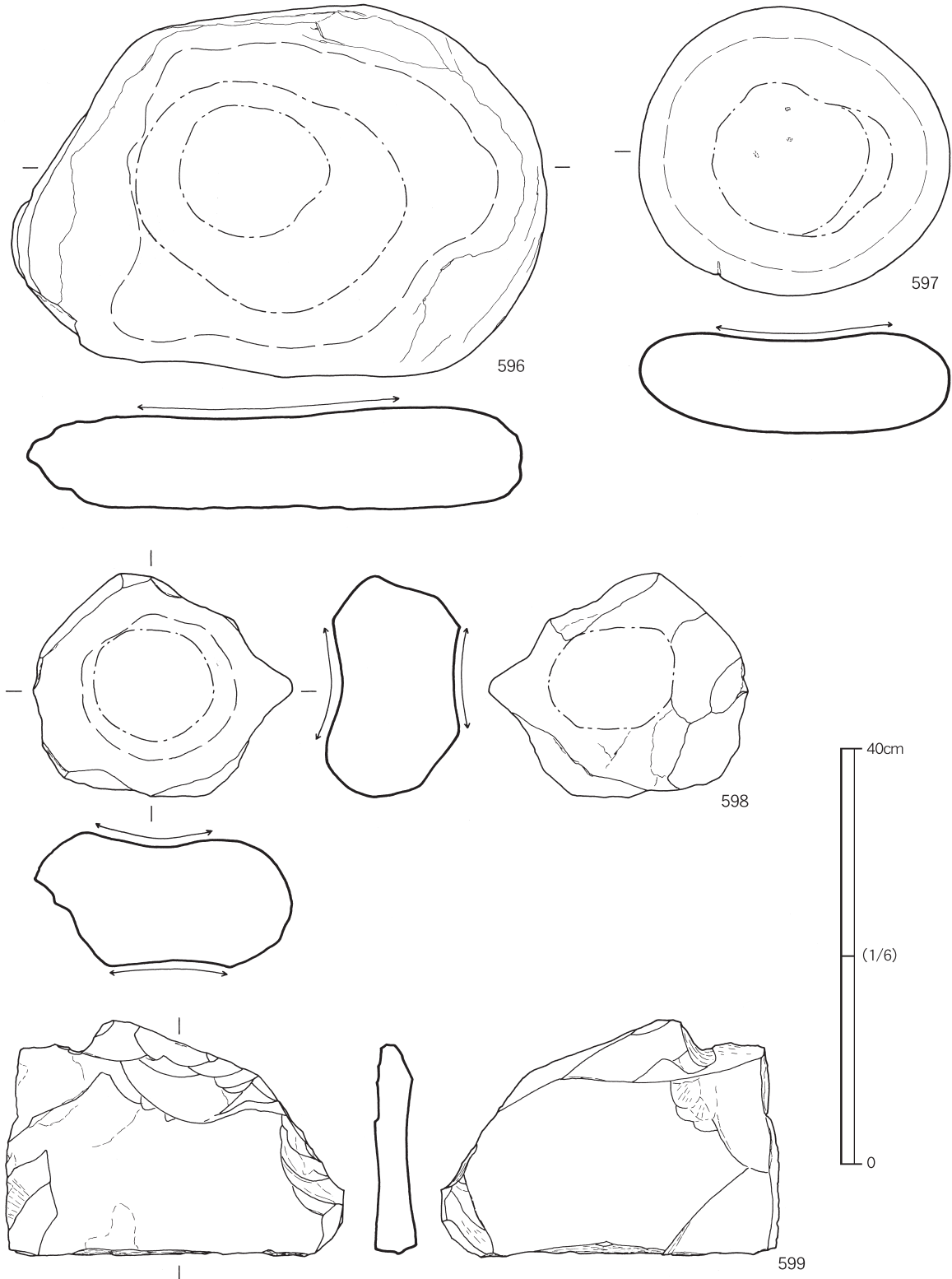
590は石棒である。表面はやや粗く研磨されている。両側縁に敲打による抉りを施し、頭をつくって

いる。石材は泥質片岩である。591はあわびおこしと思われる。柱状に加工され全面がやや粗く研磨されている。下端には半円形を呈する抉りがみられる。石材は泥質片岩である。592は用途不明である。表面は平坦であり側縁は調整加工がみられるが、裏面は凹凸の激しい打面のままである。593～595は砥石である。593は、長さ14.5cm、幅約5mm、深さ約1mmの溝があるため、玉砥石と思われる。石材は



第67図 石製品実測図⑫

砂岩である。594は表、裏、両側面の四面をよく使用しており、非常に滑らかである。裏面には、長さ11.5cm、幅約1cm、深さ約5mmの溝があり、玉砥石にも使われている。石材は泥質片岩である。595は重量4890gの大型である。溝が長さ約23cm、幅約5.5cm、深さ約3.5cmの溝がある。石斧など大型の石器の側縁を研磨したものであると思われる。石材は砂岩である。596～598は石皿である。596は扁平な転礫を利用している。凹み部は全体に浅く凹んでおり使用面は滑らかである。598は、割石を利用している。二面を利用しており、両面とも全体が浅く凹む。599はサヌカイトの石核で、石材分析により金



第68図 石製品実測図⑬

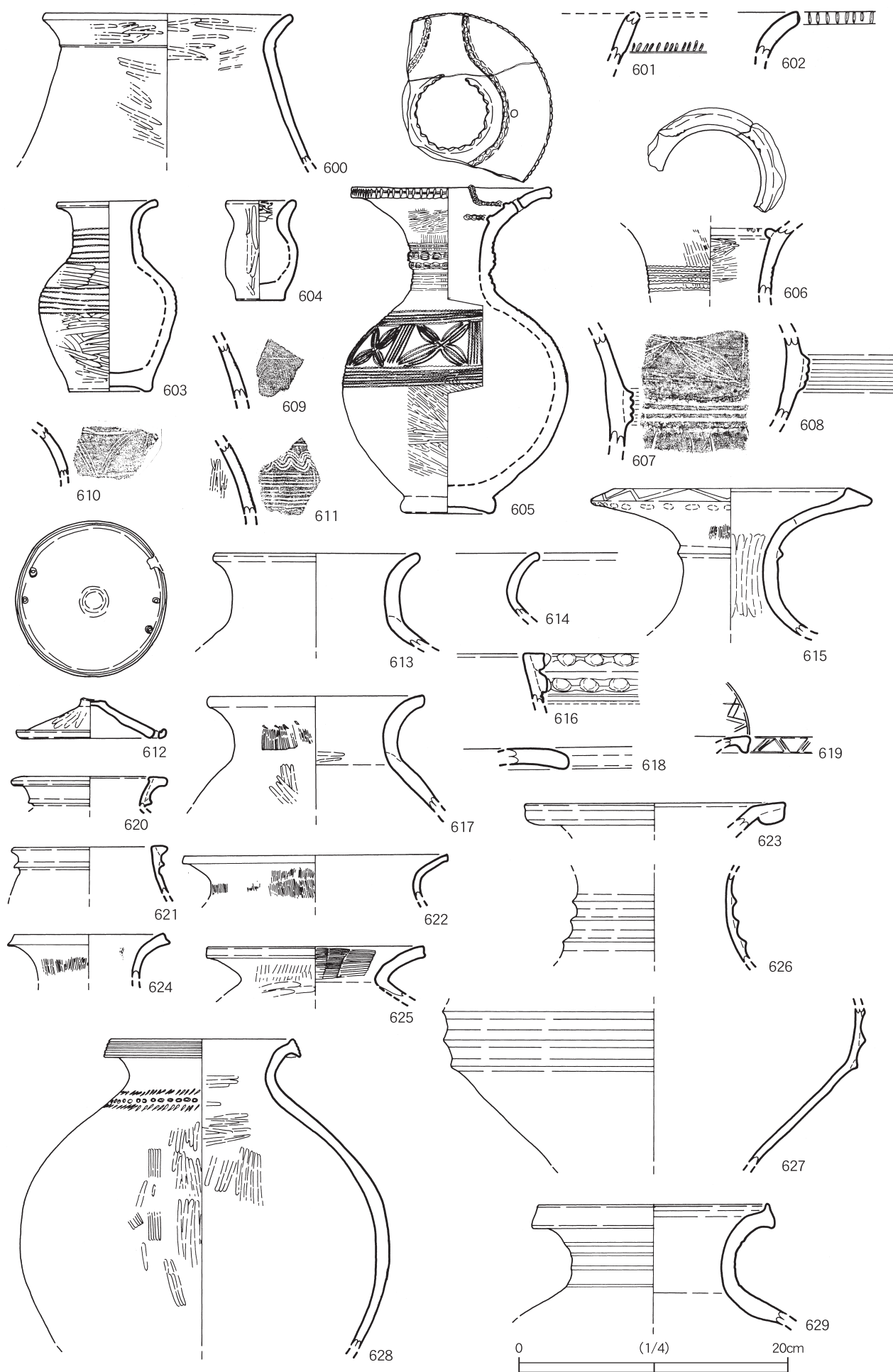
山産と判明した。重量4125gの板状である。大部分が剥離面であるが、朽木状の風化面が残る。

弥生時代

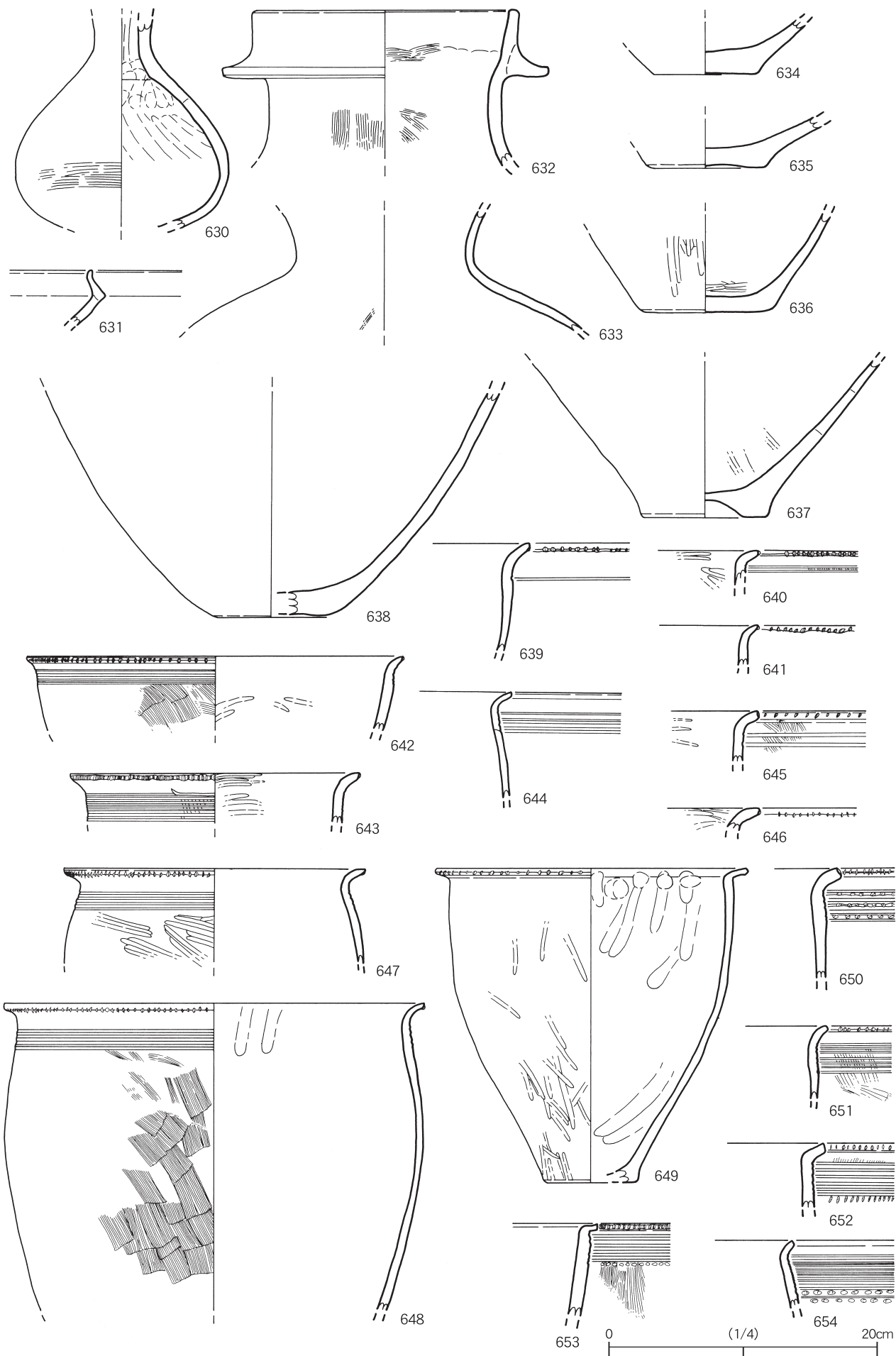
弥生土器（第69図～第72図、図版46～52）

600は中型の壺で、口縁部と頸部の境に段を有する。603～610は前期末～中期初頭の壺である。603は頸部と胴部に刻みをもつ貝殻による沈線を巡らす。604は小型で無文である。605は底部がやや上げ底をなし、胴部は球形に近い。頸部が直立し、口縁部は大きく外反する。口唇部には刻みと沈線を巡らす。内面突帯は二重に巡らし、いずれも連鎖状の押圧を施し、注口状に1ヶ所を開けている。頸部外面には2条の連鎖状突帯を巡らし、さらに上下に沈線を巡らす。肩部と胴部に刻みをもつ貝殻による沈線を巡らし、沈線間を文様帯として縦方向の平行沈線で区切り、それぞれの区画に貝殻による木葉文を配している。606～608は響灘沿岸地域からの搬入品とみられる。606は内面突帯、頸部外面に刻みをもつ貝殻による平行沈線、607・608は胴部最大径に平行沈線を施した平頂突帯を付し、607は刻みをもつ貝殻による木葉文を施文する。611は壺胴部片で、櫛描きの波状文、平行線文を施す。612は壺蓋で、裾端部がやや上方に反り、紐孔とみられる2組の穿孔が対向して配置されている。613・614・617は無文の壺で、口縁部は弧を描いて外反し、端部の面は不明瞭である。615は壺で、大きく外反する口縁の端部を拡張して文様帯とし、へら描きの山形文を施文する。頸部には断面三角形を呈する突帯を1条貼付する。616は壺口縁部とみられ、口縁部外面に2条の連鎖状突帯を有する。618は鋤先口縁の一部とみられる。619は壺の口縁部で、垂下部および上面にへら描き山形文を巡らす。620・621は壺で、口縁端部に粘土帯を貼付して上面を平坦とし、頸部に断面三角形を呈する突帯を貼付する。623は壺で、口縁内面に平坦面をもち、外面に粘土帯を貼付する。胎土は異質で、搬入品とみられる。625は口縁部が屈曲して大きく外反し、端部は面をもつ。626・627は同一個体とみられる壺の頸部、胴部片で、断面三角形を呈する突帯を複数貼付する。628は球形の胴部に弧を描いて外反する口縁部が続き、端部は上下に拡張する。拡張部には擬凹線を巡らし、肩部には斜位の刺突文と竹管文を巡らす。630は長頸壺で胴部は扁球形をなし、下位が張る。631は複合口縁で、端部は外方へ拡張する。632は壺の口縁部で、頸部はわずかに内傾し、口縁部はほぼ水平に外反する。内端部上にやや外傾する立ち上がり部を貼付し、端部は面をもつ。634～638は壺の底部である。

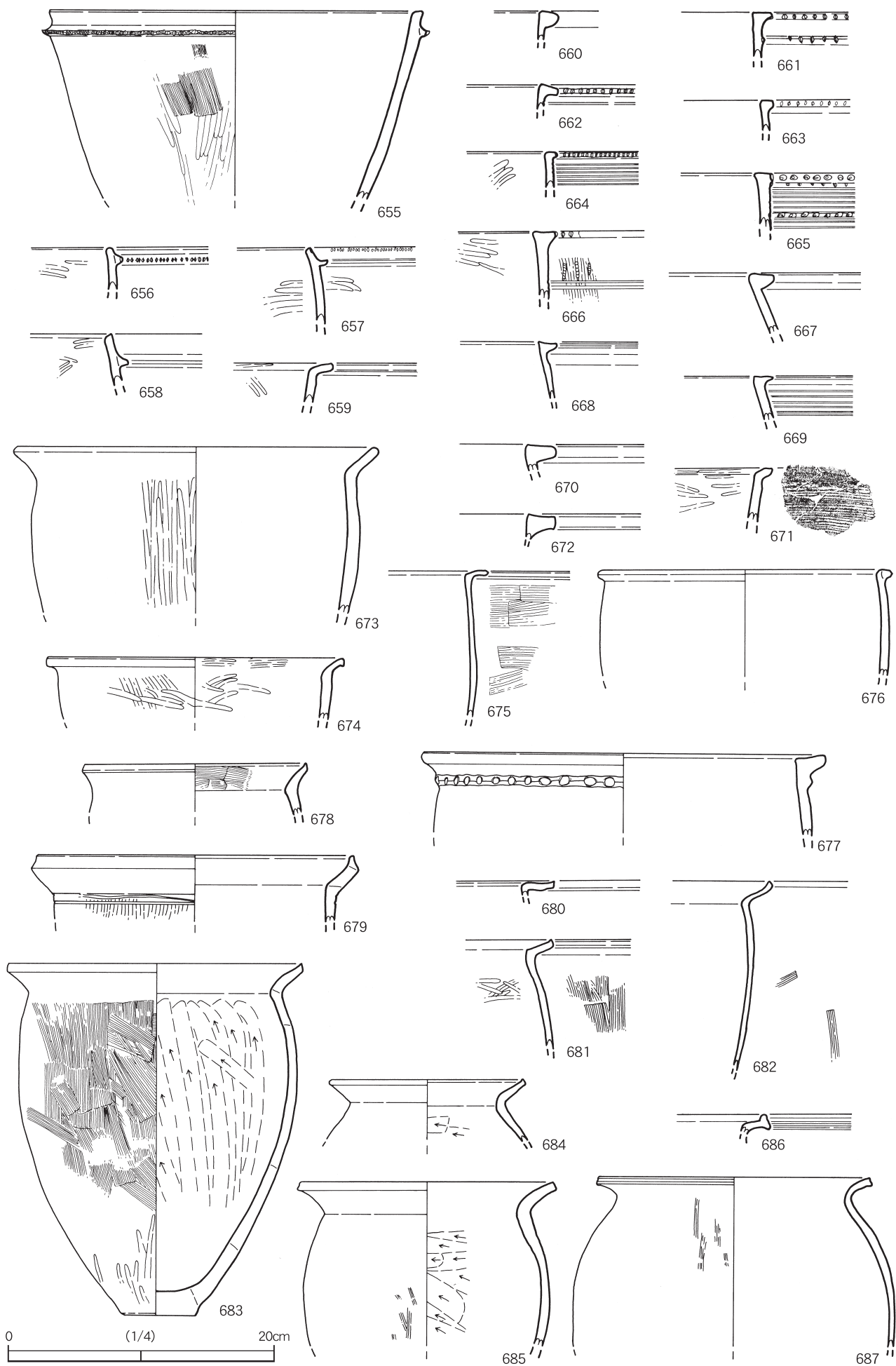
639は甕で、口縁部は如意形に外反し、口唇部下端に刻みを巡らす。肩部に一条の沈線を巡らす。640～654は甕で、644以外は口唇部に刻みをもつ。肩部の沈線は4条以上のものが多い。650・652～654は沈線下や沈線間に竹管文や刺突文を巡らす。655～658は口縁部下に先端部が丸みをもつ突帯を貼付する。660～669は肩部が直立または内傾し、端部上面は拡張して平坦面を形成する。671は肩部にハケ状工具による平行線文を施す。677は口縁部が逆L字状をなし、口縁下に連鎖状突帯を貼付する。678～684は口縁端部を上方につまみ上げるいわゆる跳ね上げ口縁である。683はほぼ完形で、胴部中位が張り、底部は厚手の平底をなす。外面はハケを基調とし、下部はミガキ、内面はケズリである。686は口縁端部を上方に拡張し、擬凹線を巡らす。688～692は口縁部を拡張し、凹線を施す甕である。中でも688・692は器壁が薄く、胎土が他の弥生土器と比べ精良である。讃岐地方などの四国からの搬入品の可能性がある。693は複合口縁の甕で、口縁部は屈折し、外傾気味に外反する。山陰系の甕とみられる。694～705は、甕の底部である。697・702・704は底部に穿孔を有し、甕とみられる。



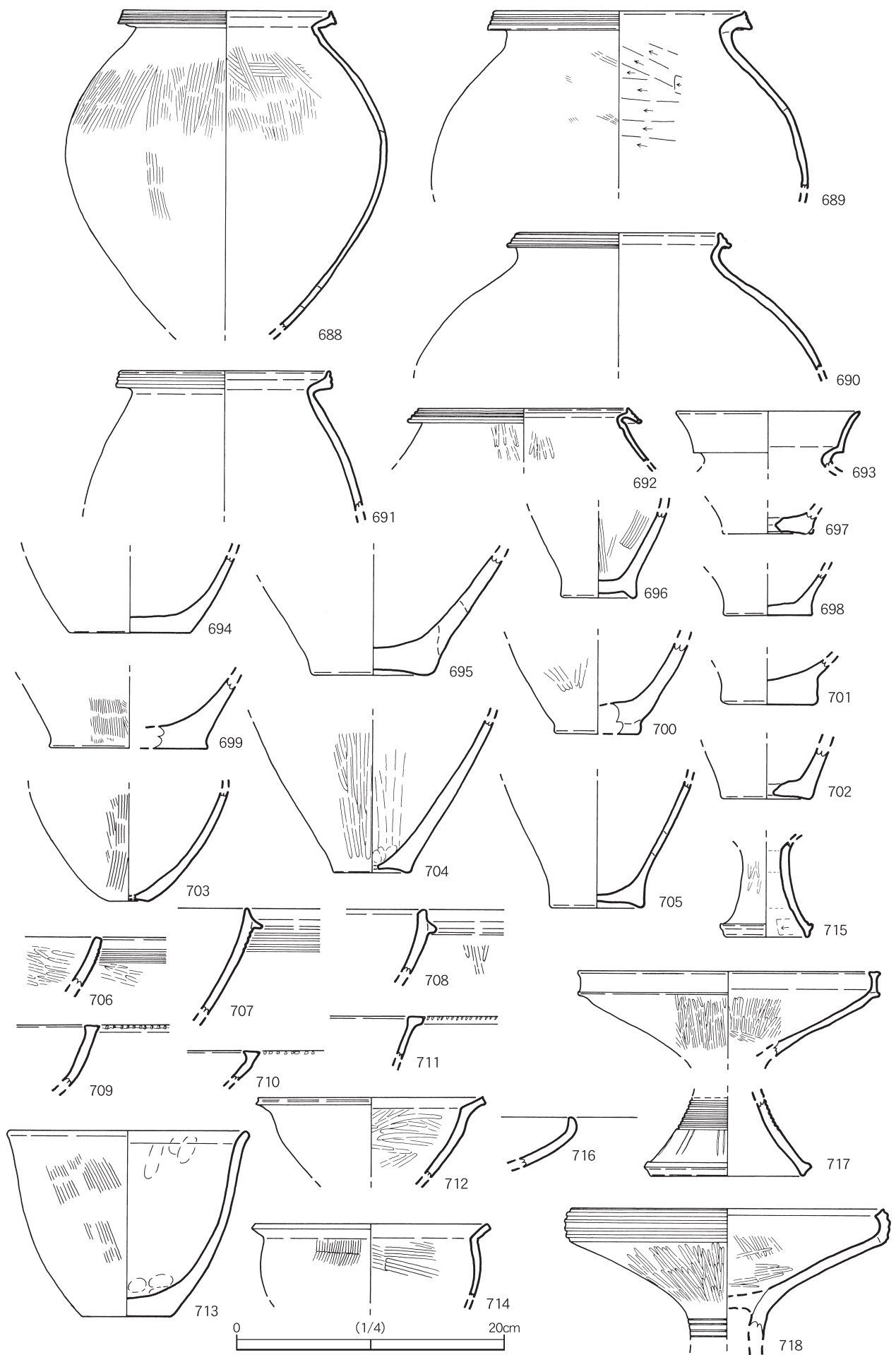
第69图 弥生土器実測图①



第70图 弥生土器实测图②



第71图 弥生土器実測图③

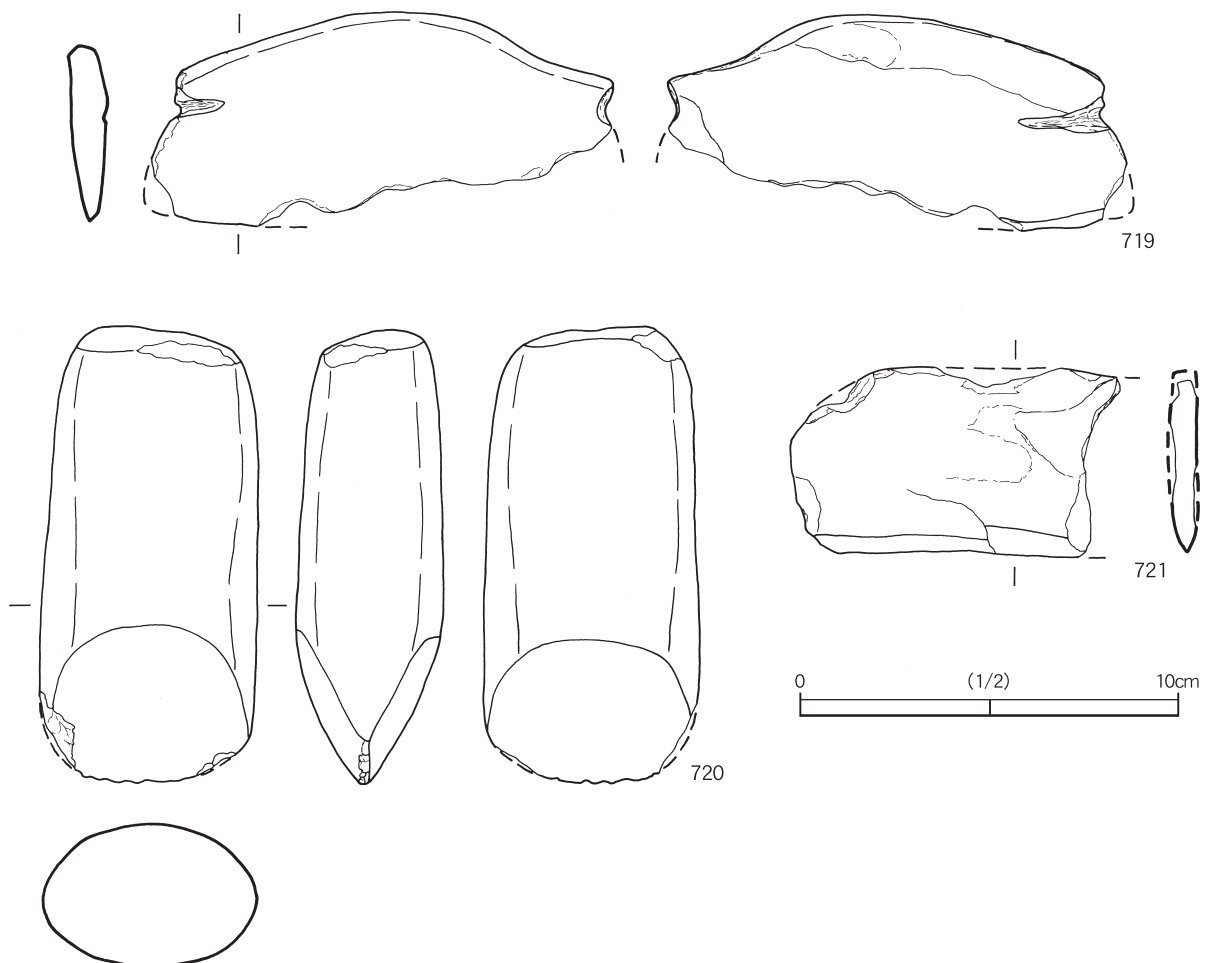


第72图 弥生土器実測图④

706～714は鉢である。706は、外面に無鋸歯の貝殻腹縁による沈線を施す。707・708は口縁部下に先端部がやや丸みをもつ突帯を貼付する。709・710・711は口縁端部を拡張し、上面を平らに整え、外端部に刻みを巡らす。713は口縁部はわずかに外反し、胴部は中位がやや張る。底部は厚手の平底である。715～718は高杯である。715は脚部で、裾端部を拡張する。716は杯部で、口縁部が内湾し、端部はやや丸みをもつ。717は直接接合できないが、出土状態や胎土・調整から同一個体とみられる。杯部は外傾する体部上端から屈折して、口縁部がほぼ直立して立ち上がり、端部は拡張し、上面を平坦に整えている。脚部はハの字形に開き、端部はやや上方に拡張する。多数の平行沈線を巡らし、沈線下に2本一組みのヘラ描き平行線を縦方向に施す。器面は丁寧にミガキを施している。718は体部から杯部にかけて屈曲して立ち上がり、口縁部は内湾し、端部は面をもつ。脚部に平行沈線を巡らす。杯部と脚部の間は円板充填とみられるが、脱落している。口縁部外面は凹線を5条巡らす。器面は内外面とも丁寧にミガキを施している。

石器 (第73図、図版52)

719は石包丁である。長さ2.2cmほど刃部が残存している。両面を約4mm幅で研磨し刃部を作っている。背部も丁寧に研磨されている。左右にある紐掛けの袢り周辺には紐による擦痕が残る。全面にマンガンが付着しているため石材は不明である。720は太型蛤刃石斧である。風化が激しく研磨の状況は不明である。石材は花崗岩である。721は石鎌である。やや湾曲する刃部は約6mm幅の研磨で作られている。石材は緑色片岩である。



第73図 石製品実測図⑭

古墳時代

土師器（第74図～第77図、図版53～55）

722～743はミニチュアの鉢である。いずれも手捏ね成形で、口縁端部はやや薄く丸みをもつものが多い。器面に指頭圧痕や指ナデ痕を残す。744～747は、小型丸底壺である。744は球形の胴部に外傾する口縁部が続き、端部は尖り気味である。内外面とも赤色顔料を塗布する。745・746はやや短い口縁部が外反し、内面調整はケズリである。749は壺で、口縁部はくの字形に外反し、端部は細くなる。胴部は扁球形をなし、外面調整はタタキ、内面はケズリである。

750～763は椀である。器面調整はヘラミガキを基調とし、一部はハケメを施す。口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部は丸みをもつかまたは細く尖り気味となるものが多い。759・760は口縁端部が外反する。750・751は、底部外面に葉脈状の文様を施している。751は先端の幅が広いヘラで葉脈の形を表現している。752・754は、底部外面に×状のヘラ記号がみられる。

765は鉢で、口縁部は逆くの字形に外反し、屈折部内面に稜をもつ。766～776は高杯で、杯部は下位で屈折し段をもつが、767・774は段が不明瞭である。脚部は短脚で下部で屈折して開くものが多いが、771は裾まで緩やかに開く。766は脚部に円孔透かしをもつ。いずれも杯部と脚部の接合後、円板充填を行っている。776は充填部の脚部への差し込み状況がよくわかる。器面調整は、ミガキを基調とし、部分的にハケメ痕跡を残すものがある。脚部内面は横方向のケズリを施すものが多い。

777は模倣須恵器の杯身である。立ち上がり部はやや内傾し、端部は尖り気味である。778は甌の底部で多数の小穿孔が認められる。779は全体の形状は不明だが、円筒形を呈すとみられ、角が直角に曲がる透かし部をもつ。胎土も砂粒が少なく、異質な土器である。

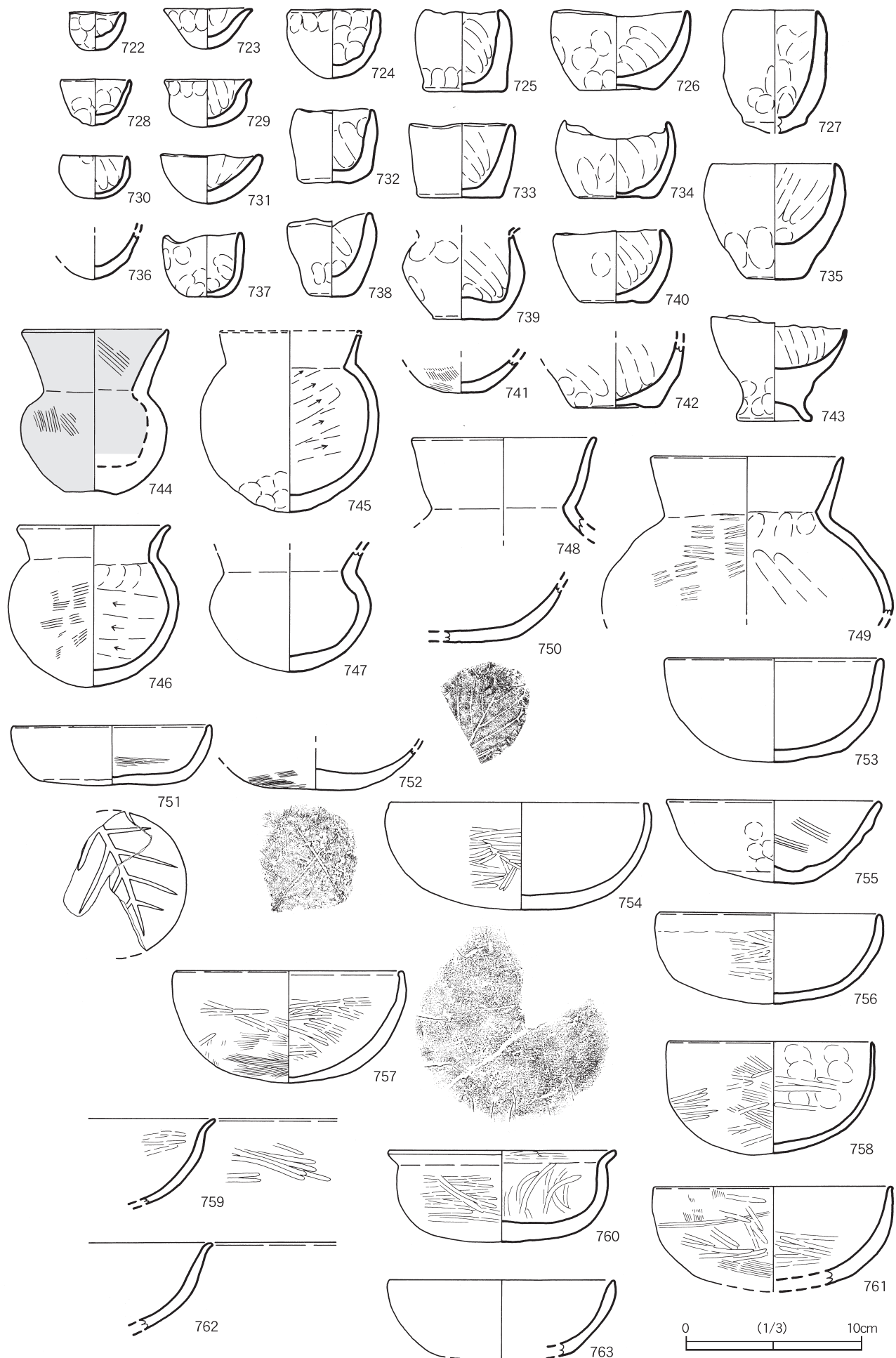
781～797は甕である。底部は丸底を呈し、調整は外面ハケ、内面ヘラケズリを基調とする。781～783は複合口縁をなす。いずれも口縁部は外反した後、わずかに屈曲し、やや外形気味に立ち上がる。器面調整はハケを基調とする。784は口縁部がくの字形に外反し、胴部は弧状に開く。786は口縁部がくの字形に外反し、屈折部内面に稜をもつ。器壁は薄く、内面はハケ調整である。787～789は口縁部はくの字形に外反し、胴部は球形または倒卵形とみられる。調整は、外面はハケ、内面はケズリである。790も口縁部はくの字形に外反し、端部はやや外方へ反る。胴部は倒卵形をなし、調整は、外面ハケ、内面ヘラケズリである。791も口縁部はくの字形を呈し、端部はやや尖り気味となる。793はほぼ完形で、くの字形に外反した口縁部は内湾気味に立ち上がり、胴部は倒卵形を呈する。底部は丸底で、器壁はやや薄い。調整は外面ハケ、内面ヘラケズリである。794～796は胴部が倒卵形を呈し、底部は丸底である。調整は、外面ハケ、内面ヘラケズリである。797は、やや厚手の丸底である。

朝鮮系軟質土器（第75図、図版54）

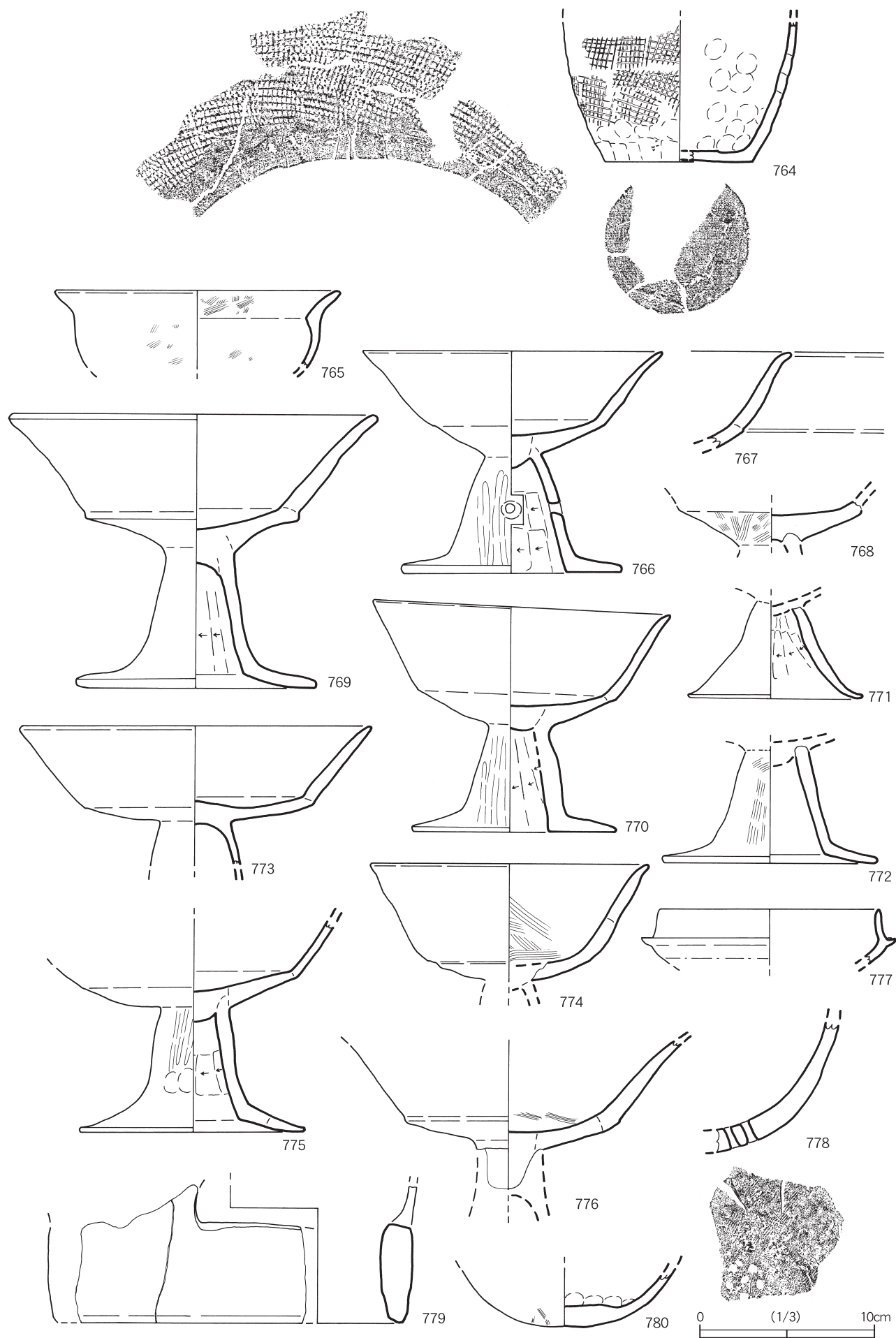
764は朝鮮式軟質土器の甕で、口縁部を欠失する。底部は大きめの平底で、胴部は内湾気味に立ち上がり上位が張る。底部外面に成形時の方形のゲタ痕跡がわずかに認められる。胴部下端は横方向へのケズリ、胴部外面はやや目の細かい格子タタキを施す。内面は指頭によるナデを施す。

須恵器（第78図、図版56）

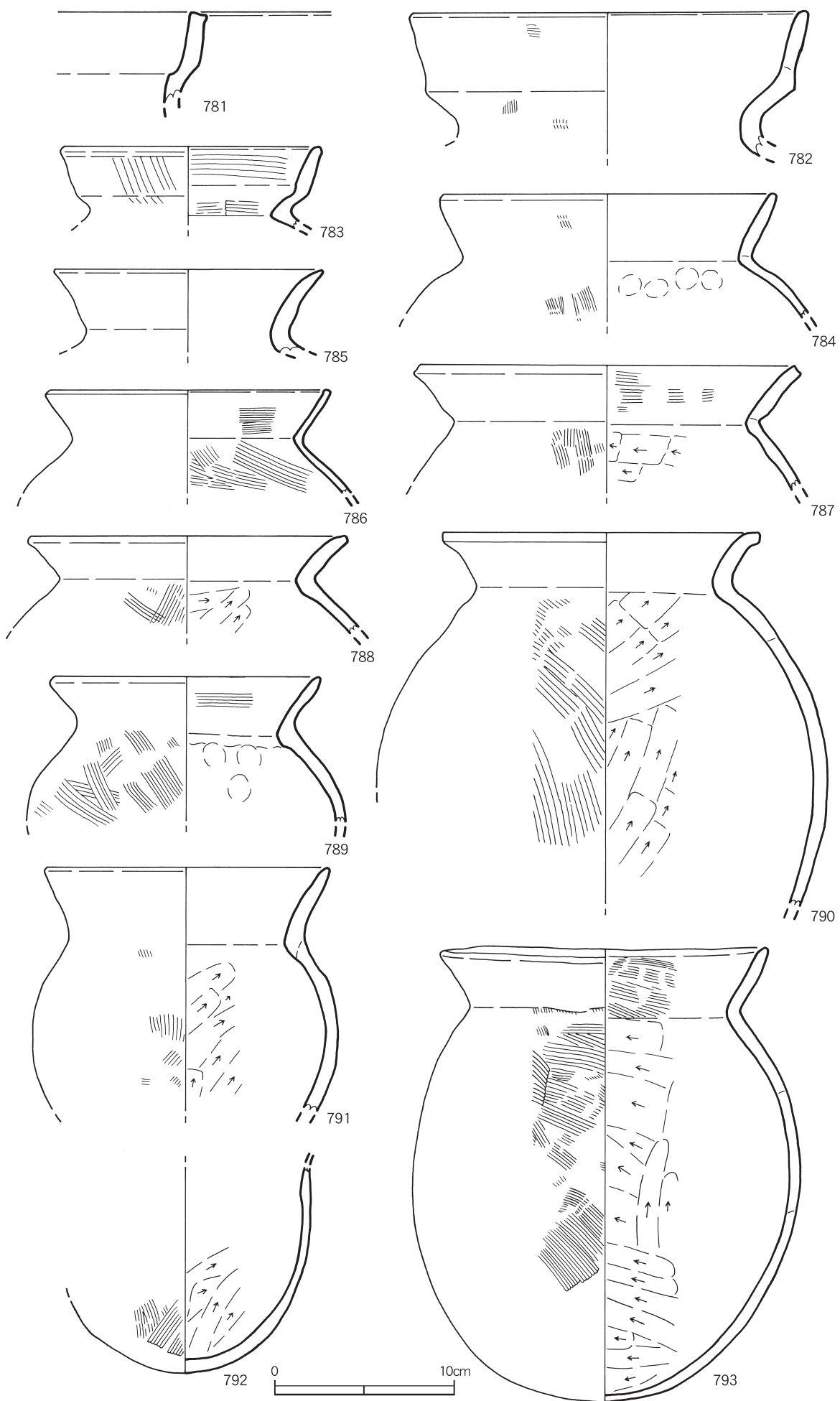
798～805は杯蓋である。798・799は器高がやや高く、天井部と口縁部の境の稜は突起となる。798は口縁端部は面を持ち、799は段をもつ。天井部から稜までは回転ヘラケズリ、口縁部は回転ナデで



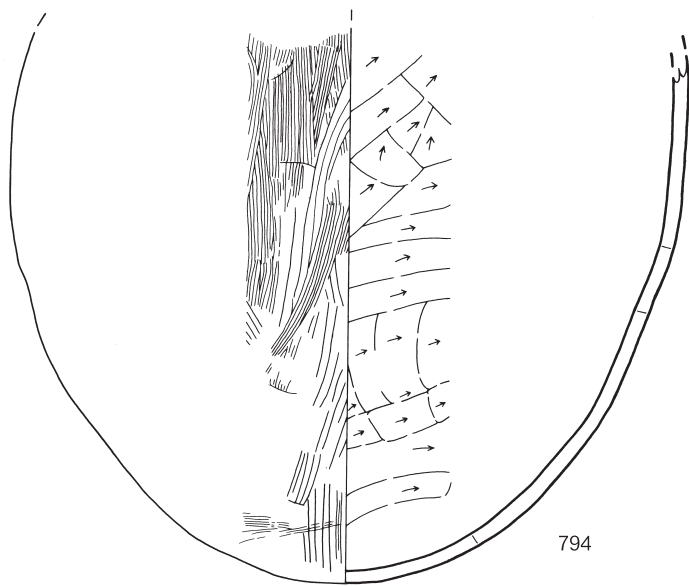
第74図 土師器実測図①



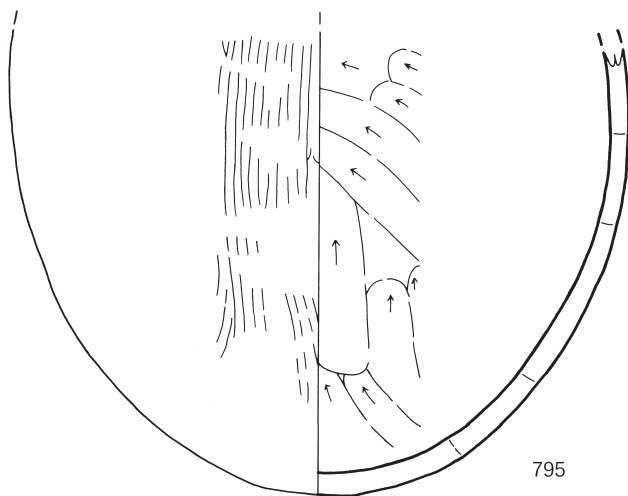
第75図 軟質土器実測図，土師器実測図②



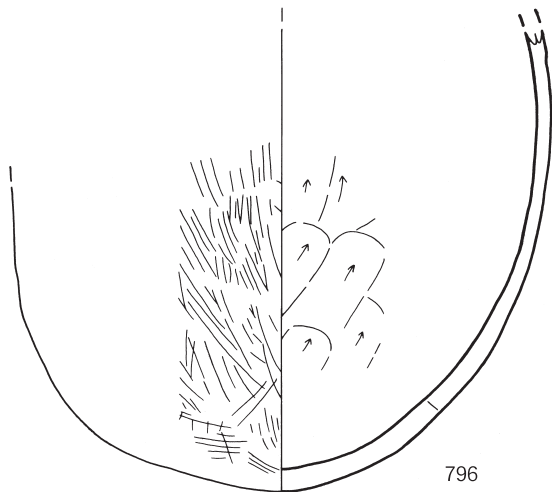
第76図 土師器実測図③



794



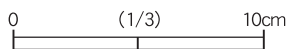
795



796



797



第77図 土師器実測図④

ある。800は天井部が比較的平らで、端部は段をもつ。801は天井部を欠失するが、口縁部は内湾気味で、端部は傾斜面をもつ。口縁端部外面に刻み状の短斜線を巡らす。802は器壁が全体的に厚く、天井部と口縁部の境に沈線を巡らす。口縁端部は傾斜面をもつ。804は器高が低く、天井部と口縁部の境は明瞭でない。天井部に×のヘラ記号がある。806～816は杯身である。806～808は、器高が高い。受部は短く、やや斜め上方に伸びる。立ち上がり部は長く、内傾して立ち上がり、端部は傾斜面をなす。受部より下は回転ヘラケズリ、受部～立ち上がり部は回転ナデである。809～812は、立ち上がり部はやや長く、内傾し、端部は傾斜面をもつ。813は器高はやや低い。立ち上がり部は短く、外反気味である。814・815は体部が緩やかに内湾気味に立ち上がり、受け部は短く、斜め上方へ伸びる。立ち上がり部は短く、弧状に外反する。816は器壁がやや薄く、受け部は斜め上方に伸びる。立ち上がり部は短く、ほぼ直立する。

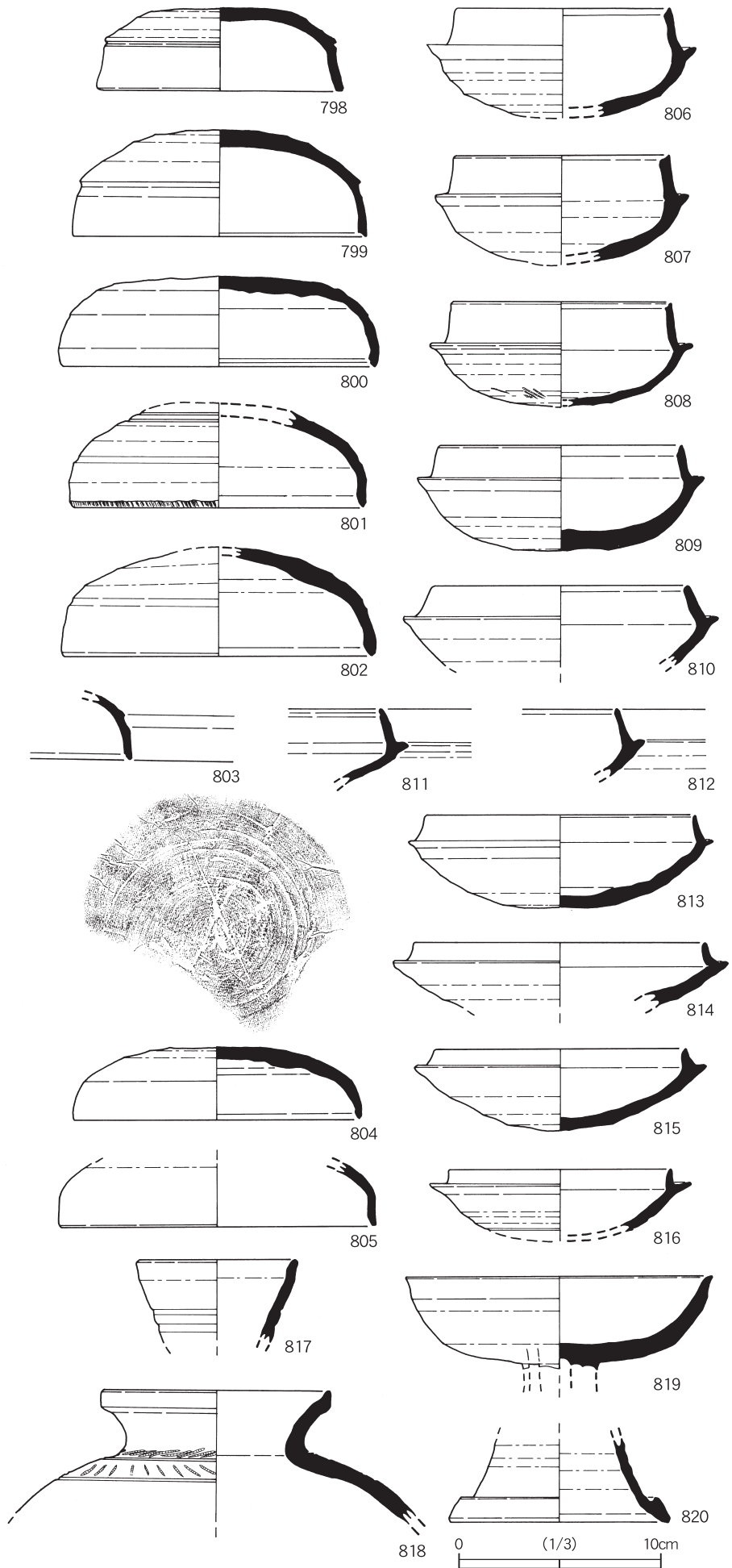
817は提瓶で、口縁端部はわずかに内湾した後、外方へ反る。口頸部に2条の沈線を巡らす。818は壺で、口縁端部外側に面を持ち、胴部は球形をなす。口頸基部～胴部上位に沈線を巡らし、沈線間に刺突文を施す。819・820は高杯である。819は坏部で、口縁部は薄く、端部はわずかに外方へ反る。脚部の大部分を欠失するが、長方形透かしをもつことがわかる。透かしの両辺延長上の坏部下端に鋭い傷がみられる。820は脚部で、裾が緩やかに開き、下端部を肥厚させている。

古代

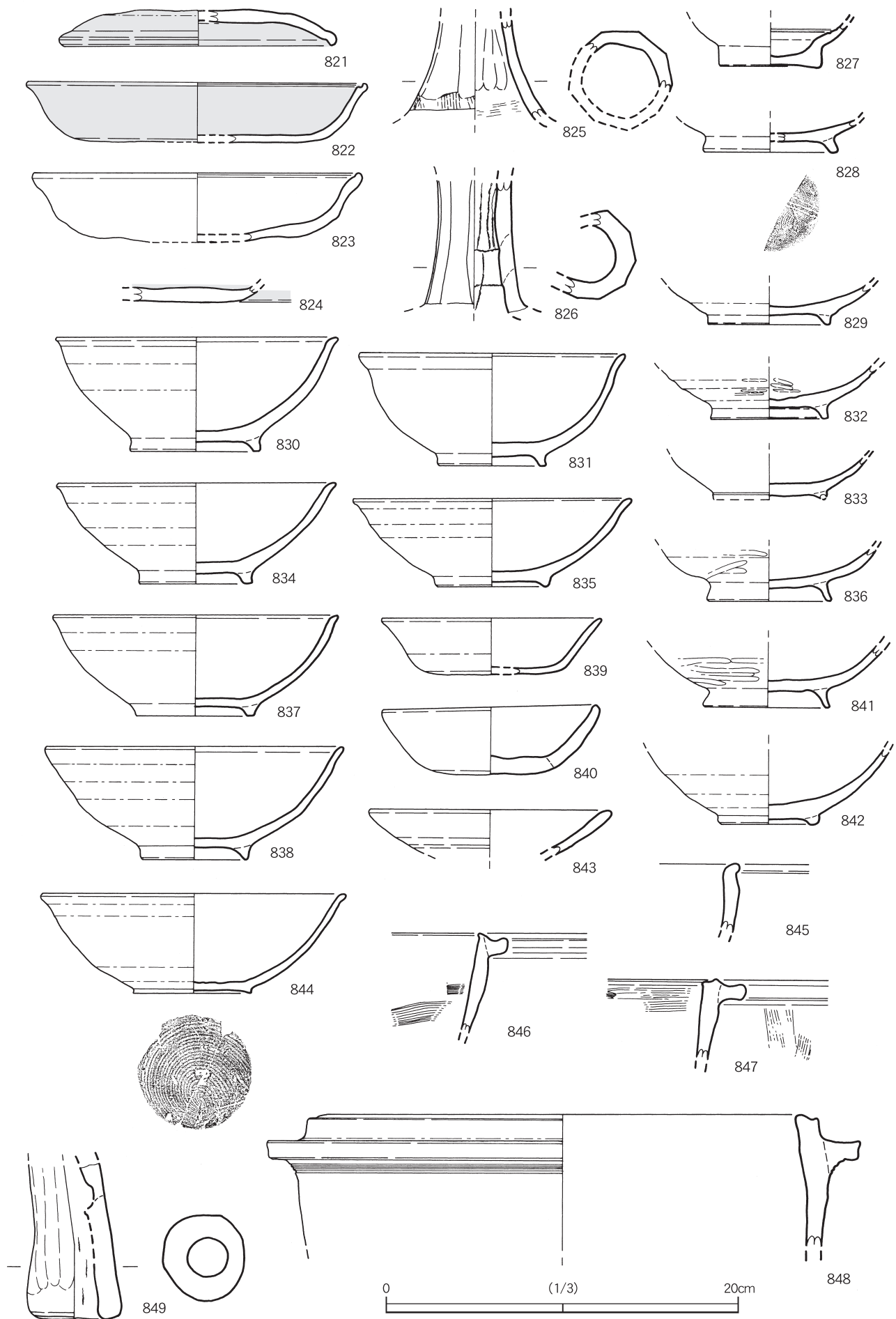
土師器 (第79図～第82
図、図版57～58)

821は杯蓋で、須恵器の模倣品である。内外面とも赤色顔料を塗布する。822～826は、都城系土師器である。822は皿で、口縁部はわずかに外反し、端部は内面に段をもつ。内外面とも赤色顔料を塗布する。824も内外面とも赤色顔料を塗布する。823は皿で、端部は丸みを持ち、内側にわずかに段をもつ。825・826は高杯の脚部で、ヘラで面取りを行い、断面形は多角形をなす。

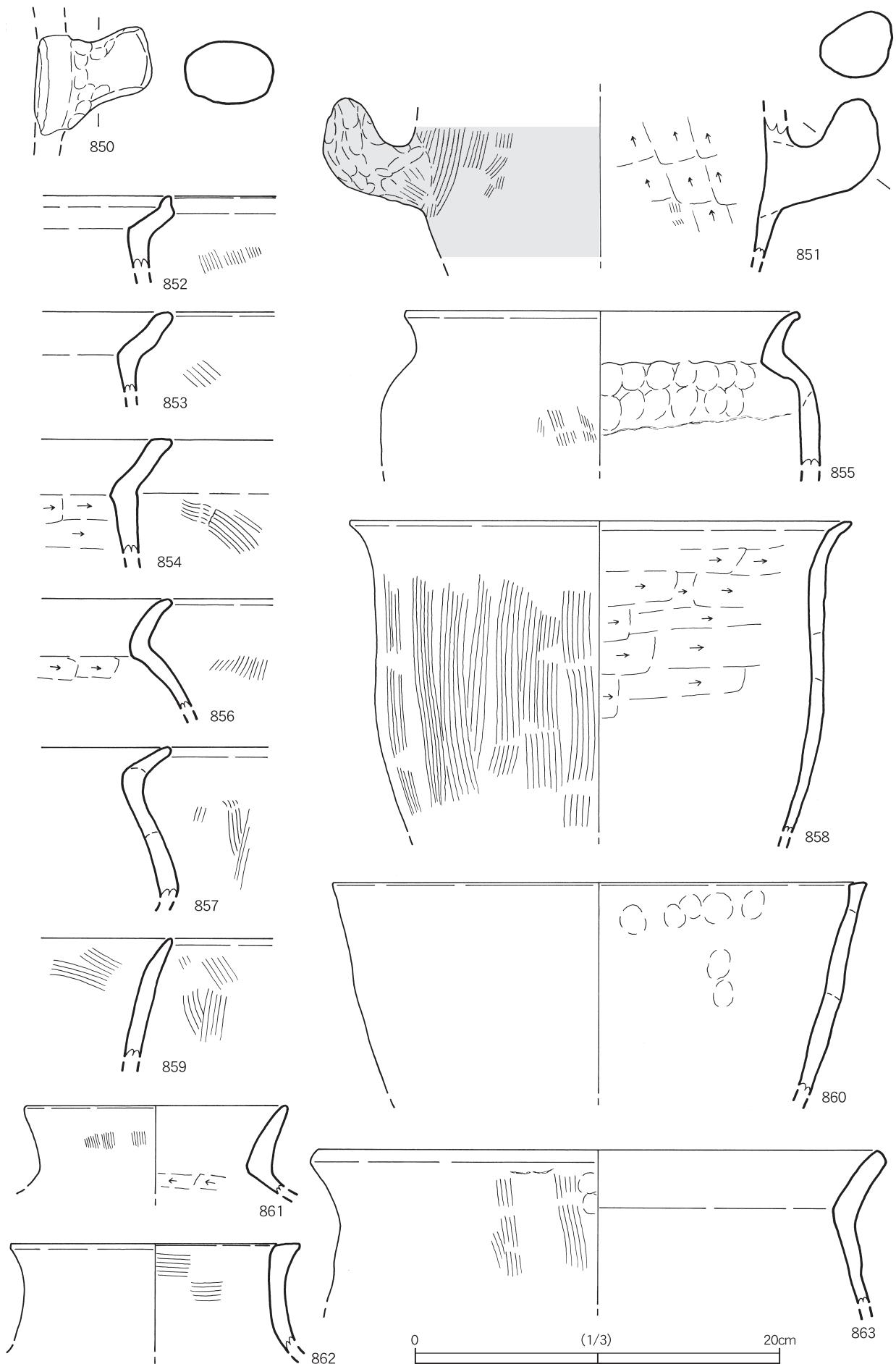
827～838、841・842・844は椀である。827は平底である。828は、底部外面にヘラで3本の平行線を描く。830・831・834・835・837・838は体部が内湾して立ち上がり、口縁部はやや外反し、端部は明瞭な面を持たない。底部に断面台形または三角形の高台を貼付する。836・841は胴部にミガキがみられ、高い高台を貼付する。844は平底で、外面は糸切りで



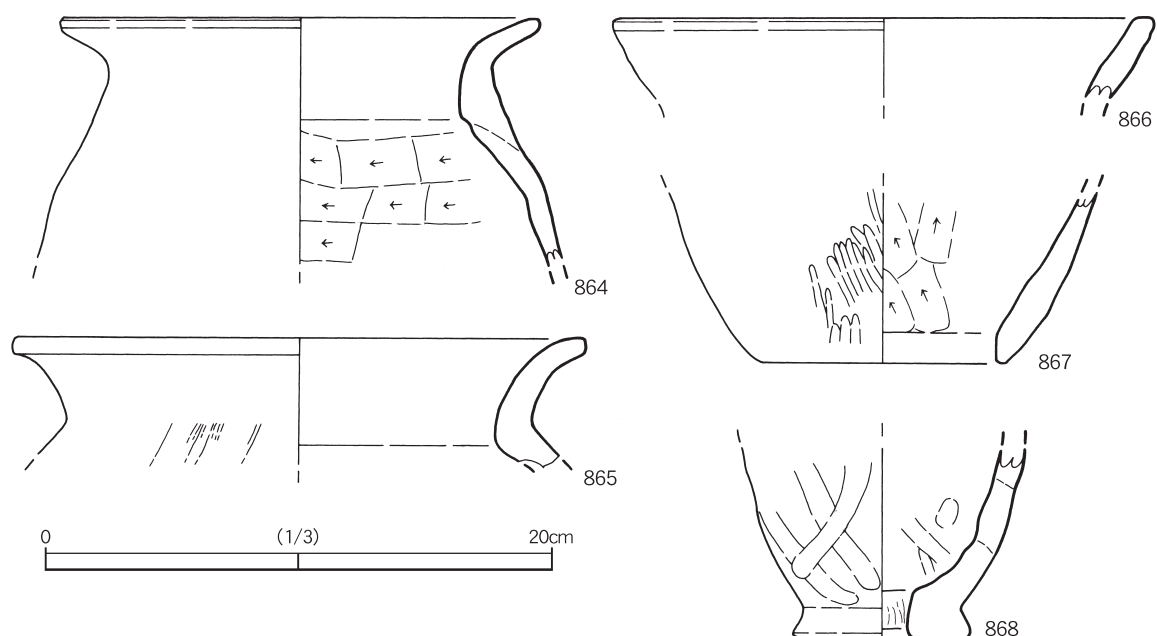
第78図 須恵器実測図①



第79図 土師器実測図⑤



第80図 土師器実測図⑥



第81図 土師器実測図⑦

ある。焼成は堅緻で、瓦質に近い。839・840は杯である。平底で、体部は外傾し、口縁部はやや丸みをもつ。839は器壁がやや薄く、840は厚手である。843は皿とみられる。845は口縁部が短く、わずかに外反する鉢である。

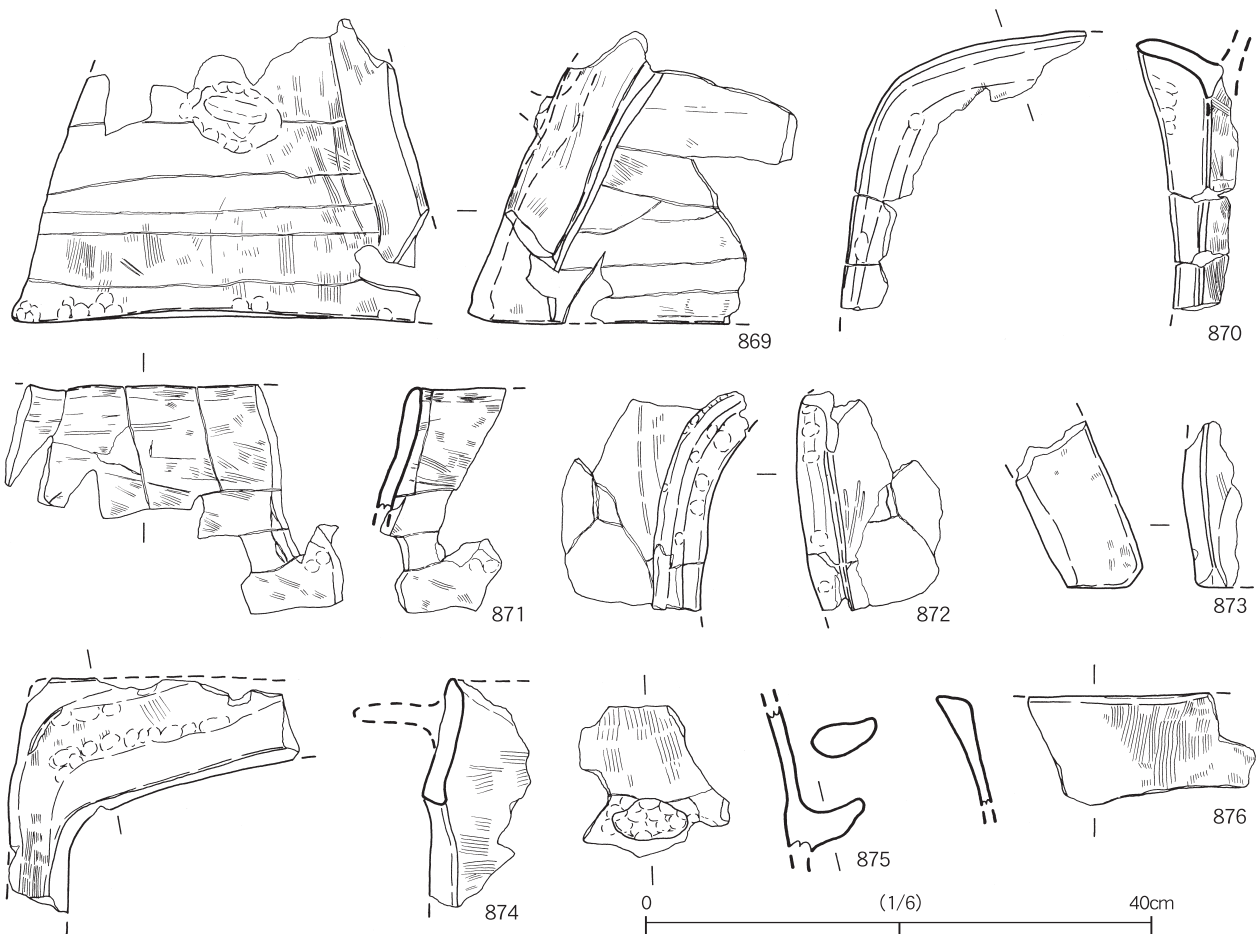
846～848は甕で、846・847は口縁部上端外面に粘土帯を貼付する。848は口縁部がわずかに内湾気味に立ち上がり、上端部からやや下に粘土帯を貼付する。849は支脚とみられる。体部はやや傾き、内部は中空である。850～860・863～868は甕または甑である。851は把手付で、外面に赤色顔料を塗布する。852～854・863は、屈折部内面に稜をもつ。855は肩が張り、胴部上位はほぼ直立する。858は、口縁部は緩やかに弧を描いて外反する。調整は外面ハケ、内面ヘラケズリである。860は体部から口縁部にかけて、直線的に立ち上がり、端部は面をもつ。867は甑で、体部は外傾して立ち上がる。868は底面中央に焼成前穿孔がある。器面は凹凸がきわめて激しい。861・862は壺とみられる。

移動式カマド（第82図、図版59）

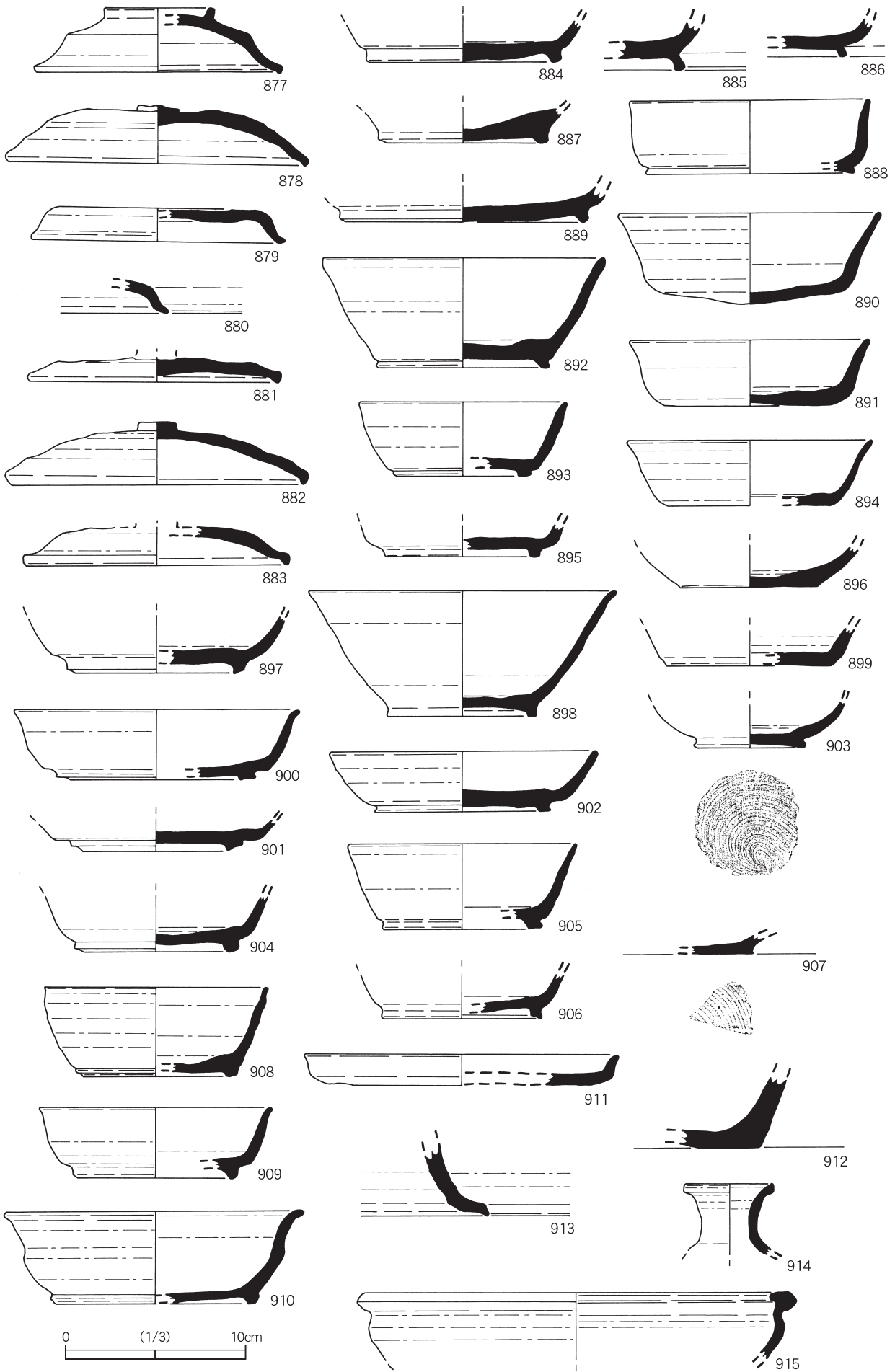
869～876は移動式カマドである。869は、前面の開口部の周囲に庇を貼付する。下端部はやや内湾し、器壁が厚い。側面に把手の基部が残り、把手は内壁から通して接合する。体部は成形時の粘土帯の痕跡を明瞭に残し、外面は下端部は指頭ナデ、他は縦方向のハケを施す。870は、前面の開口部周囲に貼り付けられた庇の一部である。剥落部分から、庇接合前にハケ調整を行ったことがわかる。871は把手の脱落痕跡があり、把手は内壁より通して接合していたことがわかる。内外面ともハケ調整を行う。874は前面にあたる部分で、やや内傾する。上端部より庇が剥落した痕がみられる。875は側面の把手部で、内傾する体部にやや上向きの短い把手を接合する。876は体部上部で、内傾して立ち上がり、上端部は拡張されて厚みを増す。移動式カマドには、図示した以外にも多量の破片が出土しているが、いずれも明瞭な二次焼成痕はみられない。また、従来県内で出土したものは開口部の縁に沿って庇が貼付されているが、今回出土したものは、開口部縁からやや離して庇を貼付している。

須恵器（第83・84図、図版60～62）

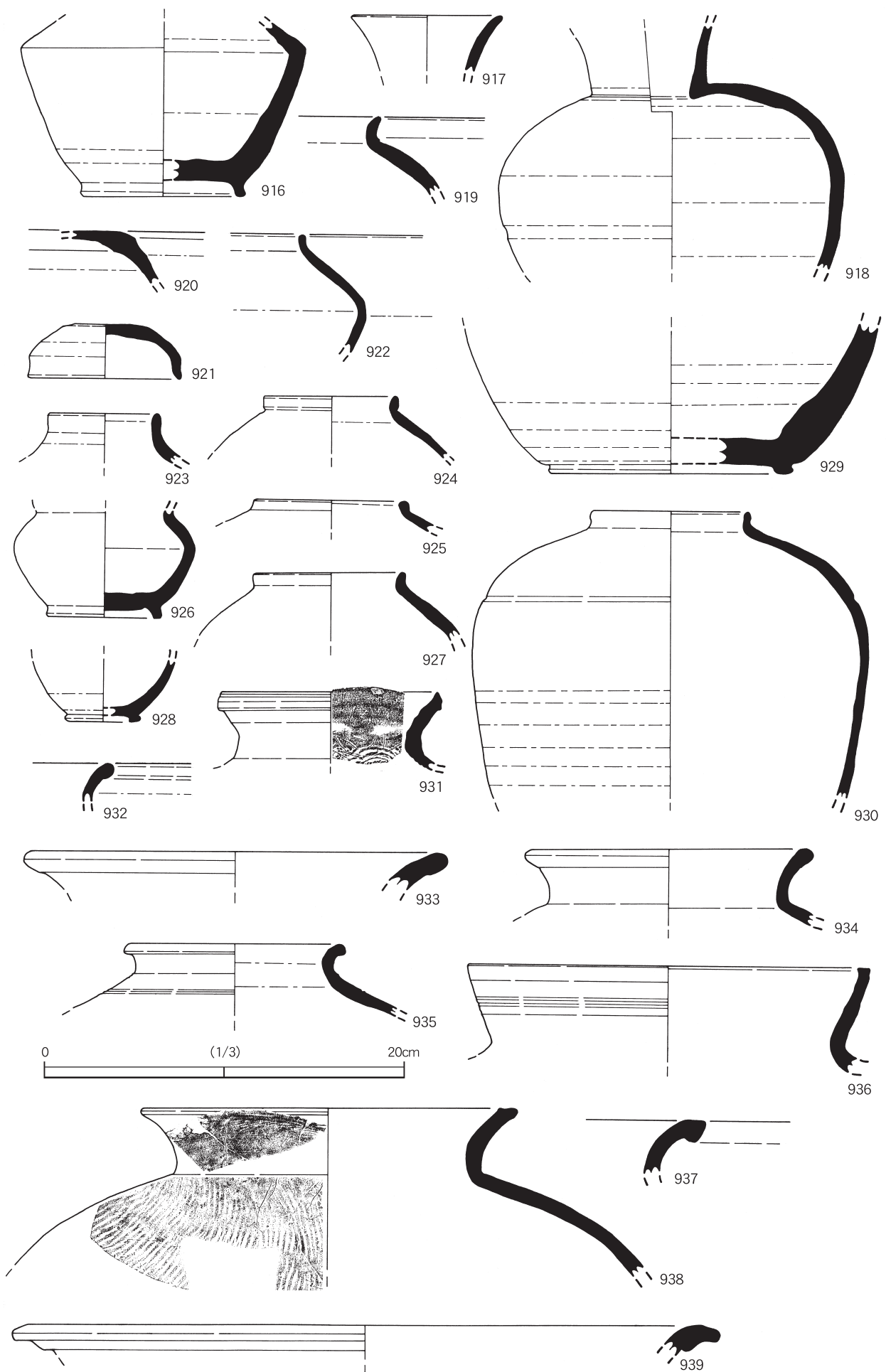
877～883は杯蓋である。877は天井部に環状つまみを貼付し、口縁端部は下方へ拡張する。878は天井部中央に低い宝珠つまみを貼付し、口縁端部は下方へ拡張する。879は天井部が平坦で口縁部は外方へ開く。天井部の調整はやや粗雑で、一応蓋としたが、皿の可能性もある。881は器高が低く、口縁端部は下方へ拡張する。天井部中央につまみの脱落痕跡がある。882は天井部中央にボタン状つまみを貼付し、口縁端部は下方へ拡張する。884～891・893～897・899～910は杯身である。890・891・894は、体部が外反して立ち上がり、口縁端部はやや丸みをもつ。897・900・901は高台下端部が傾斜する。900は体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反する。903・907は、底部は糸切りである。910は体部が外傾して立ち上がり、外反する口縁部が続く。端部はやや丸みをもつ。892・898は椀である。体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。底部外端に高台を貼付する。911は皿である。912は壺である。胴部は、底部外端から直線的に立ち上がる。913は高杯である。脚部は下位で屈折して外方へ広がり、端部はわずかに下方へ拡張する。914は提瓶とみられ、口縁部は弧を描いて外反し、端部はほぼ直立する面をもつ。915は鉢である。口縁部は屈曲し、端部を拡張する。916は長頸壺である。918は平瓶である。919・922～928・930は短頸壺である。930は端部が丸みをもつ短い口縁部に、上位が強く張る胴部が続く。920・921は短頸壺の蓋である。921は天井部は平坦面を形成した後、内湾気味に下り、口縁部はほぼ直立し、端部はわずかに外方へ反る。929は壺である。931～934・937～939は甕である。935・936は壺である。935は口縁部は弧を描いて外反する。936は口縁部は外傾してわずかに内湾しながら立ち上がり、端部は平坦面をもつ。



第82図 移動式カマド実測図



第83图 須惠器実測図②

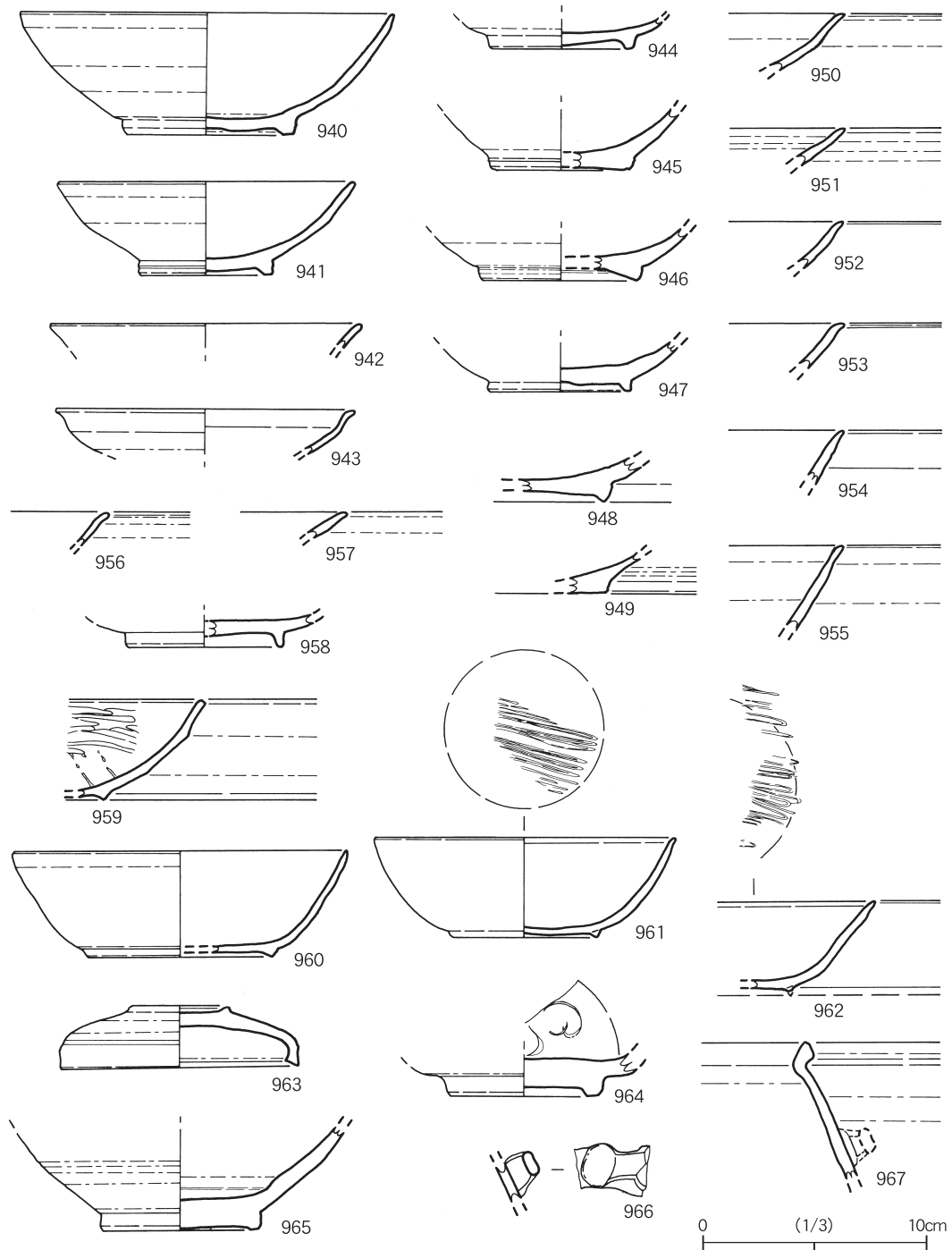


第84図 須恵器実測図③

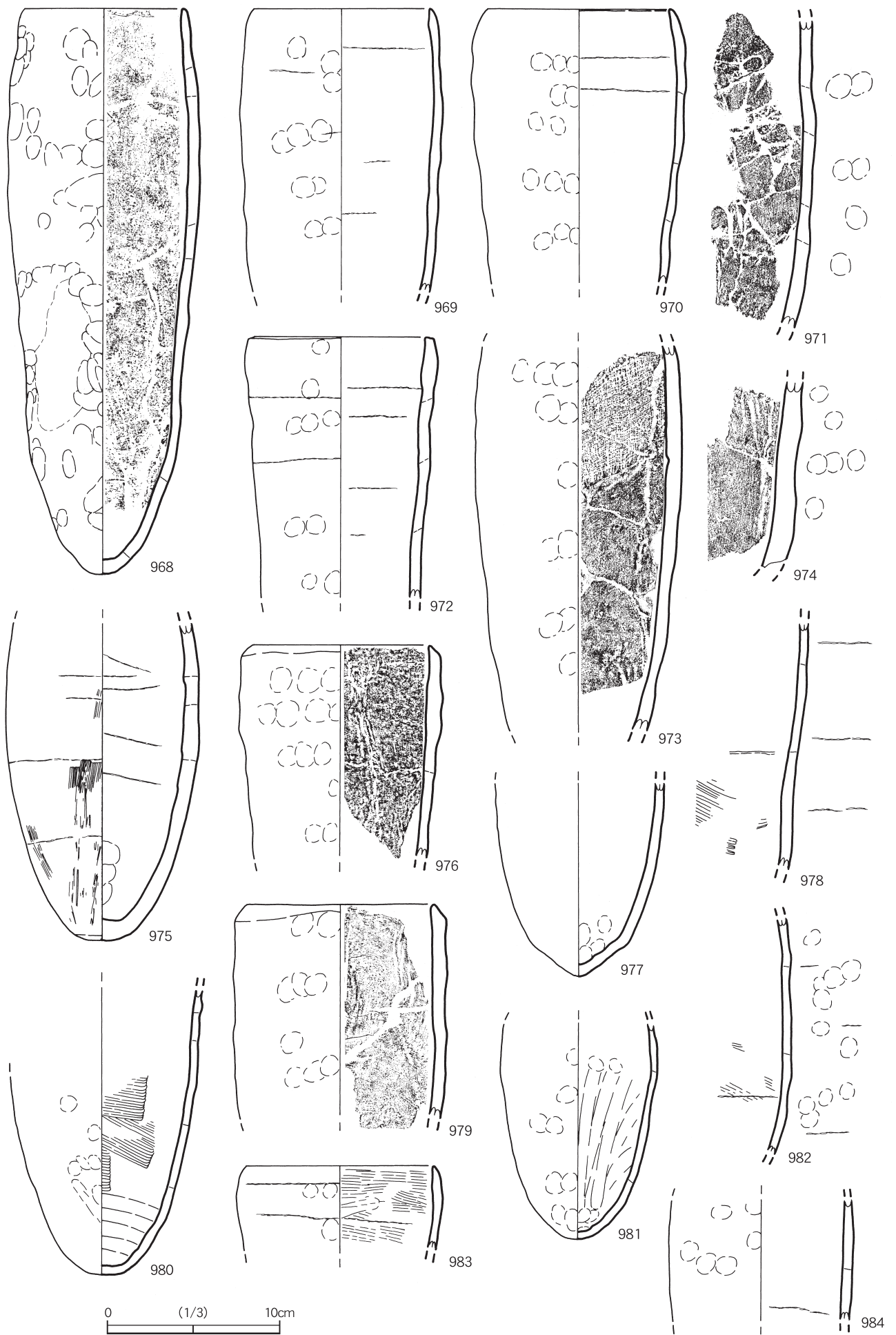
緑釉・灰釉・瓦器・黒色土器・陶磁器（第85図、図版62）

940～955は緑釉陶器である。941・945は土師器、他は須恵器に施釉している。940・941は体部は内湾しながら立ち上がり、口縁端部の面は不明瞭である。高台は削り出しによる。941は底部内面に重ね焼きによる無釉部がある。944・946～948も高台は削り出しによって作りだしている。出土した緑釉はほとんどが京都（畿内）産とみられる。956～958は灰釉陶器の椀または皿である。

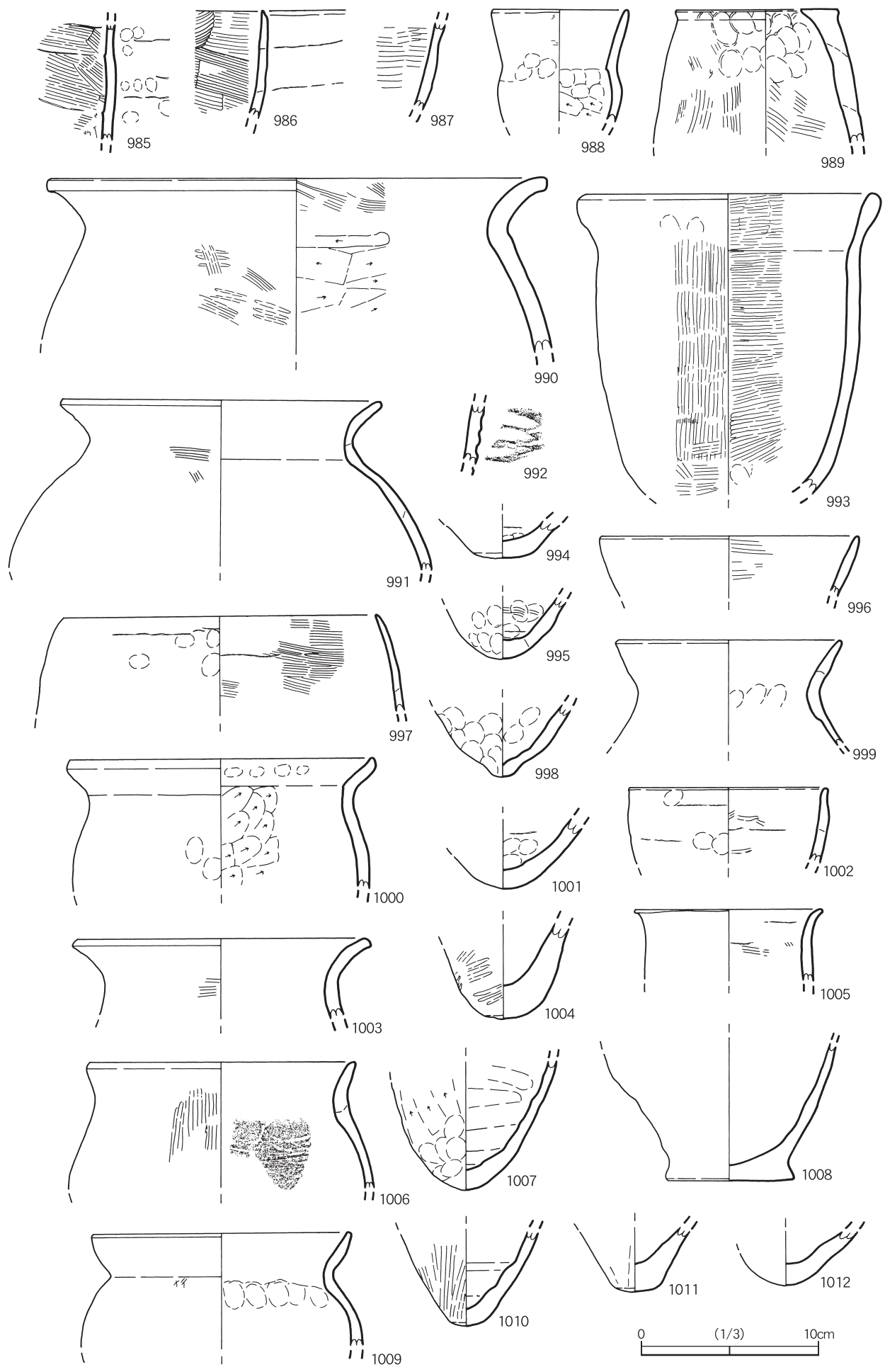
959は瓦器の椀である。内湾する体部は器面の起伏が激しく、口縁部はわずかに外反気味である。高台は先端が尖る三角形を呈する。外面はナデ調整、内面は横方向のヘラミガキを施すが、下半部は方向が一定しない。和泉産とみられる。960～962は黒色土器の椀である。体部は内湾し、口縁端部はやや尖り気味に丸くおさめ、高台は先端が尖る三角形を呈する。いわゆる内黒で、961・962は内面に幅



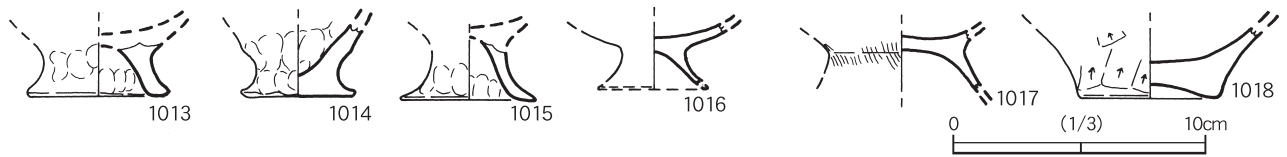
第85図 緑釉・灰釉・瓦器・黒色土器・陶磁器実測図



第86図 製塩土器実測図①



第87图 製塩土器実測图②



第88図 製塩土器実測図③

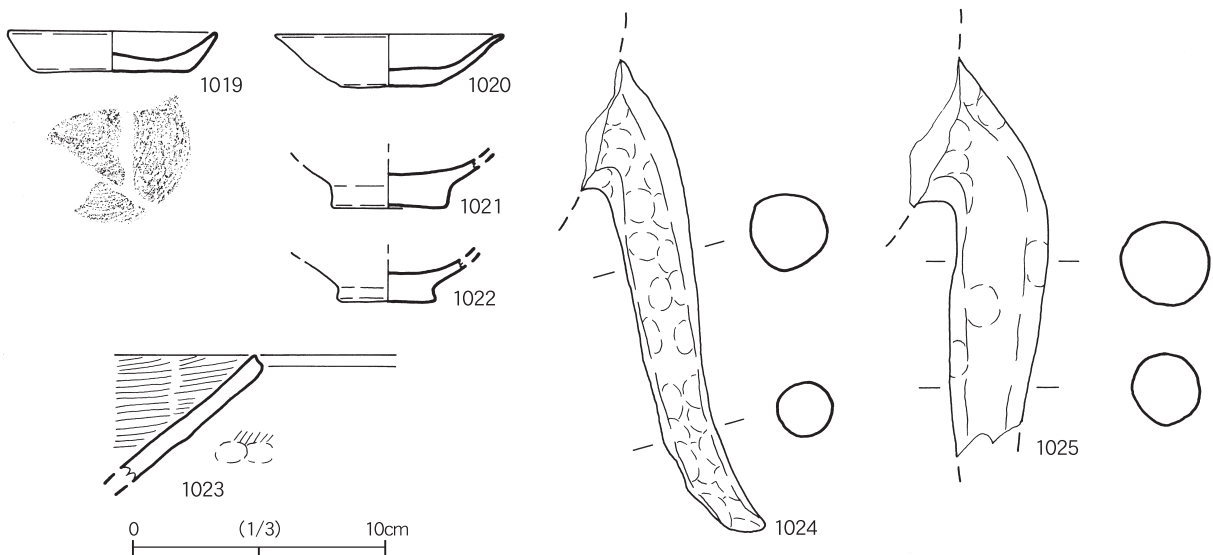
の狭いヘラミガキを丁寧に施している。

963は越州窯系の合子の蓋である。964は龍泉窯産の青磁碗である。965は白磁碗で、福建省周辺産とみられる。966、967は同一個体で、浙江省または福建省産とみられる褐釉四耳壺である。

製塩土器（第86図～第88図、図版63～65）

968～986は、全形が砲弾形をなす製塩土器である。口径は、約9cm～11cm程度である。外面調整はナデで指頭圧痕があるものが多いが、内面調整は、布目圧痕とハケやナデのものがある。968は、底部は丸底で、体部は凹凸を繰り返しながら内湾気味に立ち上がり、中位よりやや上で最大径に達した後、にせいに窄まる。口縁部は外側がやや傾斜面をなすが、端部はナデにより丸くおさめている。口径は約9cm、最大径11cm、器高は33cmである。外面は指頭によるナデ、内面は布目圧痕がみられる。969・970・983・986は体部上位で最大径に達した後、口縁部に向かってにせいに窄まり、端部は細く尖り気味に仕上げている。粘土帯の接合痕跡が明瞭に残る。972は最大径は口縁部直下で、底部に向かってにせいに窄まる。口縁端部は水平面を持ち、体部に粘土帯の接合痕跡を明瞭に残す。976・979は口縁部直下が最大径となり、下位に向かって緩やかに窄まる。口縁端部は、外側が下がる傾斜面をもつ。内面には布目圧痕がみられる。971・973・974も、内面に布目圧痕がみられる。974は他と比べ、著しく器壁が厚い。六連式製塩土器片は相当量が出土したが、内面の布目圧痕には、布目の粗さの違いが少なくとも3種類あり、うち最も目の細かいものは絹地以外は考えられない細かさである。

形状が砲弾形以外のものは、出土状況や形態、調整および胎土から、製塩土器とみられるものを抽出した。胎土については、六連式を含めて製塩土器とみられるものは、大部分が胎土中に赤色砂粒を含む。同時期の日常土器には、赤色砂粒を含むものは数少ない。しかし、遺構に伴って出土していないため、今後製塩土器か否かの再検討を要するものもある。また、ここでは製塩土器としなかったも

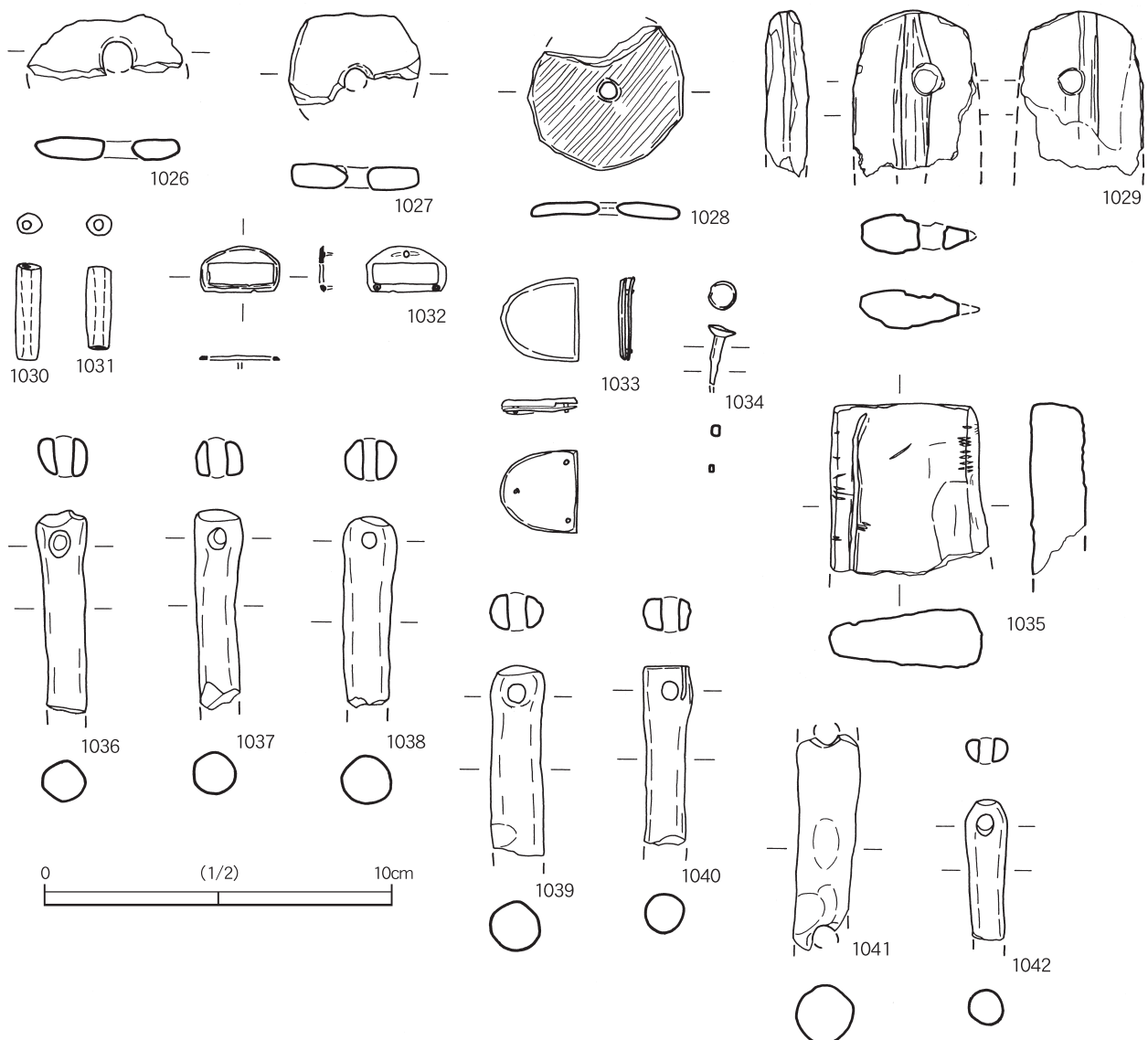


第89図 土師器実測図⑧，瓦質土器実測図

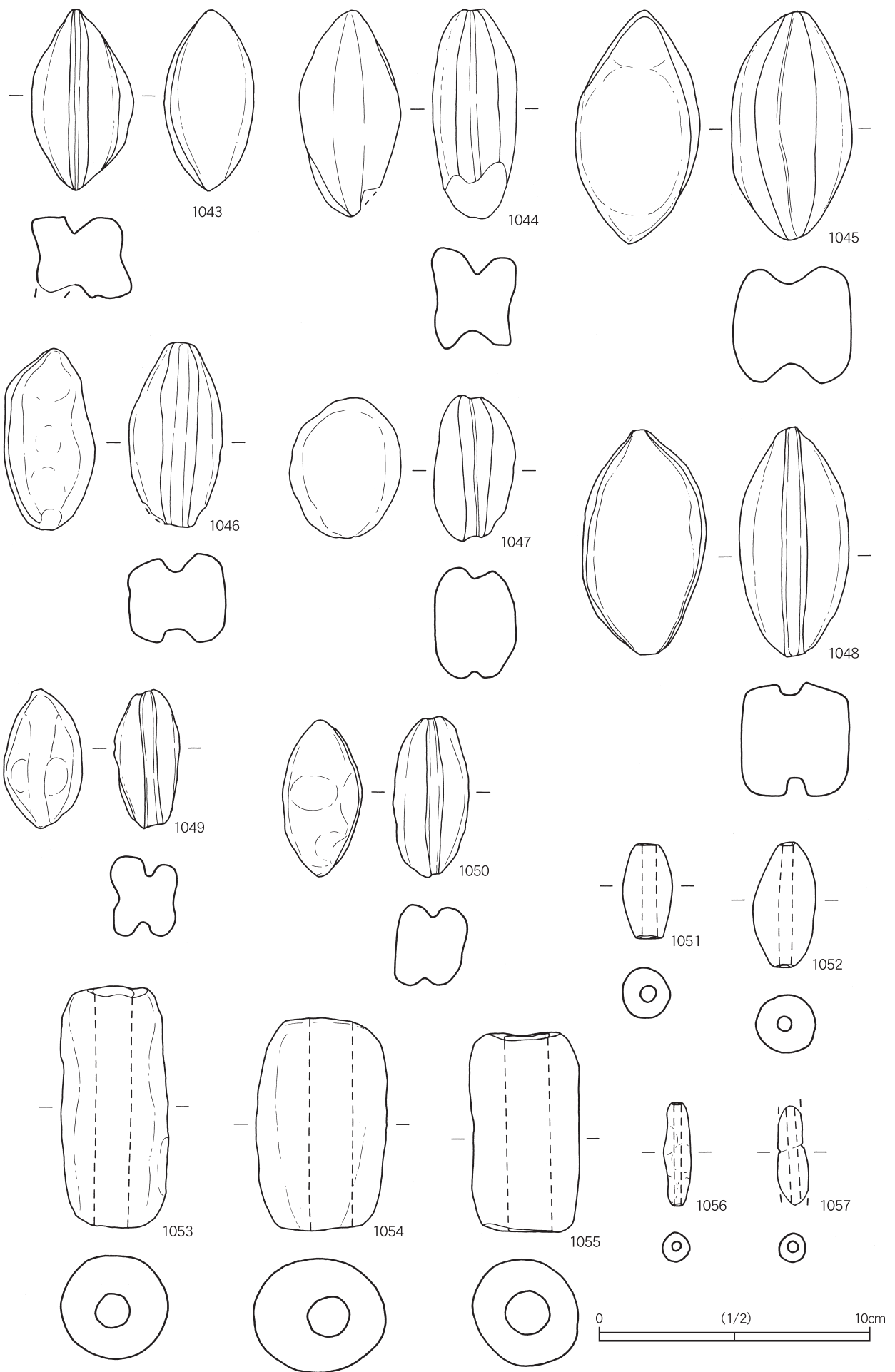
の中にも製塩土器が含まれる可能性がある。989は体部が内傾し、口縁端部は拡張して上面を平坦に整えている。内外面とも口縁部は指頭ナデ、体部はハケ調整である。990は甕形で、口縁部は弧を描いて外反する。外面はタタキを施した後、ハケやナデを行っている。993は胴部はやや長胴で中位が張り、口縁部は緩くくの字形に外反する。口縁端部付近はやや肥厚し、端部は丸みをもつ。外面は縦方向、内面は横方向のハケ調整。997は器壁が薄く、内傾して立ち上がり、口縁端部はやや尖り気味となる。粘土帯の接合痕跡がみられ、外面はナデ、内面はハケ調整である。1004は厚手で丸底をなし、外面はタタキを施している。1006は体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は緩やかに外反する。外面ハケ、内面は二枚貝による条痕調整である。1008は平底で、体部は内湾気味に立ち上がり、器面は目立った凹凸をもつ。1013・1015は台部、1014は平底の底部で、いずれも内外面とも指頭ナデである。1016・1017は台部～体部、1018は底部で、外面にヘラケズリ調整を施している。

中世土師器・瓦質土器（第89図、図版65）

1019～1022・1024・1025は土師器である。1019・1020は皿で、底部は糸切りである。1021・1022は底部がやや低い柱状高台皿である。1024・1025は足釜とみられる脚部で、表面には指頭圧痕がみられる。1023は瓦質の捏鉢で、内面は横方向のハケメが施される。



第90図 土製品実測図③，石製品実測図⑮，金属製品実測図



第91图 土製品実測图④